

或る女

(前編)

有島武郎

青空文庫

一

新橋^{しんばし}を渡る時、発車を知らせる二番目の鈴^{ベル}が、霧とまではいえない九月の朝の、煙^{けむ}つた空気に包まれて聞こえて来た。葉子^{ようこ}は平気でそれを聞いたが、車夫は宙を飛んだ。そして車が、鶴屋^{つるや}という町のかどの宿屋を曲がって、いつでも人馬の群がるあの共同井戸のあたりを駆けぬける時、停車場の入り口の大戸をしめようとする駅夫と争いながら、八分^ぶがたしまりかかった戸の所に突っ立ってこつちを見まもっている青年の姿を見た。

「まあおそくなつてすみませんでした事……まだ間に合いますかしら」

と葉子がいいながら階段をのぼると、青年は粗末な麦^{むぎ}稈^{わら}帽子をちよつと脱いで、黙^もつたまま青い切符^{きっぷ}を渡した。

「おやなぜ一等になさらなかったの。そうしないといけないわけがあるからかえてくださいますな」

というとしたけれども、火がつくばかりに駅夫がせき立てるので、葉子は黙^もつたまま青年とならんで小刻みな足どりで、たった一つだけあいている改札口へと急いだ。改札は

この二人の乗客を苦々しげに見やりながら、左手を延ばして待っていた。二人がてんでんに切符を出そうとする時、

「若奥様、これをお忘れになりました」

といいながら、羽被の紺の香いの高くするさっきの車夫が、薄い大柄なセルの膝掛けを肩にかけたままあわてたように追いかけて来て、オリ―ヴ色の絹ハンケチに包んだ小さな物を渡そうとした。

「早く早く、早くしないと出つちいますよ」改札がたまらなくなつて痼癩声をふり立てた。

青年の前で「若奥様」と呼ばれたのと、改札ががみどなり立てたので、針のように鋭い神経はすぐ彼女をあまのじやくにした。葉子は今まで急ぎ気味であつた歩みをぴたり止めてしまつて、落ち付いた顔で、車夫のほうに向きなかつた。

「そう御苦労よ。家に帰つたらね、きようは帰りがおそくなるかもしれませんから、お嬢さんたちだけで校友会にいらつしやいつてそういつておくれ。それから横浜の近江屋――西洋小間物屋の近江屋が来たら、きようこつちから出かけたからつていうようにつてね」
車夫はきよときよと改札と葉子とをかたみがわりに見やりながら、自分が汽車にでも

乗りおくれるようにあわてていた。改札の顔はだんだん険しくなつて、あわや通路をしめてしまおうとした時、葉子はするするとそのほうに近よつて、

「どうもすみませんでした事」

といつて切符をさし出しながら、改札の目の先で花が咲いたようにほほえんで見せた。改札はばかになつたような顔つきをしながら、それでもおめおめと切符に孔あなを入れた。

プラットフォームでは、駅員も見送り人も、立つている限りの人々は二人のほうに目ふたりを向けていた。それを全く気づきもしないような物腰ものごしで、葉子は親しげに青年と肩を並べて、しずしずと歩きながら、車夫の届けた包み物の中には何があるかあててみるとか、横浜のように自分の心をひく町はないとか、切符を一緒にしまつておいてくれるとかいつて、音楽者のようにデリケートなその指先で、わざとらしく幾度か青年の手に触れる機会を求めた。列車の中からはある限りの顔が二人を見迎え見送るので、青年が物慣れない処女しよじよのようににはかんで、しかも自分ながら自分を怒おこっているのが葉子にはおもしろくながめやられた。

いちばん近い二等車の昇降口の所に立つていた車掌は右の手をポケットに突っ込んで、靴くつの爪つまさき先で待ちどおしそうに敷き石をたたいていたが、葉子がデッキに足を踏み入れる

と、いきなり耳をつんざくばかりに呼び子を鳴らした。そして青年（青年は名を古藤こととうといった）が葉子に続いて飛び乗った時には、機関車の応笛おうてきが前方で朝の町のにぎやかなさざめきを破つて響き渡つた。

葉子は四角なガラスをはめた入り口の繰り戸を古藤が勢いよくあけるのを待つて、中にはいろいろとして、八分通りつまつた両側の乗客に稲妻いなずまのように鋭く目を走らしたが、左側の中央近く新聞を見入つた、やせた中年の男に視線がとまると、はつと立ちすくむほど驚いた。しかしその驚きはまたたく暇もないうちに、顔からも足からも消えうせて、葉子は悪びれわるもせず、取りすましもせず、自信ある女優が喜劇の舞台にでも現われるように、軽い微笑を右の頬ほおだけに浮かべながら、古藤に続いて入り口に近い右側の空席に腰をおろすと、あでやかに青年を見返りながら、小指をなんともいえないよい形に折り曲げた左手で、鬢びんの後れ毛おくげをかきなでるついでに、地味じみに装つて来た黒のリボンにさわつてみた。青年の前に座を取つていた四十三四の脂あぶらぎつた商人体ていの男は、あたふたと立ち上がつて自分の後ろのシェードをおろして、おりふし横ざしに葉子に照りつける朝の光線をさえぎつた。紺かすりの飛白しよせいに書生下駄しよせいたをつつかけた青年に対して、素性すじようが知れぬほど顔にも姿にも複雑な表情をたたえたこの女性の対照は、幼い少女の注意をすらひかずにはおかなかった。乗

客一同の視線は綾あやをなして二人ふたりの上に乱れ飛んだ。葉子は自分が青年の不思議な対照にな
っているという感じを快く迎えてでもいるように、青年に対してことさら親しげな態度を
見せた。

品川しながわを過ぎて短いトンネルを汽車が出ようとする時、葉子はきびしく自分を見すえる
目を眉まゆのあたりに感じておもむろにそのほうを見かえた。それは葉子 thought とおり、
新聞に見入っているかのやせた男だった。男の名は木部孤※となったが、笑えみかまけたひ
とみはそのままで、するすると男の顔を通り越して、左側の古藤の血気けつきのいい頬ほおのあたり
に落ちた。古藤は繰り戸のガラス越しに、切り割りの岨がけをながめてつくねんとしていた。

「また何か考えていらつしやるのね」

葉子はやせた木部きべにこれ見よがしという物腰ではなやかにいった。

古藤はあまりはずんだ葉子の声にひかされて、まんじりとその顔を見守った。その青年
の単純あかな明らさまな心に、自分の笑顔えがおの奥の苦い渋い色が見抜かれはしないかと、葉子は
思わずたじろいだほどだった。

「なんにも考えていやしないが、陰になった岨がけの色が、あまりきれいだもんで……紫に見
えるでしょう。もう秋がかって来たんですよ。」

青年は何も思っていはしなかったのだ。

「ほんとうにね」

葉子は単純に応じて、もう一度ちらつと木部を見た。やせた木部の目は前と同じに鋭く輝いていた。葉子は正面に向き直るとともに、その男のひとみの下で、悵鬱ゆううつな険しい色を引きしめた口のあたりにみなぎらした。木部はそれを見て自分の態度を後悔すべきはずである。

二

葉子は木部が魂を打ちこんだ初恋の的まじだった。それはちょうど日清戦争が終局を告げて、国民一般はだれかれの差別なく、この戦争に関係のあった事柄や人物やに事実以上の好奇心をそそられていたころであつたが、木部は二十五という若い齡としで、ある大新聞社の従軍記者になつてシナに渡り、月並みな通信文の多い中に、きわだつて觀察の飛び離れた心力のゆらいだ文章を発表して、天才記者という名を博してめでたく凱旋がいせんしたのであつた。そのころ女流キリスト教徒の先覚者として、キリスト教婦人同盟の副会長をしていた

葉子の母は、木部の属していた新聞社の社長と親しい交際のあつた関係から、ある日その社の従軍記者を自宅に招いて慰労の会食を催した。その席で、小柄で白^{こがら}皙^{はくせき}で、詩吟の声の悲壮な、感情の熱烈なこの少壮従軍記者は始めて葉子を見たのだつた。

葉子はその時十九だつたが、すでに幾人もの男に恋をし向けられて、その囲みを手ぎわよく繰りぬけながら、自分の若い心を楽しませて行くタクトは充分に持っていた。十五の時に、袴^{はかま}をひもで締^しめる代わりに尾錠^{びじょう}で締めるくふうをして、一時女学生界の流行を風靡^{うゐ}したのも彼女である。その紅^{あか}い口びるを吸わして首席を占めたんだと、嚴格で通^{とお}つている米国人の老校長に、思いもよらぬ浮き名を負わせたのも彼女である。上野^{うえの}の音楽学校にはいつてヴァイオリンのけいこを始めてから二か月ほどの間^{あいだ}にめきめき上達して、教師や生徒の舌を巻かした時、ケーベル博士^{はかせ}二人は洩^{はかせ}い顔をした。そしてある日「お前の楽器は才で鳴るのだ。天才で鳴るのではない」と無^む愛^{あい}想^{そう}にいつてのけた。それを聞くと「そうでございますか」と無^む造^{ぞう}作^{さく}にいいながら、ヴァイオリンを窓の外にほうりなげて、そのまま学校を退学してしまったのも彼女である。キリスト教婦人同盟の事業に奔走し、社会では男まさりのしっかり者という評判を取り、家内では趣味の高いそして意志の弱^{おつと}い良人を全く無視して振る舞つたその母の最も深い隠れた弱点を、拇^ぼ指^しと食^{しょく}指^しとの間^{あいだ}にちゃんと押

えて、一步もひけを取らなかつたのも彼女である。葉子の目にはすべての人が、ことに男が底の底まで見すかせるようだった。葉子はそれまで多くの男をかなり近くまで潜り込ませて置いて、もう一步という所で突つ放した。恋の始めにはいつでも女性が祭り上げられていて、ある機会を絶頂に男性が突然女性を踏みにじるといふ事を直覚のように知つていた。葉子は、どの男に対しても、自分との関係の絶頂がどこにあるかを見ぬいていて、そこに来かかると情け容赦もなくその男を振り捨ててしまった。そうして捨てられた多くの男は、葉子を恨むよりも自分たちの獸性を恥じるように見えた。そして彼らは等しく葉子を見誤つていた事を悔いるように見えた。なぜかというと、彼らは一人として葉子に対して怨恨をいだいたり、憤怒をもらしたりするものはなかったから。そして少しひがんだ者たちは自分の愚を認めるよりも葉子を年不相当にませた女と見るほうが勝手だったから。

それは恋によろしい若葉の六月のある夕方だった。日本橋の釘店にある葉子の家には七八人の若い従軍記者がまだ戦塵の抜けきらないようなふうをして集まって来た。十九でいながら十七にも十六にも見れば見られるような華奢な可憐な姿をした葉子が、慎みの中にも才走つた面影を見せて、二人の妹と共に給仕に立った。そしてしいられるままに、ケーベル博士からののしられたヴァイオリンの一手も奏でたりした。木部の全

霊はただ一目でこの美しい才氣のみなぎりあふれた葉子の容姿に吸い込まれてしまった。
 葉子も不思議にこの小柄な青年に興味を感じた。そして運命は不思議ないたずらをするも
 のだ。木部はその性格ばかりでなく、容貌——骨細な、顔の造作の整った、天才風に
 蒼白いなめらかな皮膚の、よく見ると他の部分の繊麗な割合に下顎骨の発達した——
 までどこか葉子のそれに似ていたから、自意識の極度に強い葉子は、自分の姿を木部に
 つけ出したように思つて、一種の好奇心を挑発せられずにはいなかった。木部は燃え
 やすい心に葉子を焼くようにかきいだいて、葉子はまた才走った頭に木部の面影を軽く宿
 して、その一夜の饗宴はさりげなく終わりを告げた。

木部の記者としての評判は破天荒といつてもよかつた。いやしくも文学を解するもの
 は木部を知らないものはなかつた。人々は木部が成熟した思想をひっさげて世の中に出て
 来る時の華々しさをうわさし合つた。ことに日清戦役という、その当時の日本にしては
 絶大な背景を背負っているの、この年少記者はある人々からは英雄の一人とさえして
 崇拜された。この木部がたびたび葉子の家を訪れるようになった。その感傷的な、同時に
 どこか大望に燃え立ったようなこの青年の活気は、家じゅうの人々の心を捕えないでは
 置かなかつた。ことに葉子の母が前から木部を知つていて、非常に有為多望な青年だとほ

めそやしたり、公衆の前で自分の子とも弟ともつかぬ態度で木部をもてあつかつたりするのを見ると、葉子は胸の中でせせら笑った。そして心を許して木部に好意を見せ始めた。木部の熱意が見る見る抑えがたく募り出したのはもちろんの事である。

かの六月の夜が過ぎてからほどもなく木部と葉子とは恋という言葉で見られねばならぬような間柄あいだがらになつていた。こういう場合葉子がどれほど恋の場面を技巧化し芸術化するに巧みであつたかはいうに及ばない。木部は寝ても起きても夢の中にあるように見えた。

二十五というそのころまで、熱心な信者で、清教徒風せいきょうふうの誇りを唯一の立場としていた

木部がこの初恋においてどれほど真剣になつていたかは想像する事ができる。葉子は思いもかけず木部の火のような情熱に焼かれようとする自分を見いだす事がしばしばだった。

そのうちに二人の間柄ふたりはすぐ葉子の母に感づかれた。葉子に対してかねてからある事では一種の敵意を持つてさえいるように見えるその母が、この事件に対して嫉妬しつととも思われるほど嚴重な故障を持ち出したのは、不思議でないというべき境さかいを通り越していた。世故せこに慣れきつて、落ち付き払つた中年の婦人が、心の底の動搖に刺激されてたくらみ出すと見える殘虐な譎計わるだくみは、年若い二人の急所をそろそろとうかがいよつて、腸も通れと突き刺してくる。それを払いかねて木部が命限りにもがくのを見ると、葉子の心に純粹な同

情と、男に対する無条件的な捨て身な態度が生まれ始めた。葉子は自分で造り出した自分の穽おとしあなにたわいもなく酔い始めた。葉子はこんな目くらむような晴れ晴れしいものを見た事がなかった。女の本能が生まれて始めて芽をふき始めた。そして解剖刀メスのような日ごろの批判力は鉛のように鈍ってしまった。葉子の母が暴力では及ばないのを悟って、すかしつなだめつ、良人おとこまでを道具につかったり、木部の尊信する牧師を方便にしたりして、あらん限りの知力をしばった懷柔策も、なんのかいもなく、冷静な思慮深い作戰計画を根氣こんきよく続ければ続けるほど、葉子は木部を後ろにかばいながら、健氣けなげにもか弱い女の手一つで戦った。そして木部の全身全霊を爪つめの先想いの果てまで自分のものにしなければ、死んでも死ねない様子が見えたので、母もとうとう我がを折った。そして五か月の恐ろしい試練の後に、両親の立ち会わない小さな結婚の式が、秋のある午後、木部の下宿げしゆくの一間で執り行なわれた。そして母に対する勝利の分捕り品ぶんどりひんとして、木部は葉子一人のものとなった。木部はすぐ葉山はやまに小さな隠れ家がのような家を見つけ出して、二人はむつまじくそこに移り住む事になった。葉子の恋はしかしながらそろそろと冷え始めるのに二週間以上を要しなかった。彼女は競争すべからぬ関係の競争者に対してみごとに勝利を得てしまった。日清戦争というものの光も太陽が西に沈むたびごとに減じて行つた。それらはそれとしてい

ちばん葉子を失望させたのは同棲後始めて男というものの裏を返して見た事だった。葉子を確実に占領したという意識に裏書きされた木部は、今までおくびにも葉子に見せなかつた女々しい弱点を露骨に現わし始めた。後ろから見た木部は葉子には取り所のない平凡な気の弱い精力の足りない男に過ぎなかつた。筆一本握る事もせず朝から晩まで葉子に膠着し、感傷的なくせに恐ろしくわがままで、今日今日の生活にさえ事欠きながら、万事を葉子の肩になげかけてそれが当然な事でもあるような鈍感なお坊ちゃんじみた生活のしかたが葉子の鋭い神経をいらさせ出した。始めのうちは葉子もそれを木部の詩人らしい無邪気さからだと思つてみた。そしてせつせつせと世話女房らしく切り回す事に興味をつないでみた。しかし心の底の恐ろしく物質的な葉子にどうしてこんな辛抱がいつまでも続こうぞ。結婚前までは葉子のほうから迫つてみたにも係わらず、崇高と見えるまでに極端な潔癖屋だった彼であつたのに、思いもかけぬ貪婪な陋劣な情欲の持ち主で、しかもその欲求を貧弱な体質で表わそうとするのにつくわすと、葉子は今まで自分でも気がつかずにいた自分を鏡で見せつけられたような不快を感じずにはいられなかつた。夕食を済ますと葉子はいつでも不満と失望とでいらしながら夜を迎えねばならなかつた。木部の葉子に対する愛着が募れば募るほど、葉子は一生が暗くなりまさるうに思つた。

こうして死ぬために生まれて来たのではないはずだ。そう葉子はくさくさしながら思い始めた。その心持ちがまた木部に響いた。木部はだんだん監視の目をもって葉子の一挙一動を注意するようになって来た。同棲どうせいしてから半か月もたたないうちに、木部はややもすると高圧的に葉子の自由を束縛するような態度を取るようになった。木部の愛情は骨にしてみるほど知り抜きながら、鈍っていた葉子の批判力はまた磨みがきをかけられた。その鋭くなつた批判力で見ると、自分と似よつた姿なり性格なりを木部に見いだすという事は、自然が巧妙な皮肉をやっているようなものだつた。自分もあんな事を想おもい、あんな事をいうのかと思うと、葉子の自尊心は思う存分に傷つけられた。

ほかの原因もある。しかしこれだけで充分だつた。二人が一緒になつてから二か月目に、葉子は突然失蹤しつそうして、父の親友で、いわゆる物事のよくわかる高山たかやまという医者み者の病室に閉じこもらしてもらつて、三日ばかりは食う物も食わずに、浅ましくも男のために目のくらんだ自分の不覚を泣き悔やんだ。木部が狂氣のようになって、ようやく葉子の隠れ場所を見つけて会いに来た時は、葉子は冷静な態度でしらじらしく面会した。そして「あなたの将来のおためにきつとなりませんから」と何げなげにいつてのけた。木部がその言葉に骨を刺すような諷刺ふうしを見いだしかねているのを見ると、葉子は白くそろつた美しい歯を

見せて声を出して笑った。

葉子と木部との間柄はこんなたわいもない場面を区切りにしてはかなくも破れてしまった。木部はあらんかぎりの手段を用いて、なだめたり、すかしたり、強迫までしてみたが、すべては全く無益だった。いったん木部から離れた葉子の心は、何者も触れた事のない処女のそのようにさえ見えた。

それから普通の期間を過ぎて葉子は木部の子を分娩ぶんべんしたが、もとよりその事を木部に知らせなかったばかりでなく、母にさえある他の男によって生んだ子だと告白した。実際葉子はその後、母にその告白を信じさすほどの生活をあえてしていたのだった。しかし母は目ざとくもその赤ん坊に木部の面影を探り出して、キリスト信徒にあるまじき悪意をこのあわれな赤ん坊に加えようとした。赤ん坊は女中部屋じょちゅうべやに運ばれたまま、祖母の膝ひざには一度も乗らなかつた。意地いじの弱い葉子の父だけは孫のかわいさからそつと赤ん坊を葉子の乳母うばの家に引き取るようにしてやった。そしてそのみじめな赤ん坊は乳母の手一つに育てられて定子さだこという六歳の童女になった。

その後葉子の父は死んだ。母も死んだ。木部は葉子と別れてから、狂瀾きょうらんのような生活に身を任せた。衆議院議員の候補に立つてもみたり、純文学に指を染めてもみたり、旅

僧のような放浪生活も送ったり、妻を持ち子を成し、酒にふけり、雑誌の発行も企てた。そしてそのすべてに一々不満を感じるばかりだった。そして葉子が久しぶりですら車の中で出あった今は、妻子を里に返してしまつて、ある由緒ある堂上華族の寄食者となつて、これといつてする仕事もなく、胸の中だけにはいろいろな空想を浮かべたり消したりして、とかく回想にふけりやすい日送りをしてゐる時だった。

三

その本部の目は執念くもつきまつた。しかし葉子はそつちを見向こうともしなかつた。そして二等の切符でもかまわないからなぜ一等に乘らなかつたのだろう。こういう事がきつとあると思つたからこそ、乗り込む時もそういうおうとしたののに、気がきかないぢやないと思うと、近ごろになく起きぬけからさえぎえていた気分が、沈みかけた秋の日のように陰つたりめいつたりし出して、冷たい血がポンプにでもかけられたように脳のすきまというすきまをかたく閉ざした。たまらなくなつて向かいの窓から景色でも見ようとすると、そこにはシェードがおろしてあつて、例の四十三四の男が厚い口びるをゆ

るくあけたままで、ばかな顔をしながらまじまじと葉子を見やっていた。葉子はむっとしてその男の額ひたいから鼻にかけたあたりを、遠慮もなく発矢はつしと目でむちうった。商人は、ほんとうにむちうたれた人が泣き出す前にするように、笑うような、はにかんだような、不思議な顔のゆがめかたをして、さすがに顔をそむけてしまった。その意気地いきじのない様子がまた葉子の心をいらいらさせた。右に目を移せば三四人先に木部がいた。その鋭い小さな目は依然として葉子を見守っていた。葉子は震えを覚えるばかりに激昂げきこうした神経を両手に集めて、その両手を握り合わせて膝ひざの上のハンケチの包みを押えながら、下駄げたの先をじつと見入ってしまった。今は車内の人が申し合せて侮辱でもしているように葉子には思えた。古藤が隣座となりざにいるのさえ、一種の苦痛だった。その瞑想的めいそつてきな無邪気な態度が、葉子の内部的経験や苦悶くもんと少しも縁が続いていないで、二人の間には金輪際こんりんざい理解が成り立ち得ないと思うと、彼女は特別に毛色の変わった自分の境界きょうがいに、そつとうかがい寄ろうとする探偵たんていをこの青年に見いだすように思つて、その五分刈りにした地蔵頭じぞうあたままでが顧みるにも足りない木のくずかなんぞのように見えた。

やせた木部の小さな輝いた目は、依然として葉子を見つめていた。

なぜ木部はかほどまで自分を侮辱するのだろう。彼は今でも自分を女とあなどっている。

ちつぽけな才力を今でも頼んでいる。女よりも浅ましい熱情を鼻にかけて、今でも自分の運命に差し出がましく立ち入ろうとしている。あの自信のない臆病な男に自分はさつき媚^こびを見せようとしたのだ。そして彼は自分がこれほどまで誇りを捨てて与えようとした特別の好意を眦^{まなじり}を反して退けたのだ。

やせた木部の小さな目は依然として葉子を見つめていた。

この時突然けたたましい笑い声が、何か熱心に話し合っていた二人^{ふたり}の中年の紳士の口から起こった。その笑い声と葉子となんの関係もない事は葉子にもわかりきっていた。しかし彼女はそれを聞くと、もう欲にも我慢がしきれなくなった。そして右の手を深々^{ふかぶか}と帯の間にさし込んだまま立ち上がりざま、

「汽車に酔ったんでしようかしらん、頭痛がするの」

と捨てるように古藤にいい残して、いきなり繰り戸をあけてデツキに出た。

だいぶ高くなつた日の光がぱつと大森田圃^{おおもりたんぼ}に照り渡つて、海が笑いながら光るのが、並み木の向こうに広すぎるくらい一どきに目にはいるので、軽い瞑眩^{めまい}をさえ覚えるほどだった。鉄の手欄^{てすり}にすがって振り向くと、古藤が続いて出て来たのを知った。その顔には心配そうな驚きの色が明らさまに現われていた。

「ひどく痛むんですか」

「ええかなりひどく」

と答えたがめんどうだと思つて、

「いいからはいつていてください。おおげさに見えるといやですから……大丈夫あぶなかりませんとも……」

といい足した。古藤はしいてとめようとはしなかった。そして、

「それじやはいつているがほんとうにあぶのうござんすよ……用があつたら呼んでくださいよ」

とだけいつて素直すなおにはいつて行つた。

「Simpleton!」

葉子は心の中でこうつぶやくと、焼き捨てたように古藤の事なんぞは忘れてしまつて、手欄てすりに臂ひじをついたまま放心して、晩夏の景色をつつむ引き締まつた空氣に顔をなぶらした。木部の事も思わない。緑や藍あゐや黄色のほか、これといつて輪郭のはつきりした自然の姿も目に映らない。ただ涼しい風がそよそよと鬢びんの毛をそよがして通るのを快いと思つていた。汽車は目まぐるしいほどの快速力で走っていた。葉子の心はただ渾沌こんとんと暗く固まつた物

のまわりを飽きる事もなく幾度も幾度も左から右に、右から左に回っていた。こうして葉子にとっては長い時間が過ぎ去ったと思われるころ、突然頭の中を引っかけまわすような激しい音を立てて、汽車は六郷川ろくごうがわの鉄橋を渡り始めた。葉子は思わずぎよつとして夢からさめたように前を見ると、釣り橋つりばしの鉄材が蛛手くもてになって上を下へと飛びはねるので、葉子は思わずデツキのパネルに身を退ひいて、両袖りょうそでで顔を抑おさえて物を念じるようにした。

そうやって気を静めようと目をつぶっているうちに、まつ毛を通し袖を通して木部の顔とことにその輝く小さな両眼とがまざまざと想像に浮かび上がって来た。葉子の神経は磁石しゃくに吸い寄せられた砂鉄のように、堅くこの一つの幻像の上に集注して、車内にあった時と同様な緊張した恐ろしい状態に返った。停車場に近づいた汽車はだんだんと歩度をゆるめていた。田圃たんぼのここかしこに、俗悪な色で塗り立てた大きな広告看板が連ねて建ててあった。葉子は袖そでを顔から放して、気持ちの悪い幻像を払いのけるように、一つ一つその看板を見迎え見送っていた。所々ところどころに火が燃えるようにその看板は目に映って木部の姿はまたおぼろになつて行つた。その看板の一つに、長い黒髪を下げた姫が経巻きょうかんを持っているのがあった。その胸に書かれた「中將湯ちゅうしょうとう」という文字を、何げなしに一字ずつ読み下すと、彼女は突然私生児の定子の事を思い出した。そしてその父なる木部の姿は、

かかる乱雑な連想の中心となつて、またまぎまぎと焼きつくように現われ出た。

その現われ出た木部の顔を、いわば心の中の目で見つめているうちに、だんだんとその鼻の下から髭ひげが消えうせて行つて、輝くひとみの色は優しい肉感的な温あたたかみを持ち出して来た。汽車は徐々に進行をゆるめていた。やや荒れ始めた三十男の皮膚の光沢つやは、神経的な青年の蒼あおしろ白い膚の色となつて、黒く光つた軟やわらかい頭つむりの毛がきわ立って白い額をなでている。それさえがはつきり見え始めた。列車はすでに川崎停車場かわさきのプラットフォームにはいつて来た。葉子の頭の中では、汽車が止まりきる前に仕事をし遂おほさねばならぬというふうに、今見たばかりの木部の姿がどんどん若やいで行つた。そして列車が動かなくなつた時、葉子はその人のかたわらにでもいるように恍惚うつとりとした顔つきで、思わず知らず左手を上げて——小指をやさしく折り曲げて——軟やわらかい鬢びんの後おくれ毛をかき上げていた。これは葉子が人の注意をひこうとする時にはいつでもする姿態しなである。

この時、繰り戸がけたたましくあいたと思うと、中から二三人の乗客がどやどやと現われ出て来た。

しかもその最後から、涼しい色合いのインバネスを羽織はつた木部が続くを感じて、葉子の心臓は思わずはつと処女の血を盛もつたようにときめいた。木部が葉子の前まで来て

すれすれにそのそばを通り抜けようとした時、二人の目はもう一度しみじみと出あった。木部の目は好意を込めた微笑にひたされて、葉子の出ようによつては、すぐにも物をいい出しそうに口びるさえ震えていた。葉子も今まで続けていた回想の惰力に引かされて、思わずほほえみかけたのであったが、その瞬間燕返しに、見も知りもせぬ路傍の人に与えるような、冷刻な驕慢な光をそのひとみから射出したので、木部の微笑は哀れにも枝を離れた枯れ葉のように、二人の間をむなしくひらめいて消えてしまった。葉子は木部のあわてかたを見ると、車内で彼から受けた侮辱にかなり小気味よく酬い得たという誇りを感じて、胸の中がやややすがしくなった。木部はやせたその右肩を癖のように怒らしながら、急ぎ足に濶歩して改札口の所に近づいたが、切符を懷中から出すために立ち止まった時、深い悲しみの色を眉の間にみなぎらしながら、振り返ってじつと葉子の横顔に目を注いだ。葉子はそれを知りながらもとより侮蔑の一瞥をも与えなかった。

木部が改札口を出て姿が隠れようとした時、今度は葉子の目がじつとその後ろ姿を逐いかけた。木部が見えなくなつた後も、葉子の視線はそこを離れようとはしなかった。そしてその目にはさびしく涙がたまつていた。

「また会ふ事があるだろうか」

葉子はそぞろに不思議な悲哀を覚えながら心の中でそういつていたのだった。

四

列車が川崎駅を発すると、葉子はまた手欄てすりによりかかりながら木部の事をいろいろと思
いめぐらした。やや色づいた田圃たんぼの先に松並み木が見えて、その間あいだから低く海の光る、平
凡な五十三次つぎふたう風な景色が、電柱で句読くとうを打ちながら、空洞うつつのような葉子の目の前で閉じ
たり開いたりした。赤とんぼも飛びかわす時節で、その群れが、燧ひうちいし石から打ち出され
る火花のように、赤い印象を目の底に残して乱れあつた。いつ見ても新開地じみて見える
神奈川かながわを過ぎて、汽車が横浜の停車場に近づいたころには、八時を過ぎた太陽の光が、紅も

みじか
葉坂の桜並み木を黄色く見せるほどに暑く照らしていた。

煤煙ばいえんでまっ黒にすすけた煉瓦壁れんがの陰に汽車が停とまると、中からいちばん先に出て来た

のは、右手にかのオリヴ色の包み物を持った古藤だった。葉子はパラソルを杖つえに弱々し
くデツキを降りて、古藤に助けられながら改札口を出たが、ゆるゆる歩いている間に乗客
は先さきを越してしまつて、二人はいちばんあとになっていた。客を取りおくれた十四五人の

停車場づきの車夫が、待合部屋まちあいべやの前にかたまりながら、やつれて見える葉子に目をつけて何かとうわさし合うのが二人の耳にもはいつた。「むすめ」「らしやめん」というような言葉さえそのはしたない言葉の中には交じつていた。開港場のがさつな卑しい調子は、すぐ葉子の神経にびりびりと感じて来た。

何しろ葉子は早く落ち付く所を見つけ出したかった。古藤は停車場の前方の川添いにある休憩所まで走って行つて見たが、帰つて来るとぶりぶりして、馱夫あがりらしい茶店の主人は古藤の書生つぽ姿をいかにもばかにしたような断わりかたをしたといった。二人はしかたなくうるさく付きまつわる車夫を追い払いながら、潮の香の漂つた濁つた小さな運河を渡つて、ある狭いきたない町の中ほどにある一軒の小さな旅人宿にはいつて行つた。横浜という所には似もつかぬような古風な外構そとがまえで、美濃紙みのがみのくすぶり返つた置き行燈あんどんには太い筆つきで相模屋さがみやと書いてあつた。葉子はなんとなくその行燈に興味をひかれてしまつていた。いたずら好きなその心は、嘉永かえいごろの浦賀うらがにでもあればありそうなこの旅籠屋はたしやに足を休めるのを恐ろしくおもしろく思った。店にしゃがんで、番頭と何か話しているあばずれたような女中までが目にとまつた。そして葉子が体ていよく物を言おうとしてい

ると、古藤がいきなり取りかまわない調子で、

「どこか静かな部屋に案内してください」

と無愛想に先を越してしまった。

「へいへい、どうぞこちらへ」

女中は二人をまじまじと見やりながら、客の前もかまわず、番頭と目を見合わせて、さげすんだらしい笑いをもらして案内に立った。

ぎしぎしと板ぎしみのするまつ黒な狭い階子段を上がって、西に突き当たった六畳ほどの狭い部屋に案内して、突っ立ったまままで荒つぽく二人を不思議そうに女中は見比べるのだった。油じみた襟元を思い出させるような、西に出窓のある薄ぎたない部屋の中を女中をひつくるめてにらみ回しながら古藤は、

「外部よりひどい……どこか他所にしましょうか」

と葉子を見返った。葉子はそれには耳もかさずに、思慮深い貴女のような物腰で女中のほうに向いていった。

「隣室も明いていますか……そう。夜まではどこも明いている……そう。お前さんがこの世話をしておいで？……なら余の部屋もついでに見せておもらいしましょうかしらん」女中はもう葉子には軽蔑の色は見せなかった。そして心得顔に次の部屋との間の襖

をあける間に、葉子は手早く大きな銀貨を紙に包んで、

「少しかげんが悪いし、またいろいろお世話になるだろうから」

といいながら、それを女中に渡した。そしてずっと並んだ五つの部屋を一つ一つ見て回って、掛け軸、花びん、団扇^{うちわ}さし、小屏風^{こびょうぶ}、机というようなものを、自分の好みに任せてあてがわれた部屋のとすつかり取りかえて、すみからすみまできれいに掃除^{そうじ}をさせた。そして古藤を正座に据^すえて小ざっぱりした座ぶとんにすわると、にっこりほほえみながら、「これなら半日ぐらい我慢ができましたよう」

といった。

「僕はどんな所でも平気なんですがね」

古藤はこう答えて、葉子の微笑を追いながら安心したらしく、

「気分はもうなおりましたね」

と付け加えた。

「えゝ」

と葉子は何げなく微笑を続けようとしたが、その瞬間にずっと思い返して眉^{まゆ}をひそめた。葉子には仮病^{けびょう}を続ける必要があつたのをつい忘れようとしたのだった。それで、

「ですけれどもまだこんななんですの。こら動悸が」

といいながら、地味な風通の単衣物の中にかくれたはなやかな襦袢の袖をひらめかして、右手を力なげに前に出した。そしてそれと同時に呼吸をぐつとつめて、心臓と覺しいあたりにはげしく力をこめた。古藤はすき通るように白い手くびをしばらくで回していたが、脈所に探りあけると急に驚いて目を見張った。

「どうしたんです、え、ひどく不規則じゃありませんか……痛むのは頭ばかりですか」

「いゝえ、お腹も痛みはじめたんですの」

「どんなふうに」

「ぎゅつと錐でももむように……よくこれがあるんで困ってしまうんですのよ」

古藤は静かに葉子の手を離して、大きな目で深々と葉子をみつめた。

「医者を呼ばなくっても我慢ができますか」

葉子は苦しげにほほえんで見せた。

「あなただつたらきつとできないでしょうよ。……慣れっこですからこらえて見ますわ。その代わりあなた永田さん……永田さん、ね、郵船会社の支店長の……あすこに行つて船の切符の事を相談して来ていただけないでしょうか。御迷惑ですわね。それでもそんな事

までお願いしちやあ……ようござんす、わたし、車でそろそろ行きますから」

古藤は、女というものはこれほどの健康の変調をよくもこうまで我慢をするものだというような顔をして、もちろん自分が行ってみるといい張った。

実はその日、葉子は身のまわりの小道具や化粧品を調えかたがた、米国行きの船の切符を買うために古藤を連れてここに来たのだった。葉子はそころすでに米国にいるある若い学士と許嫁いいなすけの間柄になっていた。新橋で車夫が若奥様と呼んだのも、この事が出入りのものの間に公然と知れわたっていたからの事だった。

それは葉子が私生子を設けてからしばらく後の事だった。ある冬の夜、葉子の母の親佐おやざが何かの用でその良人おとこの書齋に行こうと階子段はしごだんをのぼりかけると、上から小間使いがまっしぐらに駆けおりて来て、危うく親佐にぶつ突かろうとしてそのそばをすりぬけながら、何か意味のわからない事を早口にいつて走り去った。その島田しまだ鬚まげや帯の乱れた後ろ姿が、嘲弄ちやうろうの言葉のように目を打つと、親佐は口びるをかみしめたが、足音だけはしとやかに階子段はしごだんを上がつて、いつもに似ず書齋の戸の前に立ち止まって、しわぶきを一つして、それから規則正しく間まをおいて三度戸をノックした。

こういう事があつてから五日いつかとたたぬうちに、葉子の家庭すなわち早月家さつきけは砂の上の塔

のようにもろくもくずれてしまった。親佐はことに冷静な底気味わるい態度で夫婦の別居を主張した。そして日ごろの柔和に似ず、傷ついた牡牛おうしのように元どおりの生活を回復しようとしめく良人おっとや、中にはいつていろいろ言いなそうとした親類たちの言葉を、きつぱりとしりぞけてしまつて、良人を釘店くぎだなののだつ広い住宅にたつた一人残ひとりしたまま、葉子とともに三人の娘を連れて、親佐は仙台せんだいに立ちのいてしまった。木部の友人たちが葉子の不人情を怒つて、木部のとめるのもきかずに、社会から葬つてしまえとひしめいているのを葉子は聞き知つていたから、ふだんならば一も二もなく父をかばつて母に楯たてをつくべきところを、素直すなおに母のするとおりになつて、葉子は母と共に仙台せんだいに埋うずもれに行つた。母は母で、自分の家庭から葉子のような娘の出た事を、できるだけ世間せけんに知られまいとした。女子教育とか、家庭の薰陶とかいう事をおりあるごとに口にしていた親佐は、その言葉に対して虚偽という利子を払わねばならなかつた。一方をもみ消すためには一方にどんと火の手をあげる必要がある。早月母子さつきおやこが東京を去るとまもなく、ある新聞は早月ドクトルの女性に関するふしだらを書き立てて、それにつけての親佐の苦心と貞操とを吹聴ふいちようしたついでに、親佐が東京を去るようになったのは、熱烈な信仰から来る義憤と、愛児を父の悪感化から救おうとする母らしい努力に基づくものだ。そのために彼女はキリスト教婦人

同盟の副会長という顕要な位置さえ投げすてたのだと書き添えた。

仙台における早月親佐はしばらくの間は深く沈黙を守っていたが、見る見る周囲に人を集めて華々しく活動をし始めた。その客間は若い信者や、慈善家や、芸術家たちのサロンとなつて、そこからリバイバルや、慈善市や、音楽会というようなものが形を取つて生まれ出た。ことに親佐が仙台支部長として働き出したキリスト教婦人同盟の運動は、その当時野火の**のび**のような勢いで全国に広がり始めた赤十字社の勢力にもおさおさ劣らない程の盛況を呈した。知事令夫人も、名だたる素封家の奥さんたちもその集会には列席した。そして三か年の月日は早月親佐を仙台には無くてはならぬ名物の一つにしてしまった。性質が母親とどこか似すぎているためか、似たように見えて一調子違っているためか、それとも自分を慎むためであつたか、はたの人にはわからなかつたが、とにかく葉子はそんなはやかな雰囲氣に包まれながら、不思議なほど沈黙を守つて、ろくろく晴れの座などには姿を現わさないでいた。それにもかかわらず親佐の客間に吸い寄せられる若い人々の多数は葉子に吸い寄せられているのだつた。葉子の控え目なしおらしい様子がいやが上にも人のうわさを引く種となつて、葉子という名は、多才で、情緒の細やかな、美しい薄命児をだれにでも思い起こさせた。彼女の立ちすぐれた眉目形は花柳の人たちさえうらやまし

がらせた。そしていろいろな風聞が、清教徒風に質素な早月の佗住居わびずまいの周囲を霞かすみのように取り巻き始めた。

突然小さな仙台市は雷にでも打たれたようにある朝の新聞記事に注意を向けた。それはその新聞の商売がたきである或る新聞の社主であり主筆である某が、親佐と葉子との二人ふたりに同時に慇懃いんぎんを通じているという、全紙にわたった不倫きわまる記事だった。だれも意外なような顔をしながら心の中ではそれを信じようとした。

この日髪の毛の濃い、口の大きい、色白な一人の青年を乗せた人力車じんりきしゃが、仙台の町中を忙しく駆け回ったのを注意した人はおそろくなかつたろうが、その青年は名を木村きむらといつて、日ごろから快活な活動好きな人として知られた男で、その熱心な奔走の結果、翌日の新聞紙の広告欄には、二段抜きで、知事令夫人以下十四五名の貴婦人の連名で早月親佐さつきおやぎの冤罪えんざいが雪すすがれる事になった。この稀有けうの大げさな広告がまた小さな仙台の市中をどよめき渡らした。しかし木村の熱心も口弁も葉子の名を広告の中に入れる事はできなかった。こんな騒ぎが持ち上がったから早月親佐の仙台における今までの声望は急に無くなってしまった。そのころちょうど東京に居残っていた早月が病氣にかかって薬に親しむ身となったので、それをしおに親佐は子供を連れて仙台を切り上げる事になった。

木村はその後すぐ早月^{おやこ}母子を追って東京に出て来た。そして毎日入りびたるように早月家に入出入りして、ことに親佐の氣に入るようになった。親佐が病氣になって危篤に陥った時、木村は一生の願いとして葉子との結婚を申し出た。親佐はやはり母だった。死期を前に控えて、いちばん氣にせずにはいられないものは、葉子の将来だった。木村ならばあのわがままな、男を男とも思わぬ葉子に仕えるようにして行く事ができると思った。そしてキリスト教婦人同盟の会長をしている五十川^{いそがわ}女史に後事を託して死んだ。この五十川女史のまあまあというような不思議なあいまいな切り盛りで、木村は、どこか不確実ではあるが、ともかく葉子を妻としうる保障を握ったのだった。

五

郵船会社の永田は夕方であれば会社から退けまいといふので、葉子は宿屋に西洋物店のものを呼んで、必要な買い物をする事になった。古藤はそんならそこらをほつき歩いて来るといって、例の麦^{むぎ}稈^{わら}帽子を帽子掛けから取って立ち上がった。葉子は思い出したように肩越しに振り返って、

「あなたさつきパラソルは骨が五本のがいいとおっしゃってね」

といった。古藤は冷淡な調子で、

「そういったようでしたね」

と答えながら、何か他の事でも考えているらしかった。

「まあそんなにとぼけて……なぜ五本のが好き？」

「僕が好きというんじゃないけれども、あなたはなんでも人と違ったものが好きなんだと思っただけですよ」

「どこまでも人をおからかいなさる……ひどい事……行っただけじゃありません」

と情を迎えるようにいつて向き直ってしまった。古藤が縁側に出るとまた突然呼びとめた。障子しやうじにはつきり立ち姿をうつしたまま、

「なんです」

といって古藤は立ちもと戻る様子がなかった。葉子はいたずら者らしい笑いを口のあたりに浮かべていた。

「あなたは木村と学校が同じでいらしたのね」

「そうですよ、級は木村の……木村君のほうが二つも上でしたがね」

「あなたはあの人をどうお思いになって」

まるで少女のような無邪気な調子だった。古藤はほほえんだらしい語気で、

「そんな事はもうあなたのほうがくわしいはずじゃありませんか……心のいい活動家ですよ」

「あなたは？」

葉子はほんと高飛車たかびしゃに出た。そしてにやりとしながらがつくりと顔を上向きにはねて、床の間の一蝶いつちようのひどい偽物まがものを見やっていた。古藤がとっきの返事に窮して、少しむつとした様子で答え渋っているのを見て取ると、葉子は今度は声の調子を落として、いかにもたよりないというふうに、

「日盛りは暑いからどこぞでお休みなさいましね。……なるたけ早く帰って来てくださいまし。もしかして、病気でも悪くなると、こんな所で心細うござんすから……よくって」

古藤は何か平凡な返事をして、縁板を踏みならしながら出て行ってしまった。

朝のうちだけからつと破ったように晴れ渡っていた空は、午後から曇り始めて、まっ白な雲が太陽の面をなでて通るたびごとに暑気は薄れて、空いちめんが灰色にかき曇るころには、膚寒く思うほどに初秋の気候は激変していた。時雨しぐれらしく照ったり降ったりして

た雨の脚も、やがてじめじめと降り続いて、煮しめたようなきたない部屋の中は、ことさら湿りが強く来るように思えた。葉子は居留地のほうにある外国人相手の洋服屋や小間物屋などを呼び寄せて、思いきつたぜいたくな買い物をした。買い物をして見ると葉子は自分の財布のすぐ貧しくなつて行くのを怖れないではいられなかった。葉子の父は日本橋ではひとかどの門戸を張った医師で、収入も相当にはあつたけれども、理財の道に全く暗いのと、妻の親佐が婦人同盟の事業にばかり奔走して、その並み並みならぬ才能を、少しも家の事に用いなかったため、その死後には借金こそ残れ、遺産といつてはあわれなほどしかなかった。葉子は二人の妹をかかえながらこの苦しい境遇を切り抜けて来た。それは葉子であればこそし遂せて来たようなものだった。だれにも貧乏らしいけしきは露ほども見せないでいながら、葉子は始終貨幣一枚一枚の重さを計つて支払いするような注意をしていた。それだのに目の前に異国情調の豊かな贅沢品を見ると、彼女の食欲は甘いものを見た子供のようになつて、前後も忘れて懷中にありつたけの買い物をしてしまったのだ。使いをやつて正金銀行で換えた金貨は今鑄出されたような光を放つて懷中の底にころがつていたが、それをどうする事もできなかった。葉子の心は急に暗くなった。戸外の天気もその心持ちに合槌を打つように見えた。古藤はうまく永田から切符をもらう

事ができるだろうか。葉子自身が行き得ないほど葉子に対して反感を持つている永田が、あの単純なタクトのない古藤をどんなふうに扱ったろう。永田の口から古藤はいろいろな葉子の過去を聞かされはしなかったろうか。そんな事を思うと葉子は悵鬱ゆううつが生み出す反抗的な気分になって、湯をわかさせて入浴し、寢床をしかせ、最上等の三鞭酒シャンペンを取りよせて、したたかそれを飲むと前後も知らず眠ってしまった。

夜になったら泊まり客があるかもしれないと女中のいった五つの部屋へやはやはり空からのまま、日がとつぷりと暮れてしまった。女中がランプを持って来た物音に葉子はようやく目をさまして、仰向いたまま、すすけた天井に描かれたランプの丸い光輪をぼんやりとながめていた。

その時じたツじたツとぬれた足で階子段はしごだんをのぼって来る古藤の足音が聞こえた。古藤は何かに腹を立てているらしい足どりですかずかと縁側を伝って来たが、ふと立ち止まると大きな声で帳場ちやうばのほうにどなった。

「早く雨戸をしめないか……病人がいるんじゃないか。……」

「この寒いのになんだってあなたも言いつけないんです」

今度はこう葉子にいいながら、建て付けの悪い障子をあけていきなり中にはいろうとし

たが、その瞬間にはつと驚いたような顔をして立ちすくんでしまった。

香水や、化粧品や、酒の香をごつちやにした暖かいいきなり古藤に迫つたらしかった。ランプがほの暗いので、部屋のすみずみまでは見えないが、光の照り渡る限りは、雑多に置きならべられたなまめかしい女の服地や、帽子や、造花や、鳥の羽根や、小道具などで、足の踏みたて場もないまでになっていた。その一方に床の間を背にして、郡内ぐんないのふとんの上に搔かき巻まきをわきの下から羽織つた、今起きかえったばかりの葉子が、はでな長襦袢ながじゆばん一つで東ヨーロッパの嬪ひんきゆう宮みやうの人のように、片臂かたひじをついたまま横になっていた。そして入浴と酒とでほんのりほてつた顔を仰向けて、大きな目を夢のように見開いてじつと古藤を見た。その枕もとには三鞭酒シャンペンのびんが本式に氷の中につけてあつて、飲みさしのコップや、華奢きやしやな紙入れや、かのオリヴ色の包み物を、しごきの赤が火の蛇くちなわのように取り巻いて、その端が指輪の二つはまった大理石のような葉子の手にもてあそばれていた。

「お遅おそうござんした事。お待たされなすつたんでしよう。……さ、おはいりなさいまし。そんなもの足でもどけてちょうだい、散らかしちまつて」

この音楽のようなすべすべした調子の声を聞くと、古藤は始めて illusion から目ざめた

ふうではいつて来た。葉子は左手を二の腕がのぞき出るまでずっと延ばして、そこにあるものを一ひとはら払いに払いのけると、花壇の土を掘り起こしたようにきたない畳が半畳ばかり現われ出た。古藤は自分の帽子を部屋すみにぶちなげて置いて、払い残された細形ほそがたの金鎖を片づけると、どつかとあぐらをかいて正面から葉子を見すえながら、

「行つて来ました。船の切符もたしかに受け取つて来ました」

といつてふところの中を探りにかかった。葉子はちよつと改まつて、

「ほんとにありがとうございます」

と頭を下げたが、たちまち roughish な目つきをして、

「まあそんな事はいずれあとで、ね、……何しろお寒かったでしょう、さ」

といいながら飲み残りの酒を盆の上に無造作に捨てて、二三度左手をふつてしずくを切つてから、コップを古藤にさしつけた。古藤の目は何かに激昂げきこうしているように輝いていた。

「僕は飲みません」

「おやなぜ」

「飲みたくないから飲まないんです」

この角^{かど}ばった返答は男を手もなくあやし慣れている葉子にも意外だった。それでそのあの言葉をどう継^つごうかと、ちよつとためらつて古藤の顔を見やっていると、古藤はたたみかけて口をきつた。

「永田つてのはあれはあなたの知人ですか。思いきつて尊大な人間ですね。君のような人間から金を受け取る理由はないが、とにかくあずかつて置いて、いずれ直接あなたに手紙でいつてあげるから、早く帰れつていうんです、頭から。失敬なやつだ」

葉子はこの言葉に乗じて気まずい心持ちを変えようと思つた。そしてまっしぐらに何かいい出そうとすると、古藤はおつかぶせるように言葉を續けて、

「あなたはいつたいまだ腹が痛むんですか」

ときつぱりいつて堅くすわり直した。しかしその時に葉子の陣立てはすでにでき上がつていた。初めのほほえみをそのままに、

「えゝ、少しはよくなりましてよ」

といった。古藤は短^{たん}兵^{ぺい}急^{いきゆう}に、

「それにしてもなかなか元気ですね」

とたたみかけた。

「それはお薬にこれを少しいただいたからでしょうよ」

と三鞭酒シャンペンを指さした。

正面からはね返された古藤は黙ってしまった。しかし葉子も勢いに乗って追い迫るような事はしなかった。矢頃やころを計ってから語気をかえてずっと下手したでになって、

「妙にお思ひになったでしょうね。わるうございましてね。こんな所に来ていて、お酒なんか飲むのはほんとうに悪いと思つたんですけれども、気分がふさいで来ると、わたしにはこれよりほかにお薬はないんですもの。さっきのように苦しくなると私はいつでも湯を熱めにして浴はいつてから、お酒を飲み過ぎるくらい飲んで寝るんですの。そうすると」といつて、ちよつといいよどんで見せて、

「十分か二十分ぐつすり寝入るんですのよ……痛みも何も忘れてしまつていい心持ちに……それから急に頭がかつと痛んで来ますの。そしてそれと一緒に気がめいり出して、もうもうどうしていいかわからなくなつて、子供のように泣きつづけると、そのうちにまた眠たくなつて一寝入りますのよ。そうするとそのあとはいくらかさっぱりするんです。……父や母が死んでしまつてから、頼みもしないのに親類たちからよけいな世話をやかれたり、他人力ひとぢからなんぞをあてにせずに妹二人ふたりを育てて行かなければならないと思つたりす

ると、わたしのような、他人様と違つて風変わりな、……そら、五本の骨でしょう」

ときびしく笑つた。

「それですものどうぞ堪忍してちようだい。思いきり泣きたい時でも知らん顔をして笑つて通していると、こんなわたしみたいな気まぐれ者になるんです。気まぐれでもしなければ生きて行けなくなるんです。男のかたにはこの心持ちはおわかりにはならないかもしれないけれども」

こういつてるうちに葉子は、ふと木部との恋がはかなく破れた時の、われにもなく身にしみ渡るさびしみや、死ぬまで日陰者であらねばならぬ私生子の事や、計らずもきようまのあたり見た見た木部の、心からやつれた面影などを思い起こした。そしてさらに、母の死んだ夜、日ごろは見向きもしなかった親類たちが寄り集まつて来て、早月家には毛の末ほども同情のない心で、早月家の善後策について、さも重大らしく勝手気ままな事を親切ごかしにしゃべり散らすのを聞かされた時、どうにでもなれという氣になつて、暴れ抜いた事が、自分にさえ悲しい思い出となつて、葉子の頭の中を矢のように早くひらめき通つた。葉子の顔には人に譲つてはいない自信の色が現われ始めた。

「母の初七日の時もね、わたしはたて続けにビールを何杯飲みましたろう。なんでもび

んがそこいらにごろごろころがりました。そしてしまいには何がなんだか夢中になって、宅に出入りするお医者さんの膝ひざを枕まくらに、泣き寝入りに寝入って、夜中よなかをあなた二時間の余も寝続けてしまいましたわ。親類の人たちはそれを見ると一人帰り二人帰りして、相談も何もめちやくちやになったんですって。母の写真を前に置いといて、わたしはそんな事までする人間ですの。おあきれになったでしょうね。いやなやつでしょう。あなたのような方から御覧になったら、さぞいやな気がなさいでしょうねえ」

「えゝ」

と古藤は目も動かさずにぶつきらばうに答えた。

「それでもあなた」

と葉子は切なさせつそうに半ば起き上がって、

「外面うわつらだけで人のする事をなんとかおつしやるのは少し残酷ですわ。……いゝえね」

と古藤の何かいい出そうとするのをさえぎって、今度はきつとすわり直った。

「わたしは泣き言なきてをいって他人様ひとさまにも泣いていただこうなんて、そんな事はこれんばかりも思やしませんとも……なるならどこかに大砲おおづつのような大きな力の強い人がいて、その人が真剣まけんに怒おこって、葉子のような人非人にんびにんはこうしてやるぞといって、わたしを押えつけ

て心臓でも頭でもくだけて飛んでしまうほど折檻せつかんをしてくれたらと思うんですの。どの人もどの人もちやんと自分を忘れないで、いいかげんに怒おこったり、いいかげんに泣いたりしているんですからねえ。なんだってこう生温なまぬるいんでしょう。

義ぎ一いちさん（葉子が古藤をこう名で呼んだのはこの時が始めてだった）あなたがけさ、心の正直ななんとかだとおっしゃった木村に縁づくようになったのも、その晩の事です。五十川そがわが親類じゆうに賛成さして、晴れがましくもわたしをみんなの前に引き出して、罪人にでもいうように宣告してしまつたのです。わたしが一口でもいおうとすれば、五十川そがわのいうには母の遺言ですって。死人に口なし。ほんとに木村はあなたがおっしゃったような人間ね。仙台であんな事があつたでしょう。あの時知事の奥さんはじめ母のほうはなんとかしようが娘のほうは保証ができないとおっしゃつたんですとさ」

いい知らぬ侮蔑ぶべつの色が葉子の顔にみなぎつた。

「ところが木村は自分の考えを押し通しもしないで、おめおめと新聞には母だけの名を出してあの広告をしたんですの。

母だけがいい人になればだれだってわたしを……そうでしょう。そのあげくに木村はしやあしやあとわたしを妻にしたいんですって、義一さん、男ってそれでいいものなんです

か。まあね物の譬えがですわ。それとも言葉ではなんといつてもむだだから、実行的にわたしの潔白を立ててやろうとでもいうんでしうか」

そういつて激昂^{げきこう}しきつた葉子^{はこ}はかみ捨てるようにかん高くほくと笑つた。

「いつたいわたしはちよつとした事で好ききらいのできる悪い質^{たち}なんですからね。いつてわたしはあなたのような生^き一本でもありませんのよ。

母の遺言だから木村と夫婦になれ。早く身を堅めて地道^{じみち}に暮らさなければ母の名誉をけがす事になる。妹だつて裸でお嫁入りもできまいといわれれば、わたし立派^{りつぱ}に木村の妻になつて御覽にいれます。その代わり木村が少しつらいだけ。

こんな事をあなたの前でいつてはさぞ気を悪くなさるでしょうが、真直^{まつすぐ}なあなただと思ひますから、わたしもその気で何もかも打ち明けて申してしまひますのよ。わたしの性質や境遇はよく御存じですわね。こんな性質でこんな境遇にいるわたしがこう考えるのにもし間違ひがあつたら、どうか遠慮なくおつしやつてください。

あゝいやだつた事。義一さん、わたしこんな事はおくびにも出さずに今の今までしつかり胸にしまつて我慢していたのですけれども、きようはどうしたんでしう、なんだか遠い旅にでも出たようなさびしい氣になつてしまつて……」

弓弦^{ゆづる}を切つて放したように言葉を消して葉子はうつむいてしまった。日はいつのまにかとつぷりと暮れていた。じめじめと降り続く秋雨に湿^{しと}った夜風が細々と通^{かよ}つて来て、湿気でたるんだ障子紙をそつとあおつて通った。古藤は葉子の顔を見るのを避けるように、そこらに散らばった服地や帽子などをながめ回して、なんと返答をしていいのか、いうべき事は腹にあるけれども言葉には現^{あら}わせないふうだった。部屋^{へや}は息苦^{いき}しいほどしんとした。

葉子は自分の言葉から、その時のありさまから、妙にやる瀬ないさびしい気分になっていた。強い男の手で思い存分両肩でも抱きすくめてほしいようなたよりなさを感じた。そして横腹に深々と手をやって、さし込む痛みをこらえるらしい姿をしていた。古藤はややしばらくしてから何か決心したらしくまともに葉子を見ようとしたが、葉子の切^{せつ}なさそうな哀れな様子を見ると、驚いた顔つきをしてわれ知らず葉子のほうにいざり寄った。葉子はすかさず豹^{ひょう}のようになめらかに身を起こしていち早くもしっかり古藤のさし出す手を握っていた。そして、

「義一さん」

と震えを帯びていった声は存分に涙にぬれているように響いた。古藤は声をわななかし

て、

「木村はそんな人間じゃありませんよ」

とだけいつて黙ってしまった。

だめだったと葉子はその途端に思った。葉子の心持ちと古藤の心持ちとはちぐはぐになつてゐるのだ。なんという響きの悪い心だろうと葉子はそれをさげすんだ。しかし様子にはそんな心持ちは少しも見せないで、頭から肩へかけてのなやかな線を風の前のてっせんの蔓つるのように震わせながら、二三度深々とうなずいて見せた。

しばらくしてから葉子は顔を上げたが、涙は少しも目にたまつてはいなかった。そしていとしい弟でもいたわるようにふとんから立ち上がりざま、

「すみませんでした事、義一さん、あなた御飯はまだでしたのね」

といいながら、腹の痛むのをこらえるような姿で古藤の前を通りぬけた。湯でほんのりと赤らんだ素足に古藤の目が鋭くちらつと宿つたのを感じながら、障子を細目にあけて手をならした。

葉子はその晩不思議に悪魔じみた誘惑を古藤に感じた。童貞で無経験で恋の戯れにはなのおもしろみもなさそうな古藤、木村に対してといわず、友だちに対して堅苦しい義務

観念の強い古藤、そういう男に対して葉子は今までなんの興味をも感じなかったばかりか、働きのない没情漢わからずやと見限つて、口先ばかりで人間並みのあしらいをしていたのだ。しかしその晩葉子はこの少年のような心を持つて肉の熟した古藤に罪を犯させて見たくつてたまらなくなつた。一夜のうちに木村とは顔も合わせる事のできない人間にして見たくつてたまらなくなつた。古藤の童貞を破る手を他の女に任せるのがねたましくてたまらなくなつた。幾枚も皮をかぶつた古藤の心のどん底に隠れている欲念を葉子の蠱惑力チャームで掘り起こして見たくつてたまらなくなつた。

気取られない範圍で葉子があらん限りの謎なぞを与えたにもかかわらず、古藤が堅くなつてしまつてそれに応ずるけしきのないのを見ると葉子はますますいらだつた。そしてその晩は腹が痛んでどうしても東京に帰れないから、いやでも横浜に宿とまつてくれといひ出した。しかし古藤は頑がんとしてきかなかつた。そして自分で出かけて行つて、品しなもあろう事がまつ赤な毛布もっふを一枚買つて歸つて來た。葉子はとうとう我がを折つて最終列車で東京に歸る事にした。

一等の客車には二人ふたりのほかに乗客はなかつた。葉子はふとした出来心から古藤をおとし入れようとした目論見もくろみに失敗して、自分の征服力に対するかすかな失望と、存分の不快と

を感じていた。客車の中ではまたいろいろと話そうといって置きながら、汽車が動き出すとすぐ、古藤の膝ひざのそばで毛布にくるまったまま新橋まで寝通してしまった。

新橋に着いてから古藤が船の切符を葉子に渡して人力車を二台備やとつて、その一つに乗ると、葉子はそれにかけてよって懷中から取り出した紙入れを古藤の膝にほうり出して、左の鬢びんをやさしくかき上げながら、

「きょうのお立て替えをどうぞその中から……あすはきつといらしってくださいね……お待ち申しますことよ……さようなら」

といって自分ももう一つの車に乗った。葉子の紙入れの中には正金銀行から受け取った五十円金貨八枚がはいっている。そして葉子は古藤がそれをくずして立て替えを取る気がかいのないのを承知していた。

六

葉子が米国に出発する九月二十五日はあすに迫った。二百二十日の荒れそこねたその年の天気は、いつまでたつても定まらないで、氣違びよりい日和ともいふべき照り降りの乱雑な空

あいが続き通っていた。

葉子はその朝暗いうちに床を離れて、蔵の陰になつた自分の小部屋こべやにはいつて、前々から片づけかけていた衣類の始末をし始めた。模様や縞しまの派手はでなのは片端からほどいて丸めて、次の妹の愛子にやるようにと片すみに重ねたが、その中には十三になる末の妹の貞世さだよに着せても似合わしそうな大柄おおがらなものもあつた。葉子は手早くそれをえり分けて見た。

そして今度は船に持ち込む四季の晴れ着を、床の間の前にあるまっ黒に古ぼけたトランクの所まで持つて行つて、ふたをあけようとしたが、ふとそのふたのまん中に書いてあるY・Kという白文字を見て忙せわしく手を控えた。これはきのう古藤が油絵の具と画筆とを持つて来て書いてくれたので、かわききらないテレビンの香がまだかすかに残っていた。古藤は、葉子・早月の頭文字Y・Sと書いてくれと折り入つて葉子の頼んだのを笑いながら退けて、葉子・木村の頭文字Y・Kと書く前に、S・Kとある字をナイフの先で丁寧に削つたのだつた。S・Kとは木村貞一のイニシャルで、そのトランクは木村の父が欧米を漫遊した時使つたもののなのだ。その古い色を見ると、木村の父の太ふと腹はらな鋭い性格と、波瀾はらんの多い生涯しょうがいの極印ごくいんがすわっているように見えた。木村はそれを葉子の用にと残して行つたのだつた。木村の面影はふと葉子の頭の中を抜けて通つた。空想で木村を描く事は、

木村と顔を見合わす時ほどの厭いとわしい思いを葉子に起こさせなかった。黒い髪の毛をびつたりときれいに分けて、怜さかしい中なか高たかの細ほ面おもてに、健康らしいばら色を帯びた容よう貌ぼうや、甘すぎるくらい人情におぼれやすい殉情的な性格は、葉子に一種のなつかしさをさえ感ぜしめた。しかし實際顔と顔を向かい合わせると、二人は妙に会話さえずまなくなるのだった。その怜さかしいのがいやだった。柔和なのが気にさわった。殉情的なくせに恐ろしく勘定高いのがたまらなかった。青年らしく土俵ぎわまで踏み込んで事業を楽しむという父に似た性格さえこましくれて見えた。ことに東京生まれといってもいいくらい都慣れた言葉や身のこなしの間に、ふと東北の郷土の香においをかぎ出した時にはかんで捨てたような反感に襲われた。葉子の心は今、おぼろげな回想から、實際膝ひざつき合わせた時にいやだと思つた印象に移つて行つた。そして手に持つた晴れ着をトランクに入れるのを控えてしまった。長くなり始めた夜もそのころにはようやく白しろみ始めて、蠟ろう燭そくの黄色い焰ほのおが光の亡骸なきがらのように、ゆるぎもせずにともつていた。夜の間静あいだまつていた西風が思い出したように障子にぶつかつて、釘店くぎだなの狭い通りを、河岸かしで仕出しをした若い者が、大きな掛け声でがらがらと車をひきながら通るのが聞こえ出した。葉子はきよう一日に目まぐるしいほどあるたくさんの用事をちよつと胸の中で数えて見て、大急ぎでそこらを片づけ

て、錠をおろすものには錠をおろし切つて、雨戸を一枚繰つて、そこからさし込む光で大きな手文庫からぎつしりつまつた男文字の手紙を引き出すと風呂敷ふろしきに包み込んだ。そしてそれをかかえて、手燭てしよくを吹き消しながら部屋へやを出ようとすると、廊下に叔母おばが突つ立つていた。

「もう起きたんですね……片づいたかい」

と挨拶あいさつしてまだ何かいいたそうであつた。両親を失つてからこの叔母夫婦と、六歳になる白痴おおの一人息子ひとりむすことが移つて来て同居する事になったのだ。葉子の母が、どこか重々しくつて男々しい風采ふうさいをしていたのに引きかえ、叔母は髪の毛の薄い、どこまでも貧相に見える女だつた。葉子の目はその帯おびしろ裸はだかな、肉の薄い胸のあたりをちらつとかすめた。

「おやお早うございます……あらかた片づきました」

といつてそのまま二階に行こうとすると、叔母は爪つめにいっぱい垢あかのたまつた両手をもやもやと胸の所でふりながら、さえぎるように立ちはだかつて、

「あのお前さんが片づける時にと思つていたんだがね。あすのお見送りに私は着て行くものが無いんだよ。おかあさんのもので間に合うまのは無いだろうかしらん。あすだけ借りればあとはちゃんと始末をして置くんだからちよつと見ておくれでないか」

葉子はまたかと思つた。働きのない良人おつとに連れ添つて、十五年の間丸帯一つ買つてもらえなかつた叔母の訓練のない弱い性格が、こうさもしくなるのをあわれまないでもなかつたが、物怯ものおじしながら、それでいて、欲にかかるとずうずうしい、人のすきばかりつけねらう仕打ちを見ると、虫唾むしずが走るほど憎かつた。しかしこんな思いをするのもきようだけだと思つて部屋の中に案内した。叔母は空々そらぞらしく氣の毒だとかすまないとかいい続けながら錠をおろした筆筒たんすを一々あけさせて、いろいろと勝手に好みをいつた末に、りゆうとした一揃ひとそろえを借る事にして、それから葉子の衣類までをとにかくいいながら去りがてにいじくり回した。台所からは、みそ汁しるの香においがして、白痴の子がだらしなく泣き続ける声と、叔父おじが叔母を呼び立てる声とが、すがすがしい朝の空氣を濁すように聞こえて來た。葉子は叔母にいいかげんな返事をしながらその声に耳を傾けていた。そして早月家の最後の離散という事をしみじみと感じたのであつた。電話はある銀行の重役をしている親類がいかげんな口実こうじつを作つて只持ただつて行つてしまった。父の書斎道具や骨董品こつとうひんは蔵書と一緒に糶売せりうりをされたが、売り上げ代はどうとう葉子の手にはいらなかつた。住居すまいは住居で、葉子の洋行後には、両親の死後何かに尽力したという親類の某が、二束三文にそくさんもんで譲り受ける事に親族會議で決まつてしまった。少しばかりある株券と地所じしよとは愛子さだよと貞世と

の教育費にあてる名儀で某々が保管する事になった。そんな勝手放題なまねをされるのを葉子は見向きもしないで黙っていた。もし葉子が素直な女^{すなお}だったら、かえって食い残しというほどの遺産はあてがわれていたに違いない。しかし親族会議では葉子を手におえない女^{よそ}だとして、他所に嫁入って行くのをいい事に、遺産の事にはいっさい関係させない相談をしたくらいは葉子はとうに感じていた。自分の財産となればなるべきものを一部分だけあてがわれて、黙って引ッ込んでいる葉子ではなかった。それかといって長女ではあるが、女の身として全財産に対する要求をする事の無益なものも知っていた。で「犬にやるつもりでいよう」と臍^{はぞ}を堅めてかかったのだった。今、あとに残ったものは何がある。切り回しよく見かけを派手^{はで}にしている割合に、不足がちな三人の姉妹の衣類諸道具が少しばかりあるだけだ。それを叔母は容赦もなくそこまで切り込んで来ているのだ。白紙のようなはかない寂しさと、「裸になるならきれいさっぱり裸になって見せよう」という火のような反抗心とが、むちやくちやに葉子の胸を冷やしたり焼いたりした。葉子はこんな心持ちになって、先ほどの手紙の包みをかかえて立ち上がりながら、うつむいて手ぎわりのいい絹物をなで回している叔母を見おろした。

「それじゃわたしまだほかに用がありますししますから錠をおろさずにおきますよ。ごゆ

つくり御覽なさいまし。そこにかためてあるのはわたしが持つて行くんですし、ここにあるのは愛と貞にやるのですから別になすっておいてください」

といい捨てて、ずんずん部屋へやを出た。往来には砂ほこりが立つらしく風が吹き始めていた。

二階に上がって見ると、父の書斎であつた十六畳の隣の六畳に、愛子と貞世とが抱き合つて眠つていた。葉子は自分の寢床を手早くたたみながら愛子を呼び起こした。愛子は驚いたように大きな美しい目を開くと半分夢中で飛び起きた。葉子はいきなり嚴重な調子で、「あなたはあすからわたしの代わりをしないじゃないんですよ。朝寢坊なんぞしてはどうするの。あなたがぐずぐずしていると貞ちゃんがかわいそうですよ。早く身じまいをして下のお掃除そうじでもなさいまし」

とにらみつけた。愛子は羊のように柔和な目をまばゆそうにして、姉をぬすみ見ながら、着物を着かえて下に降りて行つた。葉子はなんとなく性しょうの合わないこの妹が、階子段はしごだんを降りきつたのを聞きすまして、そつと貞世のほうに近づいた。面ざしおもの葉子によく似た十三の少女は、汗じみた顔には下げ髪がねばり付いて、頬ほおは熱でもあるように上氣している。それを見ると葉子は骨肉こつにくのいとしさに思わずほほえませられて、その寢床にいざり寄つ

て、その童女を羽^はがい^はに軽く抱きすくめた。そしてしみじみとその寝顔にながめ入った。貞世の軽い呼吸は軽く葉子の胸に伝わって来た。その呼吸が一つ伝わるたびに、葉子の心は妙にめいって行つた。同じ胎^{はら}を借りてこの世に生まれ出た二人^{ふたり}の胸には、ひたと共鳴する不思議な響きが潜んでいた。葉子は吸い取られるようにその響きに心を集めていたが、果ては寂しい、ただ寂しい涙がほろほろとめどなく流れ出るのだった。

一家の離散を知らぬ顔で、女の身そらをただひとり米国の果てまでさすらって行くのを葉子は格別なんとも思っていないかった。振り分け髪の時分から、飽くまで意地^{いじ}の強い目のきく性質を思うままに増長^{ひとり}させて、ぐんぐんと世の中をわき目もふらず押し通して二十五になった今、こんな時にふと過去を振り返って見ると、いつのまにかあたりまえの女の生活をすりぬけて、たつた一人見^{ひとり}も知らぬ野ずえに立っているような思いをせずにはいられなかった。女学校や音楽学校で、葉子の強い個性に引きつけられて、理想の人でもあるように近寄って来た少女たちは、葉子におどおどしい同性の恋をささげながら、葉子にinspireされて、われ知らず大胆な奔放な振る舞いをするようになった。そのころ「国民文学」や「文学界」に旗^{はたあ}挙げをして、新しい思想運動を興そうとした血気なロマンティックな青年たちに、歌の心を授けた女の多くは、おおかた葉子から血脈を引いた少女らで

あつた。倫理学者や、教育家や、家庭の主権者などもそのころから猜疑さいぎの目を見張つて少女国を監視し出した。葉子の多感な心は、自分でも知らない革命的ともいふべき衝動のためにあてもなく揺ぎゆる始めた。葉子は他人を笑いながら、そして自分をさげすみながら、まっ暗な大きな力に引きずられて、不思議な道に自覚なく迷い入つて、しまいにはまっしぐらに走り出した。だれも葉子の行く道のしるべをする人もなく、他の正しい道を教えてくれる人もなかつた。たまたま大きな声で呼び留める人があるかと思えば、裏表うらおもての見えすいたべてんにかけて、昔のままの女であらせようとするものばかりだった。葉子はそのころからどこか外国に生まれていればよかったと思うようになった。あの自由らしく見える女の生活、男と立ち並んで自分を立てて行く事のできる女の生活……古い良心が自分の心をさいなむたびに、葉子は外国人の良心というものを見たく思った。葉子は心の奥底でひそかに芸者げいしゃをうらやみもした。日本で女が女らしく生きているのは芸者だけではないかとさえ思った。こんな心持ちで年を取つて行く間あいだに葉子はもちろんなんでもつまずいてころんだ。そしてひとりで膝ひざの塵ちりを払わなければならなかつた。こんな生活を続けて二十五になった今、ふと今まで歩いて来た道を振り返つて見ると、いっしょに葉子と走つていた少女たちは、とうの昔に尋常な女になり済ましていて、小さく見えるほど遠くのほうか

ら、あわれむようなさげすむような顔つきをして、葉子の姿をながめていた。葉子のもと来た道に引き返す事はもうできなかった。できたところで引き返そうとする気はみじんもなかった。「勝手にするがいい」そう思つて葉子はまたわけもなく不思議な暗い力に引っぱられた。こういうはめになった今、米国にしようが日本にしようが少しばかりの財産があろうが無かろうが、そんな事は些細な話だった。境遇でも変わったら何か起こるかもしれない。元のままかもしれない。勝手になれ。葉子を心の底から動かしそうなものも一つも身近には見当たらなかった。

しかし一つあった。葉子の涙はただわけもなくほろほろと流れた。貞世は何事も知らずに罪なく眠りつづけていた。同じ胎を借りてこの世に生まれ出た二人の胸には、ひと共鳴する不思議な響きが潜んでいた。葉子は吸い取られるようにその響きに心を集めていたが、この子もやがては自分が通つて来たような道を歩くのかと思うと、自分をあわれむとも妹をあわれむとも知れない切ない心に先だたれて、思わずぎゅつと貞世を抱きしめながら物をいおうとした。しかし何をいい得ようぞ。喉もふさがってしまった。貞世は抱きしめられたので始めて大きく目を開いた。そしてしばらくの間、涙にぬれた姉の顔をまじまじとながめていたが、やがて黙つたまま小さい袖でその涙をぬぐい始めた。葉子の涙

は新しくわき返った。貞世は痛ましそうに姉の涙をぬぐいつづけた。そしてしまいにはその袖を自分の顔に押しあてて何か言い言いしやり上げながら泣き出してしまった。

七

葉子はその朝横浜の郵船会社の永田から手紙を受け取った。漢学者らしい風格の、上手な字で唐紙^{とうしせん}に書かれた文句には、自分は故早月氏には格別の交誼^{こうぎ}を受けていたが、あなたに対しても同様の交際を続ける必要のないのを遺憾に思う。明晩（すなわちその夜）のお招きにも出席しかねる、と剣^{けん}もほろろに書き連ねて、追^{つい}伸^{しん}に、先日あなたから一言^{いっごん}の紹介もなく訪問してきた素性^{すじょう}の知れぬ青年の持参した金はいらないからお返しする。良人^{おとこ}の定まった女の行動は、申すまでもないが慎むが上にもことに慎むべきものだと思おもは聞き及んでいる。ときつぱり書いて、その金額だけの為替^{かわせ}が同封してあった。葉子が古藤を連れて横浜に行ったのも、仮病^{けびょう}をつかって宿屋に引きこもったのも、実をいうと船商売をする人には珍しい厳格なこの永田に会うめんどろを避けるためだった。葉子は小さく舌打ちして、為替^{がわ}ごと手紙を引き裂こうとしたが、ふと思ひ返して、丹念^{たんねん}に墨をす

りおろして一字一字考えて書いたような手紙だけずたずたに破いて屑かごに突っ込んだ。葉子は地味な他行衣に寝衣を着かえて二階を降りた。朝食は食べる気がなかった。妹たちの顔を見るのも氣づまりだった。

姉妹三人のいる二階の、すみからすみまできちんと小ぎれいに片付いているのに引きかえて、叔母一家の住まう下座敷は変に油ぎつてよごれていた。白痴の子が赤ん坊同様のので、東の縁に干してある襦袢から立つ塩臭いにおいや、畳の上に踏みにじられたままこびりついている飯粒などが、すぐ葉子の神経をいらいらさせた。玄関に出て見ると、そこには叔父が、襟のまつ黒に汗じんだ白い飛白を薄寒そうに着て、白痴の子を膝の上に乗せながら、朝っぱらから柿をむいてあてがっていた。その柿の皮があかあかと紙くずとごったになって敷き石の上に散っていた。葉子は叔父にちよつと挨拶をして草履をさがしながら、

「愛さんちよつとここにおいで。玄関が御覧、あんなによごれているからね、きれいに掃除しておいてちょうだいよ。——今夜はお客様もあるんだのに……」

と駆けて来た愛子にわざとつんけんいうと、叔父は神経の遠くのほうであてこすられたのを感じたふうで、

「おゝ、それはわしがしたんじやで、わしが掃除しとく。構うてくださるな、おいお俊――
 お俊というに、何しとるぞい」

とのろまらしく呼び立てた。帯しろ裸の叔母がそこにやって来て、またくだらぬ口くちいさ
 論かいをするのだと思うと、泥どろの中でいがみ合う豚かなんぞを思い出して、葉子は踵かかとの塵ちりを
 払わんばかりにそこそこ家を出た。細い釘店くぎだなの往来は場所柄がらだけに門並かどなみきれいに掃除
 されて、打ち水をした上を、気のきいた風体ふうていの男女が忙しそうに往ゆ来きしていた。葉子
 は抜け毛の丸めたのや、巻煙草まきたばこの袋のちぎれたのが散らばって箒ほうきの目一つない自分の家
 の前を目をつぶって駆けぬけたいほどの思いをして、ついそぼの日本銀行にはいつてあり
 ったけの預金を引き出した。そしてその前の車屋で始終乗りつけのいちばん立派な人力車
 を仕立てさして、その足で買い物に出かけた。妹たちに買い残しておくべき衣服地や、外
 国人向きの土産品みやげひんや、新しいどつしりしたトランクなどを買い入れると、引き出した金
 はいくらかも残つてはいなかった。そして午後の日がやや傾きかかったころ、大塚窪町おおつかくぼまち
 に住む内田うちだという母の友人を訪れた。内田は熱心なキリスト教の伝道者として、憎む人か
 らは蛇蝎だかつのように憎まれるし、好きな人からは予言者のように崇拜されている天才肌はだの人
 だった。葉子は五つ六つのころ、母に連れられて、よくその家に入りました、人を恐れ

ずにくんぐん思つた事をかわいらしい口もとからいい出す葉子の様子が、始終人から距てへだをおかれつけた内田を喜ばしたので、葉子が来ると内田は、何か心のこだわつた時でもきげんを直して、窄せまつた眉根まゆねを少しは開きながら、「また子猿こざるが来たな」といつて、そのつやつやしたおかつぱをなで回したりなぞした。そのうち母がキリスト教婦人同盟の事業に關係して、たちまちのうちにその牛耳ぎゅうじを握り、外国宣教師だとか、貴婦人だとかを引き入れて、政略がましく事業の拡張に奔走するようになると、内田はすぐきげんを損じて、早月親佐さつきおやさを責めて、キリストの精神を無視した俗悪な態度だといきまいたが、親佐がいつこうに取り合う様子がないので、両家の間は見る見る疎々うとうとしいものになつてしまった。それでも内田は葉子だけには不思議に愛着を持つていたと見えて、よく葉子のうわさをしで、「子猿」だけは引き取つて子供同様に育ててやつてもいいなぞといったりした。内田は離縁した最初の妻が連れて行つてしまつたたつた一人ひとりの娘にいつまでも未練を持つているらしかった。どこでもいいその娘に似たらしい所のある少女を見ると、内田は日ごろの自分を忘れたように甘々あまあましい顔つきをした。人が怖れる割合に、葉子には内田が恐ろしく思えなかつたばかりか、その峻烈しゅんれつな性格の奥にとじこめられて小さくよんだ愛情に触れると、ありきたりの人間からは得られないようななつかしみを感ずる事があつた。

葉子は母に黙って時々内田を訪れた。内田は葉子が来ると、どんな忙しい時でも自分の部屋に通して笑い話などをした。時には二人だけで郊外の静かな並み木道などを散歩したりした。ある時内田はもう娘らしく生長した葉子の手を堅く握って、「お前は神様以外の私のただ一人の道伴れだ」などといった。葉子は不思議な甘い心持ちでその言葉を聞いた。その記憶は長く忘れ得なかった。

それがあの木部との結婚問題が持ち上がると、内田は否応なしにある日葉子を自分の家と呼びつけた。そして恋人の変心を詰り責める嫉妬深い男のように、火と涙とを目からほとばしらせて、打ちもすえかねぬまでに狂い怒った。その時ばかりは葉子も心から激昂させられた。「だれがもうこんなわがままな人の所に来てやるものか」そう思いながら、生垣の多い、家並みのまばらな、轍の跡のめいりこんだ小石川の往来を歩き歩き、憤怒の歯ぎしりを止めかねた。それは夕闇の催した晩秋だった。しかしそれと同時になんだか大切なものを取り落としたような、自分をこの世につり上げてる糸の一つがぷつんと切れたような不思議なさびしさの胸に逼るのをどうする事もできなかった。

「キリストに水をやったサマリヤの女の事も思うから、この上お前には何もいうまい——
 他人の失望も神の失望もちつとは考えてみるがいい、……罪だぞ、恐ろしい罪だぞ」

そんな事があつてから五年を過ぎたきよう、郵便局に行つて、永田から来た為替かわせを引き出して、定子を預かつてくれている乳母うばの家に持つて行こうと思つた時、葉子は紙幣の束を算かぞえながら、ふと内田の最後の言葉を思い出したのだった。物のない所に物を探るような心持ちで葉子は人力車を大塚のほうに走らした。

五年たつても昔のままの構えで、まばらにさし代えた屋根板と、めつきり延びた垣かきぞ添いの桐きりの木とが目立つばかりだった。砂きしみのする格子戸こうしどをあけて、帯前を整えながら出て来た柔和な細君さいくんと顔を合わせた時は、さすがに懐旧の情が二人の胸を騒がせた。細君は思わず知らず「まあどうぞ」といったが、その瞬間にはつとためらつたような様子になつて、急いで内田の書斎にはいつて行つた。しばらくすると嘆息しながら物をいうような内田の声が途切れ途切れに聞こえた。「上げるのは勝手だがおれが会う事はないじやないか」といったかと思うと、はげしい音を立てて読みさしの書物をぱたんと閉じる音がした。葉子は自分の爪つまさき先を見つめながら下くちびるをかねでいた。

やがて細君がおどしながら立ち現われて、まずと葉子を茶の間まに招じ入れた。それと入れ代わりに、書斎では内田が椅子いすを離れた音がして、やがて内田はずかずかと格子戸をあけて出て行つてしまった。

葉子は思わずふらふらと立ち上がろうとするのを、何気ない顔でじつとこらえた。せめては雷のような激しいその怒りの声に打たれたかった。あわよくば自分も思いきりいたい事をいつてのけたかった。どこに行っても取りあいもせず、鼻であしらい、鼻であしらわれ慣れた葉子には、何か真味な力で打ちくだかれるなり、打ちくだくなりして見たかった。それだったのに思い入って内田の所に来て見れば、内田は世の常の人々よりもいっそう冷ややかに酷く思われた。

「こんな事をいつては失礼ですけどもね葉子さん、あなたの事をいろいろにいつて来る人があるもんですからね、あのとおりの性質でしょう。どうもわたしにはなんともいいなだめようがないのですよ。内田があなたをお上げ申したのが不思議なほどだとわたし思いますの。このごろはことさらだれにもいわれないようなごたごたが家の内にあるもんですから、よけいむしやくしやして、ほんとうにわたしどうしたらいいかと思う事がありますの」

意地も生地きじも内田の強烈な性格のために存分に打ち砕かれた細君は、上品な顔立てに中世紀の尼にでも見るような思いあきらめた表情を浮かべて、捨て身の生活のどん底にひそむさびしい不足をほのめかした。自分より年下で、しかも良人おとこからさんざん悪評を投げら

れているはずの葉子に対してまで、すぐ心が碎けてしまつて、張りのない言葉で同情を求めるかと思うと、葉子は自分の事のように齒がゆかった。眉まゆと口とのあたりにむごたらしい輕蔑けいべつの影が、まざまざと浮かび上がるのを感じながら、それをどうする事もできなかった。葉子は急に青味を増した顔で細君を見やったが、その顔は世故せこに慣れきつた三十女のようなだった。(葉子は思うままに自分の年を五つも上にしたり下にしたりする不思議な力を持っていた。感情次第でその表情は役者の技巧のように変わった)

「齒がゆくはいらつしやらなくつて」

と切り返すように内田の細君の言葉をひったくつて、

「わたしだったらどうでしょう。すぐおじさんとけんかして出てしまいますわ。それはわたし、おじさんを偉い方かただとは思っていますが、わたしこんなに生まれついたんですからどうしようありませんわ。一から十までおつしやる事はいはいと聞いていられませんわ。おじさんもあんまりでいらつしやいますのね。あなたみたいな方に、そう笠かさにかからずとも、わたしでもお相手になさればいいのに……でもあなたがいらつしやればこそおじさんもああやつてお仕事がおできになるんですのね。わたしだけは除け物のですけれども、世の中はなかなかよくいっていますわ。……あ、それでもわたしはもう見放されてしまつ

たんですものね、いう事はありません。ほんとうにあなたがいらつしやるのでおじさんはお仕合わせですわ。あなたは辛抱なざる方。^{かた}おじさんはわがままでお通しになる方。^{かた}もつともおじさんにはそれが神様の思し召し^{おもほめ}なんでしょうけれどもね。……わたしも神様の思し召し^{おもめ}かなんかでわがままで通す女なんですからおじさんとはどうしても茶碗^{ちやわん}と茶碗ですわ。それでも男はようござんすのね、わがママが通るんですもの。女のわがママは通すよりしかたがないんですからほんとうに情けなくありますのね。何も前世の約束なんでしょうよ……」

内田の細君は自分よりはるか年下の葉子の言葉をしみじみと聞いているらしかった。葉子は葉子でしみじみと細君の身なりを見ないではいられなかった。一昨日^{おととい}あたり結つたまの束髪^{そくはつ}だった。癖のない濃い髪には薪^{たきぎ}の灰らしい灰がたかつていた。糊氣^{のりけ}のぬけきつた単衣^{ひとえ}も物さびしかった。その柄^{がら}の細かい所には里の母の着古しというような香^{にお}いがした。由緒^{ゆいしよ}ある京都の士族に生まれたその人の皮膚は美しかった。それがなおさらその人をあわれにして見せた。

「他人^{ひと}の事なぞ考えていられやしない」しばらくすると葉子は捨てばちにこんな事を思った。そして急にはずんだ調子になって、

「わたしあすアメリカに発ちますの、ひとりで」

と突拍子とつぴようしもなくいった。あまりの不意に細君は目を見張って顔をあげた。

「まあほんとうに」

「はあほんとうに……しかも木村の所に行くようになりましたの。木村、御存じでしょう」
細君がうなずいてなお仔細しさいを聞こうとすると、葉子は事もなげにさえぎって、

「だからきようはお暇いとまご乞いのつもりでしたの。それでもそんな事はどうでもようござい
ますわ。おじさんがお帰りになつたらよろしくおつしやってくださいまし、葉子はどんな
人間になり下がるかもしれません……あなたどうぞおからだをお大事に。太郎たろうさんは
まだ学校でございますか。大きくおなりでしょうね。なんぞ持って上げればよかったのに、
用がこんなものですから」

といいながら両手で大きな輪を作つて見せて、若々しくほほえみながら立ち上がった。

玄関に送つて出た細君の目には涙がたまっていた。それを見ると、人はよく無意味な涙
を流すものだと思ひ葉子は思った。けれどもあの涙も内田が無理無体にしぼり出させるような
ものだと思ひ直すと、心臓の鼓動が止まるほど葉子の心はかとなった。そして口びるを
震わしながら、

「もう一言おじさんにおつしやってくださいまし、七度を七十倍はなさらずとも、せめて三度ぐらいは人の尤も許して上げてくださいませいまして。……もつともこれは、あなたのおために申しますの。わたしはだれにあやまっていただくのもいやですし、だれにあやまるのもいやな性分なんですから、おじさんに許していただくとは頭から思つてなどいしませんの。それもついでにおつしやってくださいまし」

口のはたに戯談らしく微笑を見せながら、そういつているうちに、大濤がどすんどすんと横隔膜につきあたるような心地がして、鼻血でも出そうに鼻の孔がふさがった。門を出る時も口びるはなおくやしそうに震えていた。日は植物園の森の上に春いて、暮れがた近い空気の中に、けさから吹き出していた風はなぎた。葉子は今の心と、けさ早く風の吹き始めたところに、土蔵わきの小部屋で荷造りをした時の心とをくらべて見て、自分ながら同じ心とは思ひ得なかった。そして門を出て左に曲がろうとしてふと道ばたの捨て石にけつまずいて、はつと目がさめたようにあたりを見回した。やはり二十五の葉子である。いゝえ昔たしかに一度けつまずいた事があつた。そう思つて葉子は迷信家のようにもう一度振り返つて捨て石を見た。その時に日は……やはり植物園の森のあのへんにあつた。そして道の暗さもこのくらいだった。自分はその時、内田の奥さんに内田の悪口をいって、

ペテロとキリストとの間に取りかわされた寛恕かんじょに対する問答を例に引いた。いゝえ、それはきょうした事だった。きょう意味のない涙を奥さんがこぼしたように、その時も奥さんは意味のない涙をこぼした。その時にも自分は二十五……そんな事はない。そんな事のあるはずがない……変な……。それにしてもあの捨て石には覚えがある。あれは昔からあすこにちゃんとあった。こう思い続けて来ると、葉子は、いつか母と遊びに来た時、何か怒おこつてその捨て石にかじり付いて動かなかつた事をまざまざと心に浮かべた。その時は大きな石だと思つていたのにこれんぼちの石なのか。母が当惑して立つた姿がはつきり目先に現われた。と思うとやがてその輪郭が輝き出して、目も向けられないほど耀かがやいたが、すつと惜しげもなく消えてしまつて、葉子は自分のからだちゆううが中 有からどっしり大地におり立つたような感じを受けた。同時に鼻血がどくどく口から顎あごを伝つて胸の合わせ目をよごした。驚いてハンケチを袂たもとから探り出そうとした時、

「どうかなさいましたか」

という声に驚かされて、葉子は始めて自分のあとに人力車がついて来ていたのに気が付いた。見ると捨て石のある所はもう八九町後ろになつていた。

「鼻血なの」

と応えながら葉子は初めてのようにあたりを見た。そこには紺暖簾こんのれんを所せまくかけ渡した紙屋の小店があつた。葉子は取りあえずそこにはいつて、人目を避けながら顔を洗わしてもらおうとした。

四十格好の克明こくめいらしい内儀かみさんがわが事のように金鹽かなだらに水を移して持つて来てくれた。葉子はそれで白粉おしろい気のない顔を思う存分に冷やした。そして少し人心地ひとこころがついたので、帯の間から懷中鏡を取り出して顔を直そうとすると、鏡がいつのまにかま二つに破われていた。先刻けつまずいた拍子に破れたのかしらんと思つてみたが、それくらいで破れるはずはない。怒りに任せて胸がかつとなつた時、破れたのだろうか。なんだかそうらしくも思えた。それともあすの船出の不吉を告げる何かの業わざかもしれない。木村との行く末の破滅を知らせる悪い辻占つじうらかもしれない。またそう思うと葉子は襟元えりもとに凍つた針でも刺されるように、ぞくぞくとわけのわからない身ぶるいをした。いったい自分はどうかして行くのだろう。葉子はこれまでの見窮められない不思議な自分の運命を思うにつけ、これから先の運命が空恐ろしく心に描かれた。葉子は不安な怏鬱ゆううつな目つきをして店を見回した。帳場にすわり込んだ内儀かみさんの膝ひざにもたれて、七つほどの少女が、じつと葉子の目を迎えて葉子を見つめていた。やせぎすで、痛々しいほど目の大きな、そのくせ黒目の

小さな、青白い顔が、薄暗い店の奥から、香料や石鹼せっけんの香につつまれて、ぼんやり浮き出たように見えるのが、何か鏡の破れたのと縁でもあるらしくながめられた。葉子の心は全くふだんの落ち付きを失ってしまったようにわくわくして、立つてもすわってもいられないようになった。ばかなと思いつながらこわいものにでも追いつがられるようだった。

しばらくの間あいだ葉子はこの奇怪な心の動揺のために店を立ち去る事もしないでたたずんでいたが、ふとどうにでもなれという捨てばちな気になって元氣を取り直しながら、いくらかの札をしてそこを出た。出るには出たが、もう車に乗る気にもなれなかった。これから定子に会いに行つてよそながら別れを惜しもうと思つていたその心組みさえ物憂ものうかった。定子に会つたところがどうなるものか。自分の事すら次の瞬間には取りとめもないものを、他人の事——それはよし自分の血を分けた大切な独子ひとりごであろうとも——などを考えるだけがばかな事だと思つた。そしてもう一度その店から巻紙まきがみを買つて、硯箱すずりばこを借りて、男恥ずかしい筆跡で、出発前にもう一度乳母を訪れるつもりだったが、それができなくなつたから、この後とも定子をよろしく頼む。当座の費用として金を少し送つておくという意味を簡単にしたためて、永田から送つてよこした為替かわせの金を封入して、その店を出た。そしていきなりそこに待ち合はしていた人力車の上の膝掛けひざかをはぐつて、蹴込みけこに打

ち付けてある鑑札にすっかり目を通しておいて、

「わたしはこれから歩いて行くから、この手紙をここへ届けておくれ、返事はいらないのだから……お金ですよ、少しどつさりあるから大事にしてね」

と車夫にいいつけた。車夫はろくに見知りもないものに大金を渡して平気でいる女の顔を今さらのようにきよときよと見やりながら空^{からぐるま}俵^{たわ}を引いて立ち去った。大八車^{だいはちぐるま}が続けさまに田舎^{いなか}に向いて帰って行く小石川の夕暮れの中を、葉子は傘^{かさ}を杖^{つえ}にしながら思いにふけて歩いて行つた。

こもつた哀愁が、発しない酒のように、葉子のこめかみをちかちかと痛めた。葉子は人力車の行くえを見失つていた。そして自分ではまっすぐに釘^{くぎ}店のほうに急ぐつもりでいた。ところが實際は目に見えぬ力で人力車に結び付けられでもしたように、知らず知らず人力車の通つたとおりの道を歩いて、はつと気がついた時にはいつのまにか、乳母が住む下谷池^{したやいけ}の端^{はた}の或る曲がり角^{かど}に来て立つていた。

そこで葉子はぎよつとして立ちどまってしまった。短くなりまざつた日は本郷^{ほんごう}の高台に隠れて、往来には厨^{くりや}の煙とも夕靄^{ゆうもや}ともつかぬ薄い霧がただよって、街頭のランプの灯^ひがことに赤くちらほらちらほらともつていた。通り慣れたこの界隈^{かいわい}の空気は特別な親

しみをもつて葉子の皮膚をなでた。心よりも肉体のほうがよけいに定子のいる所にひき付けられるようにさえ思えた。葉子の口びるは暖かい桃の皮のような定子の頬の膚ざわりにあこがれた。葉子の手はもうめれんすの弾力のある軟らかい触感を感じていた。葉子の膝はふうわりとした軽い重みを覚えていた。耳には子供のアクセントが焼き付いた。目には、曲がり角の朽ちかかった黒板塀を透して、木部から稟けた笑窪のできる笑顔が否応なしに吸い付いて来た。……乳房はくすむったかった。葉子は思わず片頬に微笑を浮かべてあたりをぬすむように見回した。とちようどそこを通りかかった内儀さんが、何かを前掛けの下に隠しながらじつと葉子の立ち姿を振り返ってまで見て通るのに気がついた。

葉子は悪事でも働いていた人のように、急に笑顔を引っ込めてしまった。そしてこそそこそそこを立ちのいて不忍の池に出た。そして過去も未来も持たない人のように、池の端につくねんと突っ立ったまま、池の中の蓮の実の一つに目を定めて、身動きもせず、小半時立ち尽くしていた。

日の光がとつぷりと隠れてしまつて、往來の灯ばかりが足もとのたよりとなるころ、葉子は熱病患者のように濁りきつた頭をもてあまして、車に揺られるたびごとに眉を痛々しくしかめながら、釘店に歸つて來た。

玄関にはいろいろの足駄や靴がならべてあつたが、流行を作ろう、少なくとも流行に遅れまいというはなやかな心を誇るらしい履物といつては一つも見当たらなかつた。自分の草履を始末しながら、葉子はすぐに二階の客間の模様を想像して、自分のために親戚や知人が寄つて別れを惜しむというその席に顔を出すのが、自分自身をばかにしきつたことのようにしか思われなかつた。こんなくらいなら定子の所にでもいるほうがよほどましだつた。こんな事のあるはずだつたのをどうしてまた忘れていたものだろう。どこにいるのもいやだ。木部の家を出て、二度とは歸るまいと決心した時のような心持ちで、拾ひかけた草履をたたきに戻そうとしたその途端に、

「ねえさんもういや……いや」

といいながら、身を震わしてやにわに胸に抱きついて來て、乳の間のくぼみに顔を埋めながら、成人のするような泣きじやくりをして、

「もう行つちやいやですというのに」

とからく言葉が続けたのは貞世さだよだった。葉子は石のように立ちすくんでしまった。貞世は朝からふきげんになってだれのいう事も耳には入れずに、自分の帰るのばかりを待ちこがれていたに違いないのだ。葉子は機械的に貞世に引っぱられて階子段はしごだんをのぼって行った。

階子段をのぼりきつて見ると客間はしんとしていて、五十川いそがわ女史の祈禱きとうの声だけがおごそかに聞こえていた。葉子と貞世とは恋人のように抱き合いながら、アーメンという声の一座の人々からあげられるのを待つて室へやにはいった。列座の人々はまだ殊勝らしく頭をうなだれている中に、正座近くすえられた古藤ことうだけは昂然こうぜんと目を見開いて、襖ふすまをあけて葉子がしとやかにはいつて来るのを見まもっていた。

葉子は古藤にちよつと目で挨拶あいさつをして置いて、貞世を抱いたまま末座ひざに膝をついて、一同に遅刻のわびをしようとしてしていると、主人座にすわり込んでいる叔父おじが、わが子でもたしなめるように威儀を作つて、

「なんたらおそい事じゃ。きようはお前の送別会じゃぞい。……皆さんにいこうお待ちせするがすまんなから、今五十川きとうさんに祈禱きとうをお頼み申して、箸はしを取つていただこうと思つたところであつた……いつたいどこを……」

面と向かつては、葉子に口小言くちこいごと一ついいきらぬ器量なしの叔父が、場所もおりもあるにこんな場合に見せびらかしをしようとする。葉子はそつちに見向きもせず、叔父の言葉を全く無視した態度で急に晴れやかな色を顔に浮かべながら、

「ようこそ皆様……おそくなりまして。つい行かなければならない所が二つ三つありましたもんですから……」

とだれにともなくいつておいて、するすると立ち上がって、釘店くぎだなの往来に向いた大きな窓を後ろにした自分の席に着いて、妹の愛子と自分との間に割り込んで来る貞世の頭をなでながら、自分の上にばかり注がれる満座の視線を小うるさそうに払いのけた。そして片方の手でだいぶ乱れた髪びんのほつれをかき上げて、葉子の視線は人もなげに古藤のほうに走った。

「しばらくでしたのね……とうとう明朝あしたになりましたよ。木村に持って行くものは、一緒にお持ちになつて？……そう」

と軽い調子でいったので、五十川女史と叔父とが切り出そうとした言葉は、物のみごととさえぎられてしまった。葉子は古藤にそれだけの事をいうと、今度は当とうの敵ともいふべき五十川女史に振り向いて、

「おばさま、きよう途中でそれはおかしい事がありましたのよ。こうなんですの」

といいながら男女をあわせて八人ほど居ならんだ親類たちにずっと目を配って、

「車で駆け通つたんですから前も後もよくはわからないんですけれども、大時計のかどの所をひろこうじ広小路に出ようとしたら、そのかどにたいへんな人ばかりですの。なんだと思つて

見てみますとね、禁酒会の大道演説で、大きな旗が二三本立っていて、急ごしらえのテールに突つ立つて、夢中になつて演説している人があるんですの。それだけなら何も別に珍しいという事はないんですけれども、その演説をしている人が……だれだと思ひになつて……山脇やまわきさんですの」

一同の顔には思わず知らず驚きの色が現われて、葉子の言葉に耳をそばだてていた。先刻しかつめらしい顔をした叔父おじはもう白痴のように口をあけたまままで薄笑いをもらしながら葉子を見つめていた。

「それがまたね、いつものとおりに金きんとき時のように首筋までまっ赤かですの。『諸君』とか何とかいって大手を振り立ててしゃべっているのを、肝心かんじんの禁酒会員たちはあつけに取られて、黙つたまま引きさがつて見ているんですから、見物人がわいわいとおもしろがつてたかっているのも全くもつともですわ。そのうちに、あ、叔父さん、箸はしをおつけにな

るように皆様におつしやつてくださいまし」

叔父があわてて口の締まりをして、ぶつちようづら仏頂面に立ち返って、何かいおうとすると、葉子はまたそれには頓とんじやく着いそがわなく五十川女史のほうに向いて、

「あの肩の凝りこはすつかりおなおりになりました」

といったので、五十川女史の答えようとする言葉と、叔父のいい出そうとする言葉は氣まはちあずくも鉢合ふたりわせになつて、二人は所在なげに黙つてしまった。座敷は、底のほうに氣持ちの悪い暗流を潜めながら造り笑いをし合つているような不快な氣分に満たされた。葉子は「さあ来い」と胸の中で身構まゆえをしていた。五十川女史のそばにすわつて、神經質らしく眉をきらめかす中老の官吏は、射るようなまいましましげな眼光を時々葉子に浴びせかけていたが、いたたまれない様子でちよつと居ますまいをなおすと、ぎくしやくした調子で口をきつた。

「葉子さん、あなたもいよいよ身のかたまる瀬戸ぎわまでこぎ付けたんだが……」

葉子はすきを見せたら切り返すからといわんばかりな緊張した、同時に物を物としないうふうでその男の目を迎えた。

「何しろわたしども早月家さつきけの親類に取つてはこんなめでたい事はまずない。無いには無い

がこれからがあなたに頼み所だ。どうぞ一つわたしどもの顔を立てて、今度こそは立派な奥さんになっておもらいたいかがです。木村君はわたしもよく知つとるが、信仰も堅いし、仕事も珍しくはききできるし、若いに似合わぬ物のわかつた仁^{じん}だ。こんなことまで比較に持ち出すのはどうか知らないが、木部氏のような実行力の伴わない夢想家は、わたしなどは初めから不賛成だった。今度のはじたい段が違う。葉子さんが木部氏の所から逃げ帰つて来た時には、わたしもけしからんといった実は一人^{ひとり}だが、今になって見ると葉子さんはさすがに目が高かった。出て来ておいて誠によかった。いまに見なさい木村という仁なりや、立派に成功して、第一流の実業家に成り上がるにきまつている。これからなんといつても信用と金だ。官界に出ないのなら、どうしても実業界に行かなければうそだ。擲^{てきしん}身報国は官吏たるものの一特権だが、木村さんのようなまじめな信者にしこたま金を造つてもらわんじや、神の道を日本に伝え広げるにしてからが容易な事じやありませんよ。あなたも小さい時から米国に渡つて新聞記者の修業をするとかぐせのように妙な事をいつたもんだが（ここで一座の人はなんの意味もなく高く笑つた。おそらくはあまりしかつめらしい空気を打ち破つて、なんとかそこに余裕^{ゆとり}をつけるつもりが、みんなに起こつたのだらうけれども、葉子にとつてはそれがそうは響かなかつた。その心持ちはわかつ

ても、そんな事で葉子の心をはぐらかそうとする彼らの浅はかさがぐつと癪にさわった（新聞記者はともかくも……じゃない、そんなものになられては困りきるが（ここで一座はまたわけもなくばからしく笑った）米国行き的心愿はたしかにかなったのだ。葉子さんも御満足に違いなからう。あとの事はわたしどもがたしかに引き受けたから心配は無用にしてい、身をしめて妹さん方^{がた}のしめしにもなるほどの奮発を頼みます……えゝと、財産のほうの処分はわたしと田中さんとで間違ひなく固めるし、愛子さんと貞世さんのお世話は、五十川^{そがわ}さん、あなたにお願いしようじやありませんか、御迷惑ですが。いかがでしょう皆さん（そういつて彼は一座を見渡した。あらかじめ申し合わせができていたらしく一同は待ち設けたようにうなずいて見せた）どうじやろう葉子さん」

葉子は乞食^{こじき}の嘆願を聞く女王のような心持ちで、〇〇局長といわれるこの男のいう事を聞いていたが、財産の事などはどうでもいいとして、妹たちの事が話題に上るとともに、五十川女史を向こうに回して詰問のような対話を始めた。なんといつても五十川女史はその晩そこに集まった人々の中ではいちばん年配でもあったし、いちばんはばかられているのを葉子は知っていた。五十川女史が四角を思い出させるような頑^{がんじょう}丈な骨組みで、がつしりと正座に居直つて、葉子を子供あしらいにしようとするのを見て取ると、葉子の心

は逸^{はや}り熱した。

「いゝえ、わがままだとばかりお思いになつては困ります。わたしは御承知のような生まれでございますし、これまでもたびたび御心配かけて来ておりますから、人様^{ひとさま}同様に見ていただこうとはこれっぽかりも思つてはおりません」

といつて葉子は指の間になぶつていた楊枝^{ようじ}を老女史の前にふいと投げた。

「しかし愛子も貞世も妹でございます。現在わたしの妹でございます。口幅つたいと思し召^めすかもしれません、この二人^{ふたり}だけはわたしとい米国におりましても立派に手塩にかけて御覽にいきますから、どうかお構いなさらずにくださいまし。それは赤坂^{あかさか}学院も立派な学校には違いございますまい。現在私もおばさまのお世話であすこで育てていただいたのですから、悪くは申したくはございませんが、わたしのような人間が、皆様のお気に入らないとすれば……それは生まれつきもございましょうと、ございましょうけれども、わたしを育て上げたのはあの学校でございますからねえ。何しろ現在いて見た上で、わたしこの二人をあすこに入れる気にはなれません。女というものをあの学校ではいったいなんと見ているのでござんすかしらん……」

こういつているうちに葉子の心には火のような回想の憤怒が燃え上がった。葉子はその

学校の寄宿舎で一個の中性動物として取り扱われたのを忘れる事ができない。やさしく、愛らしく、しおらしく、生まれたままの美しい好意と欲念との命ずるままに、おぼろげながら神というものを恋しかけた十二三歳ごろの葉子に、学校は祈祷きとうと、節欲と、殺情とを強制的にたたき込もうとした。十四の夏が秋に移ろうとしたころ、葉子はふと思ひ立つて、美しい四寸幅ほどの角帯かくおびのようなものを絹糸で編みはじめた。藍あいの地に白で十字架と日月とをあしらった模様だった。物事にふけりやすい葉子は身も魂も打ち込んでその仕事に夢中になった。それを造り上げた上でどうして神様の御手に届けよう、というような事ともより考えもせずに、早く造り上げてお喜ばせ申そうとのみあせて、しまいには夜の間もろくろく合わさなくなつた。二週間に余る苦心の末にそれはあらかたでき上がった。藍の地に簡単に白で模様を抜くだけならさしたる事でもないが、葉子は他人のまだしなかつた試みを加えようとして、模様の周囲に藍と白とを組み合わせた小さな笹縁ささべりのようなものを浮き上げて編み込んだり、ひどく伸び縮みがして模様が歪形いびつにならないように、目立たないようにカタン糸を編み込んで見たりした。出来上がりが近づくとき葉子は片時も編み針を休めてはいられなかつた。ある時聖書の講義の講座でそつと机の下で仕事を続けていると、運悪くも教師に見つけられた。教師はしきりにその用途を問いただしたが、

恥じやすい乙女心おとめごころにどうしてこの夢よりもはかない目論見もくろみを白状する事ができよう。教師はその帯の色合いから推おして、それは男向きの品物に違いないと決めてしまった。そして葉子の心は早熟の恋を追うものと断定した。そして恋というものを生来知らぬげな四十五六の醜ようぼうい容貌の舎監は、葉子を監禁同様にして置いて、暇さえあればその帯の持ち主たるべき人の名を迫り問うた。

葉子はふと心の目を開いた。そしてその心はそれ以来峰から峰を飛んだ。十五の春には葉子はもう十も年上な立派な恋人を持っていた。葉子はその青年を思うさま翻弄ほんろうした。青年はまもなく自殺同様な死に方をした。一度生血の味をしめた虎とらの子のような渇欲が葉子の心を打ちのめすようになったのはそれからの事である。

「古藤さん愛と貞とはあなたに願いますわ。だれがどんな事をいおうと、赤坂学院には入れないでくださいまし。私きのう田島たじまさんの塾じゅくに行つて、田島さんにお会い申してよくお頼みして来ましたから、少し片付いたらはばかりさまですがあなた御自身で二人ふたりを連れていらしつてください。愛さんも貞ちゃんもわかりましたろう。田島さんの塾にはいるとね、ねえさんと一緒にいた時のようなわけには行きませんよ……」

「ねえさんてば……自分でばかり物をおつしやつて」

といきなり恨めしそうに、貞世は姉の膝をゆすりながらその言葉をさえぎった。

「さつきからなんど書いたかわからないのに平気でほんとにひどいわ」

一座の人々から妙な子だというふうにながめられているのにも頓着なく、貞世は姉のほうに向いて膝の上にしなだれかかりながら、姉の左手を長い袖の下に入れて、その手のひらに食指で仮名を一字ずつ書いて手のひらで拭き消すようにした。葉子は黙って、書いては消し書いては消しする字をたどって見ると、

「ネーサマハイコダカラ『アメリカ』ニイツテハイケマセンヨヨヨヨ」

と読まれた。葉子の胸はわれ知らず熱くなったが、しいて笑いにまぎらしながら、

「まあ聞きわけのない子なこと、しかたがない。今になってそんな事をいったってしかたがないじゃないの」

とたしなめ諭すようにいうと、

「しかたがあるわ」

と貞世は大きな目で姉を見上げながら、

「お嫁に行かなければよろしいじゃないの」

といって、くるりと首を回して一同を見渡した。貞世のかわいい目は「そうでしょう」

と訴えているように見えた。それを見ると一同はただなんという事もなく思いやりのない笑いかたをした。叔父おじはことに大きなとんきよな声で高々と笑った。先刻から黙ったままどうつむいてさびしくすわつていた愛子は、沈んだ恨めしそうな目でじつと叔父をにらめたと思うと、たちまちわくように涙をほろほろと流して、それを両袖でぬぐいもやらず立ち上がつてその部屋へやをかけ出した。階子段はしこだんの所でちょうど下から上がつて来た叔母と行きあつたけはいがして、二人ふたりが何かいい争うらしい声が聞こえて来た。

一座はまた白け渡しろわたりつた。

「叔父さんにも申し上げておきます」

と沈黙を破つた葉子の声が妙に殺気を帯びて響いた。

「これまで何かとお世話様になつてありがとうございましたけれども、この家もたたんでしまう事になれば、妹たちも今申したとおり塾じゅくに入れてしまいますし、この後はこれといつて大して御厄介ごやつかいはかけないつもりでございます。赤の他人の古藤さんにこんな事を願つてはほんとうにすみませんけれども、木村の親友でいらつしやるのですから、近い他人ですわね。古藤さん、あなた貧乏籤くじを背負い込んだと思し召おもほめして、どうか二人ふたりを見てやつてくださいましな。いいでしょう。こう親類の前ではつきり申しておきますから、ちつと

も御遠慮なさらずに、いいとお思いいなつたようになさってくださいまし。あちらへ着いたらわたしまたきつとどうともいたしますから。きつとそんなに長い間御迷惑はかけませんから。いかが、引き受けてくださいまして？」

古藤は少し躊躇ちゅうちょするふうで五十川いそがわ女史を見やりながら、

「あなたはさつきから赤坂学院のほうがいいとおっしゃるように伺っていますが、葉子さんのいわれるとおりにしてさしつかえないのですか。念のために伺っておきたいのですが」と尋ねた。葉子はまたあんなよいな事をいうと思いいながらいらした。五十川女史は日ごろの円滑な人ずれのした調子に似ず、何かひどく激昂げきこうした様子で、

「わたしは亡なくなった親佐おやささんのお考えはこうもあらうかと思つた所を申したまでですから、それを葉子さんが悪いとおっしゃるなら、その上とやかく言いともないのですが、親佐さんは堅い昔風な信仰を持つた方かたですから、田島さんの塾は前からきらいでね……よろしゅうございましょう、そうなされば。わたしはとにかく赤坂学院が一番だどこまでも思つとるだけです」

といいながら、見下げるように葉子の胸のあたりをまじまじとながめた。葉子は貞世を抱いたままちゃんと胸をそらして目の前の壁のほうに顔を向けていた、たとえばばらばら

と投げられるつづてを避けようともせず突つ立つ人のように。

古藤は何か自分一人ひとりで合点したと思うと、堅く腕組みをしてこれも自分の前の目八分ぶの所をじつと見つめた。

一座の気分はほとほと動きが取れなくなった。その間でいちばん早くきげんを直して相そ好うこうを変えたのは五十川女史いそがわだった。子供を相手にして腹を立てた、それを年がいなくても思つたように、気を変えてきさくに立ちじたくをしなから、

「皆さんいかが、もうお暇いそまにいたしましたら……お別れする前にもう一度お祈りをして」「お祈りをわたしのようなもののためになさつてくださるのは御無用に願います」

葉子は和らぎかけた人々の気分にはさらに頓とんじやく着ちゃくなく、壁に向けていた目を貞世に落として、いつのまにか寝入つたその人の艶つやつや々しい顔をなでさすりながらきつぱりといい放つた。

人々は思い思いな別れを告げて帰つて行つた。葉子は貞世がいつのまにか膝ひざの上に寝てしまつたのを口実にして人々を見送りには立たなかつた。

最後の客が帰つて行つたあとでも、叔父叔母おじおばは二階を片づけには上がつてこなかつた。挨拶あいさつ一つしようにもしなかつた。葉子は窓のほうに頭を向けて、煉瓦れんがの通りの上にぼう

つと立つ灯の照り返しを見やりながら、夜風にほてった顔を冷やさせて、貞世を抱いたまま黙ってすわり続けていた。間遠まどおに日本橋を渡る鉄道馬車の音が聞こえるばかりで、釘くぎだ店の人通りは寂しいほどまばらになっていた。

姿は見せずに、どこかのすみで愛子がまだ泣き続けて鼻をかんだりする音が聞こえていた。

「愛さん……貞ちゃんさあが寝ましたからね、ちよつとお床を敷いてやってちようだいな」

われながら驚くほどやさしく愛子に口をきく自分を葉子は見いだした。性しょうが合わないというのか、気が合わないというのか、ふだん愛子の顔さえ見れば葉子の気分はくずされてしまうのだった。愛子が何事につけても猫ねこのように従順で少しも情というものを見せないのがことさら憎かった。しかしその夜だけは不思議にもやさしい口をきいた。葉子はそれを意外に思った。愛子がいつものように素直すなおに立ち上がって、涙はなをすすりながら黙って床を取っている間に、葉子はおりおり往来のほうから振り返って、愛子のしとやかな足音や、綿を薄く入れた夏ぶとんの畳に触れるさやかな音を見入りでもするようにそのほうに目を定めた。そうかと思うとまた今さらのように、食い荒らされた食物や、敷いたままになっ
ている座ぶとんのきたならしく散らかった客間をまじまじと見渡した。父の書棚しよだなのあ

った部分の壁だけが四角に濃い色をしていた。そのすぐそばに西洋暦が昔のままにかけてあった。七月十六日から先ははがされずに残っていた。

「ねえさま敷けました」

しばらくしてから、愛子がこうかすかに隣でいった。葉子は、

「そう御苦労さまよ」

とまたしとやかに応えながら、貞世を抱きかかえて立ち上がろうとすると、また頭がぐらぐらツとして、おびただしい鼻血が貞世の胸の合わせ目に流れ落ちた。

九

底光りのする雲母^{きららいろ}色の雨雲が縫い目なしにどんよりと重く空いっぱいにはだかつて、本牧^{ほんもく}の沖合いまで東京湾の海は物すごいような草色に、小さく波の立ち騒ぐ九月二十五日の午後であった。きのうの風が凪^ないでから、気温は急に夏らしい蒸し暑さに返って、横浜の市街は、疫病にかかって弱りきった労働者が、そぼふる雨の中にぐったりとあえいで

いるように見えた。

靴くつの先で甲板かんばんをこつこつとたたいて、うつむいてそれをながめながら、帯の間に手をさし込んで、木村への伝言を古藤はひとり言ごごのように葉子にいった。葉子はそれに耳を傾けるような様子はしていたけれども、ほんとうはさして注意もせずに、ちやうど自分の目の前に、たくさんの見送り人に囲まれて、応接いとまに暇もなげな田川法学博士はかせの目じりの下がった顔と、その夫人のやせぎすな肩との描く微細な感情の表現を、批評家のような心で鋭くながめやっていた。かなり広いプロメネード・デッキは田川家の家族と見送り人とで縁日のようににぎわっていた。葉子の見送りに来たはずの五十川女史いそがわは先刻から田川夫人のそばに付ききつて、世話好きで、人のよい叔母さんおばというような態度で、見送り人の半分がたを自身で引き受けて挨拶あいさつしていた。葉子のほうへは見向こうとする模様もなかった。葉子の叔母は葉子から二三間けん離れた所に、蜘蛛くものような白痴の子を小婢こおんなに背負わして、自分は葉子から預かった手靴てかばんと袱紗包ふくさみとを取り落とさんばかりにぶら下げたまま、花々しい田川家の家族や見送り人の群れを見てあつけに取られていた。葉子の乳母うばは、どんな大きな船でも船は船だというようにひどく臆病おくびょう。そんな青い顔つきをして、サルンの入り口の戸の陰にたたずみながら、四角にたたんだ手ぬぐいをまっ赤かになった目の所に絶

えず押しあてては、ぬすみ見るように葉子を見やっていた。その他の人々はじみな一団になつて、田川家の威光に圧せられたようにすみのほうにかたまっていた。

葉子のかねて五十川女史から、田川夫婦が同船するから船の中で紹介してやるといい聞かせられていた。田川といえは、法曹界ではかなり名の聞こえた割合に、どこといって取りとめた特色もない政客ではあるが、その人の名はむしろ夫人のうわさのために世人の記憶にあざやかであつた。感受力の鋭敏なそしてなんらかの意味で自分の敵に回さなければならぬ人に対してことに注意深い葉子の頭には、その夫人の面影は長い事宿題として考えられていた。葉子の頭に描かれた夫人は我が強い、情の恣ままな、野心の深い割合に手練の露骨な、良人を軽く見てややともすると笠にかかりながら、それでいて良人から独立する事の到底できない、いわば心の弱い強がり家ではないかしらんというのだつた。葉子は今後ろ向きになつた田川夫人の肩の様子を一目見たばかりで、辞書でも繰り当てたように、自分の想像の裏書きをされたのを胸の中でほほえまずにはいられなかつた。

「なんだか話が混雑したようだけれども、それだけいつて置いてください」

ふと葉子は幻想から破れて、古藤のいうこれだけの言葉を捕えた。そして今まで古藤の口から出た伝言の文句はたいいてい聞きもらしていたくせに、空々しげにもなくしんみ

りとした様子で、

「確かに……けれどもあなたあとから手紙でも詳しく書いてやってくださいましね。間違いでもしているとたいへんですから」

と古藤をのぞき込むようにしていった。古藤は思わず笑いをもらしながら、「間違うとたいへんですから」という言葉を、時おり葉子の口から聞くチャームに満ちた子供らしい言葉の一つとでも思っているらしかった。そして、

「何、間違ったって大事はないけれども……だが手紙は書いて、あなたの寢床パースの枕まくらの下に置いときましたから、部屋へやに行ったらどこにでもしまっておいてください。それから、それと一緒にもう一つ……」

といいかけたが、

「何しろ忘れずに枕の下を見てください」

この時突然「田川法学博士はかせ万歳」という大きな声が、棧橋さんばしからデツキまでどよみ渡つて聞こえて来た。葉子と古藤とは話の腰を折られて互いに不快な顔をしながら、手欄てすりから下のほうをのぞいて見ると、すぐ目の下に、そのころ人の少し集まる所にはどこにでも顔とどろきを出す轟とどろきという剣舞の師匠だか撃剣の師匠だかする頑丈がんじょうな男が、大きな五つ紋くろばの黒

羽織おりのに白っぽい鯉魚かつお縞しまの袴はかまをはいて、棧橋はかばの板を朴ほの木下駄ぎげたで踏み鳴らしながら、こ
こを先途せんどとわめいていた。その声に応じて、デッキまではのぼって来ない壮士ていし体の政客や
某私立政治学校の生徒が一斉いっせいに万歳を繰り返した。デッキの上の外国船客は物珍ていしさに
いち早く、葉子がよりかかっている手欄てすりのほうに押し寄せて来たので、葉子は古藤を促し
て、急いで手欄の折れ曲がつたかどに身を引いた。田川夫婦もほほえみながら、サルンか
ら挨拶あいさつのために近づいて来た。葉子はそれを見ると、古藤のそばに寄り添ったまま、左
手をやさしく上げて、鬢びんのほつれをかき上げながら、頭を心持ち左にかしげてじつと田川
の目を見やった。田川は棧橋のほうに氣を取られて急ぎ足で手欄てすりのほうに歩いていたが、
突然見えぬ力にぐつと引きつけられたように、葉子のほうに振り向いた。

田川夫人も思わず良人おっとの向くほうに頭を向けた。田川の威厳に乏しい目にも鋭い光がき
らめいては消え、さらにきらめいて消えたのを見すまして、葉子は始めて田川夫人の目を
迎えた。額の狭い、顎あごの固い夫人の顔は、輕蔑けいべつと猜疑さいぎの色をみなぎらして葉子に向かっ
た。葉子は、名前だけをかねてから聞き知って慕っていた人を、今日の前に見たように、
うやうやしさと親しみとの交じり合った表情でこれに応じた。そしてすぐそのばかり、夫
人の前にも頓とん着じやくなく、誘惑のひとみを凝らしてその良人の横顔をじつと見やるのだっ

た。

「田川法学博士^{はかせ}夫人万歳」「万歳」「万歳」

田川その人に対してよりもさらに声^{こゝろだか}高な大歓呼が、棧橋にいて傘^{かさ}を振り帽子を動かす人々の群れから起こった。田川夫人は忙^{せわ}しく葉子から目を移して、群集に取つときの笑^{えが}顔を見せながら、レースで笹^{ささ}縁^{へり}を取ったハンケチを振らねばならなかった。田川のすぐそばに立つて、胸に何か赤い花をさして型のいいフロック・コートを着て、ほほえんでいた風流な若紳士は、棧橋の歓呼を引き取って、田川夫人の面前で帽子を高くあげて万歳を叫んだ。デツキの上はまた一しきりどよめき渡った。

やがて甲板の上は、こんな騒ぎのほかになんとか忙^{せわ}しくなつて来た。事務員や水夫たちが、物せわしように人中を縫うてあちこちする間に、手を取り合はんばかりに近よつて別れを惜しむ人々の群れがここにもかしこにも見え始めた。サルン・デツキから見ると、三等客の見送り人がボーイ長にせき立てられて、続々舷^{げんもん}門から降り始めた。それと入れ代わりに、帽子、上着、ズボン、ネクタイ、靴^{くつ}などの調和の少しも取れていないくせに、むやみに気取った洋装をした非番の下級船員たちが、ぬれた傘^{かさ}を光らしながら駆けこんで来た。その騒ぎの間に、一種生臭^{なまぐさ}いような暖かい蒸気が甲板の人を取り巻いて、フオク

スルのほうで、今までやかましく荷物をまき上げていた扛重機クレインの音が突然やむと、かーんとするほど人々の耳はかえつて遠くなつた。隔たつた所から互いに呼びかわす水夫らの高い声は、この船にどんな大危険でも起こつたかと思わせるような不安をまき散らした。親しい間の人たちは別れの切なさせつに心がわくわくしてろくに口もきかず、義理一ぺんの見送り人は、ややともするとまわりに気が取られて見送るべき人を見失う。そんなあわただしいばつびよう抜 錨の間ぎわになつた。葉子の前にも、急にいろいろな人が寄り集まつて来て、思い思いに別れの言葉を残して船を降り始めた。葉子はこんな混雑の間にも田川のひとみが時々自分に向けられるのを意識して、そのひとみを驚かすようなまめいたポーズや、たよりなげな表情を見せるのを忘れないで、言葉少なにそれらの人に挨拶あいさつした。叔父おじと叔母おとは墓の穴まで無事に棺を運んだ人夫のように、通り一ぺんの事をいうと、預かり物を葉子に渡して、手の塵ちりをはたかんばかりにすげなく、まっ先に舷梯げんていを降りて行つた。葉子はちらつと叔母の後ろ姿を見送つて驚いた。今の今までどことて似通う所の見えなかつた叔母も、その姉なる葉子の母の着物を帯まで借りて着込んでいるのを見ると、はつと思ふほどその姉にそっくりだつた。葉子はなんという事なしにいやな心持ちがした。そしてこんな緊張した場合にこんなちよつとした事にまでこだわる自分を妙に思った。そう思う

間もあらせず、今度は親類の人たちが五六人ずつ、口々に小やかましく何かいって、あわれむような妬むような目つきを投げ与えながら、幻影のように葉子の目と記憶とから消えて行つた。丸鬚まるまげに結つたり教師らしい地味じみな束髪に上げたりしている四人の学校友だちも、今は葉子とはかけ隔たつた境きようがい界の言葉づかいをして、昔葉子に誓つた言葉などは忘れてしまった裏切り者の空々しい涙を見せたりして、雨にぬらすまいと袂たもとを大事にかばいながら、傘にかくれてこれも舷梯げんていを消えて行つてしまった。最後に物おじする様子の乳母うばが葉子の前に来て腰をかがめた。葉子はどうとう行き詰まる所まで来たような思いをしながら、振り返つて古藤を見ると、古藤は依然として手欄てすりに身を寄せたまま、氣拔けでもしたように、目を据えて自分の二三間先げんをぼんやりながめていた。

「義一さん、船の出るの間が無さそうですからどうか此女これ……わたしの乳母ですの……の手を引いておろしてやってくださいましな。すべりでもすると怖こおうござんすから」

と葉子にいわれて古藤は始めてわれに返つた。そしてひとり言べごとのように、

「この船で僕もアメリカに行つて見たいなあ」

とのんきな事をいった。

「どうか桟橋まで見てやってくださいましね。あなたもそのうちぜひいらっしやいましな

……義一さんそれではこれでお別れ。ほんとうに、ほんとうに」

といいながら葉子はなんとなく親しみをいちばん深くこの青年に感じて、大きな目で古藤をじつと見た。古藤も今さらのように葉子をじつと見た。

「お礼の申しようありません。この上のお願いです。どうぞ妹たちを見てやってくださいまし。あんな人たちにはどうしたって頼んではおけませんから。……さようなら」

「さようなら」

古藤は鸚鵡返しに没義道にこれだけいつて、ふいと手欄を離れて、麦稗帽子を目深にかぶりながら、乳母に付き添った。

葉子は階子はしこの上がり口まで行つて二人に傘をかざしてやつて、一段一段遠ざかつて行く二人の姿を見送つた。東京で別れを告げた愛子や貞世の姿が、雨にぬれた傘のへんを幻影となつて見えたり隠れたりしたように思った。葉子は不思議な心の執着から定子にはどうとう会わないでしまった。愛子と貞世とはぜひ見送りがしたいというのを、葉子はしかりつけるようにいつてとめてしまった。葉子が人力車で家を出ようとすると、なんの気なしに愛子が前髪から抜いて鬢びんをかこうとした櫛くしが、もろくもぼきりと折れた。それを見ると愛子は堪こらえ堪こらえていた涙の堰せきを切つて声を立てて泣き出した。貞世は初めから腹でも立て

たように、燃えるような目からとめどなく涙を流して、じっと葉子を見つめてばかりいた。そんな痛々しい様子がその時まざまざと葉子の目の前にちらついたので。一人ぼっちで遠い旅に鹿島^{かしまだ}立つて行く自分というものがあじきなくも思いやられた。そんな心持ちになると忙しい間にも葉子はふと田川のほうを振り向いて見た。中学校の制服を着た二人の少年と、髪をお下げにして、帯をおはさみにしめた少女とが、田川と夫人との間にからまってちようど告別をしているところだった。付き添いの守^もりの女が少女を抱き上げて、田川夫人の口びるをその額に受けさしていた。葉子はそんな場面を見せつけられると、他人事^{ひとごと}ながら自分が皮肉でむちうたれるように思った。竜^{りゅう}をも化して牝豚^{めぶた}にするのは母となる事だ。今の今まで焼くように定子の事を思っていた葉子は、田川夫人に対してすっかり反対の事を考えた。葉子はそのいまましい光景から目を移して舷梯^{げんてい}のほうを見た。しかしそこにはもう乳母の姿も古藤の影もなかった。

たちまち船首のほうからけたたましい銅鑼^{どら}の音が響き始めた。船の上下は最後のどよめきに揺らぐように見えた。長い綱を引きずって行く水夫が帽子の落ちそうになるのを右の手でささえながら、あたりの空氣に激しい動揺を起こすほどの勢いで急いで葉子のかたわらを通りぬけた。見送り人は一斉^{いっせい}に帽子を脱いで舷梯のほうに集まって行った。その際

になつて五十川女史はたと葉子の事を思い出したらしく、田川夫人に何かいっておいて葉子のいる所にやつて来た。

「いよいよお別れになつたが、いつぞやお話した田川の奥さんにおひきあわせしようからちよつと」

葉子は五十川女史の親切ぶりの犠牲になるのを承知しつつ、一種の好奇心にひかされて、そのあとについて行こうとした。葉子に初めて物をいう田川の状態も見えてやりたかった。その時、

「葉子さん」

と突然いつて、葉子の肩に手をかけたものがあつた。振り返るとビールの酔いのおいがむせかえるように葉子の鼻を打つて、目の心まで紅くなつた知らない若者の顔が、近々と鼻先にあらわれていた。はつと身を引く暇もなく、葉子の肩はびしょぬれになつた酔いどれの腕でがつしりと巻かれていた。

「葉子さん、覚えていますかわたしを……あなたはわたしの命なんだ。命なんです」

といううちにも、その目からはほろほろと煮えるような涙が流れて、まだうら若いなめらかな頬を伝つた。膝から下がふらつくの葉子にすがって危うくささえながら、

「結婚をなさるんですか……おめでとう……おめでとう……だがあなたが日本にいないな
らと思うと……いたたまれないほど心細いんだ……わたしは……」

もう声さえ続かなかつた。そして深々と息氣をひいてしゃくり上げながら、葉子の肩に
顔を伏せてさめざめと男泣きに泣き出した。

この不意な出来事はさすがに葉子を驚かしもし、きまりも悪くさせた。だれだとも、い
つどこであつたとも思い出す由がない。木部孤きべこきようと別れてから、何という事なしに捨てば
ちな心地こころになつて、だれかれの差別もなく近寄つて来る男たちに対して勝手気ままを振る
舞つたその間に、偶然に出あつて偶然に別れた人の中の一人ひとりでもあろうか。浅い心でもて
あそんで行つた心の中にこの男の心もあつたであらうか。とにかく葉子には少しも思い当
たる節ふしがなかつた。葉子はその男から離れたい一心に、手に持った手て鞆かばんと包み物とを甲
板の上にほうりなげて、若者の手をやさしく振りほどこうとして見たが無益だった。親類
や朋輩ほうばいたちの事あれがしな目が等しく葉子に注がれているのを葉子は痛いほど身を感じ
ていた。と同時に、男の涙が薄い単衣ひとえの目を透とおして、葉子の膚にしみこんで来るのを感じ
た。乱れたつやつやしい髪のおいもつ鼻の先で葉子の心を動かそうとした。恥も外聞
も忘れ果てて、大空の下ですすり泣く男の姿を見ていると、そこにはかすかな誇りのよう

な気持ちかわいて来た。不思議な憎しみといとしさがこんがらかつて葉子の心の中で渦巻いた。葉子は、

「さ、もう放してくださいまし、船が出ますから」

ときびしくいつて置いて、かんで含めるように、

「だれでも生きてる間は心細く暮らすんですのよ」

とその耳もとにささやいて見た。若者はよくわかったというふうに深々とうなずいた。

しかし葉子を抱く手はきびしく震えこそすれ、ゆるみそうな様子は少しも見えなかった。

物々しい銅鑼どらの響きは左舷から右舷に回って、また船首のほうに聞こえて行こうとして

いた。船員も乗客も申し合わせたように葉子のほうを見守っていた。先刻から手持ちぶさ

たそうにただ立って成り行きを見ていた五十川女史は思いきって近寄って来て、若者を葉

子から引き離そうとしたが、若者はむずかる子供のよう^にに地だんだを踏んでますます葉子

に寄り添うばかりだった。船首のほうに群がって仕事をしながら、この様子を見守ってい

た水夫たちは一いっせいに高く笑い声を立てた。そしてその中の一人はわざと船じゆうに聞こ

え渡るようなくさめをした。拔は錨つびようの時刻は一秒一秒に逼せまっていた。物笑いの的まとになっ

ている、そう思うと葉子の心はいとしさから激しいとわしさに変わって行つた。

「さ、お放してください、さ」

ときわめて冷酷にいつて、葉子は助けを求めるようにあたりを見回した。

田川博士のそばにいて何か話をしていた一人の大^{たいひょう}兵な船員がいたが、葉子の当惑しきった様子を見ると、いきなり大股^{おおまた}に近づいて来て、

「どれ、わたしが下までお連れしましょう」

というや否や、葉子の返事も待たずに若者を事もなく抱きすくめた。若者はこの乱暴にかつとなつて怒り狂ったが、その船員は小さな荷物でも扱うように、若者の胸のあたりを右わきにかいこんで、やすやすと舷梯^{げんてい}を降りて行った。五十川女史はあたふたと葉子に挨拶^{あいさつ}もせず^あにそのあとに続いた。しばらくすると若者は栈橋の群集の間に船員の手からおろされた。

けたたましい汽笛が突然鳴りはためいた。田川夫妻の見送り人たちはこの声で活を入れられたようになつて、どよめき渡りながら、田川夫妻の万歳をもう一度繰り返した。若者を栈橋に連れて行つた、かの巨大な船員は、大きな体躯^{たいく}を猿^{ましう}のように軽くもてあつかつて、音も立てずに栈橋からずしずしと離れて行く船の上にただ一条の綱を伝つて上がつて来た。人々はまたその早業^{はやわざ}に驚いて目を見張つた。

葉子の目は怒気を含んで手欄てすりからしばらくの間かの若者を見据えていた。若者は狂氣のように両手を広げて船に駆け寄ろうとするのを、近所に居合わせた三四人の人があわてて引き留める、それをまたすり抜けようとして組み伏せられてしまった。若者は組み伏せられたまま左の腕を口にあてがって思いきりかみしりながら泣き沈んだ。その牛のうめき声のような泣き声が気疎けうとく船の上まで聞こえて来た。見送り人は思わず鳴りを静めてこの狂暴な若者に目を注いだ。葉子も葉子で、姿も隠さず手欄てすりに片手をかけたまま突っ立って、同じくこの若者を見据えていた。といって葉子はその若者の上ばかりを思っているのではなかった。自分でも不思議だと思うような、うつろな余裕がそこにはあった。古藤が若者のほうには目もくれずにじつと足もとを見つめているのにも気が付いていた。死んだ姉の晴れ着を借り着していい心地こころちになつてゐるような叔母おばの姿も目に映っていた。船のほうに後ろを向けて（おそらくそれは悲しみからばかりではなかったろう。その若者の挙動が老いた心をひしいだに違いない）手ぬぐいをしっかりと両眼にあててゐる乳母うばも見のがしてはいなかった。

いつのまに動いたともなく船は棧橋から遠ざかつていた。人の群れが黒蟻くろありのように集まったその光景は、葉子の目の前にひらけて行く大きな港の景色の中景になるまでに小

さくなつて行つた。葉子の目は葉子自身にも疑われるような事をしていた。その目は小さくなつた人影の中から乳母の姿を探り出そうとせず、一種のなつかしみを待つ横浜の市街を見納めにながめようとせず、凝然として小さくうずくまる若者ののらしい黒点を見つめていた。若者の叫ぶ声が、棧橋の上で打ち振るハンケチの時々ぎらぎらと光るごとに、葉子の頭の上に張り渡された雨よけの帆布ほぬのはしの端から余滴したたりがぽつりぽつりと葉子の顔を打つたびに、断続して聞こえて来るように思われた。

「葉子さん、あなたは私を見殺しにするんですか……見殺しにするん……」

一〇

始めての旅客も物慣れた旅客も、ばつびよう拔は 錨いかりしたばかりの船の甲板に立つては、落ち付いた心でいる事ができないようだった。跡始末のために忙せわしく右往左往する船員の邪魔になりながら、何かなしの興奮にじつとしてはいられないような顔つきをして、乗客は一人残ひとりらず甲板に集まつて、今まで自分たちがそば近く見ていた棧橋のほうに目を向けていた。葉子もその様子だけでいうと、他の乗客と同じように見えた。葉子は他の乗客と同じよう

に手欄てすりによりかかつて、静かな春雨はるさめのように降っている雨のしずくに顔をなぶらせながら、波止場はとばのほうをながめていたが、けれどもそのひとみにはなんにも映ってはいなかった。その代わり目と脳との間と覚おぼしいあたりを、親しい人や疎うとい人が、何かわけもなくせわしそうに現われ出て、銘々いちばん深い印象を与えるような動作をしては消えて行つた。葉子の知覚は半分眠つたようにぼんやりして注意するともなくその姿に注意をしていた。そしてこの半睡の状態が破れでもしたらたいへんな事になると、心のどこかのすみでは考えていた。そのくせ、それを物々しく恐れるでもなかった。からだまでが感覚的にしびれるような物うさを覚えた。

若者が現われた。(どうしてあの男はそれほどの因縁いんねんもないのに執念しゅうねく付きまつわるのだろうか)と葉子は他人事ひとごとのように思った)その乱れた美しい髪の毛が、夕日とかがやくまぶしい光の中で、ブロンドのようにきらめいた。かみしめたその左の腕から血がぼたぼたとしたたつていた。そのしたたりが腕から離れて宙に飛ぶごとに、虹色にじいろにきらきらと巴ともえを描いて飛び跳おどつた。

「……わたしを見捨てるん……」

葉子はその声をまざまざと聞いたと思つた時、目がさめたようにふつとあらためて港を

見渡した。そして、なんの感じも起こさないうちに、熟睡からちよつと驚かされた赤児あかごが、またたわいなく眠りに落ちて行くように、再び夢ともうつともない心に返って行つた。港の景色はいつのまにか消えてしまつて、自分で自分の腕にしがみ付いた若者の姿が、まざまざと現われ出た。葉子はそれを見ながらどうしてこんな変な心持ちになるのだろう。血のせいとでもいうのだろうか。事によるとヒステリーにかかつているのではないかしらんなどとのんきに自分の身の上を考えていた。いわば悠々ゆうゆう閑々と澄み渡つた水の隣に、薄紙ひとえ一重の界さかいも置かず、たぎり返つて渦巻うずき流れる水がある。葉子の心はその静かなほうの水に浮かびながら、滝川の中にもまれもまれて落ちて行く自分というものを他人ひとごと事のようにながめやつているようなものだった。葉子は自分の冷淡さにあきれながら、それでもやつぱり驚きもせず、手欄てすりによりかかつてじつと立っていた。

「田川法学博士はかせ」

葉子はまたふといたずら者らしくこんなことを思っていた。が、田川夫妻が自分と反対の舷げんの籐椅子とういすに腰かけて、世辞世辞しく近寄つて来る同船者と何か戯談じやうだんぐち口くちでもきいてるとひとりで決めると、安心でもしたように幻想はまたかの若者にかえつて行つた。葉子はふと右の肩に暖かみを覚えるように思った。そこには若者の熱い涙が浸しみ込んでいる

のだ。葉子は夢遊病者のような目つきをして、やや頭を後ろに引きながら肩の所を見ようとすると、その瞬間、若者を船から棧橋に連れ出した船員の事がはつと思ひ出されて、今まで盲^{めし}いていたような目に、まざまざとその大きな黒い顔が映った。葉子はなお夢みるような目を見開いたまま、船員の濃^{まゆ}い眉から黒い口髭^{くちひげ}のあたりを見守っていた。

船はもうかなり速力を早めて、霧のように降るともなく降る雨の中を走っていた。舷^{げんそ}側から吐き出される捨て水の音がざあざあ^{そく}と聞こえ出したので、遠い幻想の国から一足飛びに取って返した葉子は、夢ではなく、まがいもなく目の前に立っている船員を見て、なんという事なしにぎよつとほんとうに驚いて立ちすくんだ。始めてアダムを見たイヴのように葉子はまじまじと珍しくもないはずの一人^{ひとり}の男を見やった。

「ずいぶん長い旅ですが、何、もうこれだけ日本が遠くなりましたんだ」

といってその船員は右手を延べて居留地の鼻を指さした。がっしりした肩をゆすつて、勢いよく水平に延ばしたその腕からは、強くはげしく海上に生きる男の力がほとばしった。葉子は黙ったまま軽くうなずいた、胸の下の所に不思議な肉体的な衝動をかすかに感じながら。

「お一人^{ひとり}ですな」

塩がれた強い声がまたこう響いた。葉子はまた黙ったまま軽くうなずいた。

船はやがて乗りたての船客の足もとにかすかな不安を与えるほどに速力を早めて走り出した。葉子は船員から目を移して海のほうを見渡して見たが、自分のそばに一人の男が立っているという、強い意識から起こって来る不安はどうしても消す事ができなかった。葉子にしてはそれは不思議な経験だった。こつちから何か物をいいかけて、この苦しい圧迫を打ち破ろうと思ってもそれができなかった。今何か物をいったらきつとひどい不自然な物のいいかたになるに決まっている。そうかといってその船員には無頓着むとんじゃくにもう一度前のような幻想に身を任せようとしてもだめだった。神経が急にざわざわと騒ぎ立って、ぽーと煙けぶった霧雨きりさめのかなたさえ見とおせそうに目がはつきりして、先ほどのおつかぶさるような暗愁は、いつのまにかはかない出来心のしわざとしか考えられなかった。その船員は傍ぼう若じゃく無ぶ人じんに衣囊かくしの中から何か書いた物を取り出して、それを鉛筆でチェックしながら、時々思い出したように顔を引いて眉まゆをしかめながら、襟えりの折り返しについたしみを、親指つめの爪でごしごしと削ってははじいていた。

葉子の神経はそこにいたたまれないほどちかちかと激しく働き出した。自分と自分との間にのそのそと遠慮もなく大股おおまたではいり込んで来る邪魔者でも避けるように、その船員

から遠ざかろうとして、つと手欄てすりから離れて自分の船室のほうに階子段はしごだんを降りて行こうとした。

「どこにおいでです」

後ろから、葉子の頭から爪つまさき先までを小さなものででもあるように、一目に籠こめて見やりながら、その船員はこう尋ねた。葉子は、

「船室まで参りますの」

と答えないわけには行かなかった。その声は葉子の目論見もくろみに反して恐ろしくしとやかな響きを立てていた。するとその男は太股おまたで葉子とすれすれになるまで近づいて来て、

「船室カビンならば永田ながたさんからのお話もありましたし、おひとり旅のようでしたから、医務室のわきに移しておきました。御覧になった前の部屋へやより少し窮屈かもしれませんが、何かに御便利ですよ。御案内しましょう」

といいながら葉子をすり抜けて先に立った。何か芳醇ほうじゆんな酒のしみと葉巻煙草シガールとのにおいが、この男固有の膚のにおいでもあるように強く葉子の鼻をかすめた。葉子は、どしんどしんと狭い階子段はしごだんを踏みしめながら降りて行くその男の太い首から広い肩のあたりをじつと見やりながらそのあとに続いた。

二十四五脚の椅子が食卓に背を向けてずらつとならべてある食堂の中ほどから、横
 丁のような暗い廊下をちよつとはいると、右の戸に「医務室」と書いた頑丈な真
 鍮の札がかかつていて、その向かいの左の戸には「No.12 早月葉子殿」と白墨で書いた
 漆塗りの札が下がっていた。船員はつかつかとそこにはいつて、いきなり勢いよく医務
 室の戸をノックすると、高いダブル・カラーの前だけをはずして、上着を脱ぎ捨てた船医
 らしい男が、あたふたと細長いなま白い顔を突き出したが、そこに葉子が立っているのを
 目ざとく見て取つて、あわてて首を引つ込めてしまった。船員は大きなばかりの
 声で、

「おい十二番はすっかり掃除ができたろうね」

というと、医務室の中からは女のような声で、

「さしておきましたよ。きれいになつてはるはずですが、御覧なすってください。わたしは
 今ちよつと」

と船医は姿を見せずに答えた。

「こりやいったい船医の私室なんですが、あなたのためにお明け申すつていつてくれ
 たもんですから、ボーイに掃除するようにいつておきましたんです。ど、きれいにな

つとるかしらん」

船員はそうつぶやきながら戸をあけて一わたり中を見回した。

「むゝ、いいようです」

そして道を開いて、衣囊かくしから「日本郵船会社 絵島丸事務長 勲六等倉地三吉くらちさんきち」と書いた

大きな名刺を出して葉子に渡しながら、

「わたしが事務長をします。御用があつたらなんでもどうか」

葉子はまた黙つたままうなずいてその大きな名刺を手を受けた。そして自分の部屋へやときめられたその部屋の高いしきい閾を越えようとすると、

「事務長さんはそこでしたか」

と尋ねながら田川博士がその夫人と打ち連れて廊下の中に立ち現われた。事務長が帽子を取つて挨拶あいさつしようとしている間に、洋装の田川夫人は葉子を目ざして、スカートの絹ずれの音を立てながらつかつかと寄つて来て眼鏡めがねの奥から小さく光る目でじろりと見やりながら、

「五十川さんがうわさしていらした方はあなたね。なんとかおっしゃいましたねお名は」といった。この「なんとかおっしゃいましたね」という言葉が、名もないものをあわれ

んで見てやるという腹を充分に見せていた。今まで事務長の前で、珍しく受け身になっていた葉子は、この言葉を聞くと、強い衝動を受けたようになってわれに返った。どういう態度で返事をしてやろうかという事が、いちばんに頭の中で二十日鼠はつかねずみのようににはげしく働いたが、葉子はすぐ腹を決めてひどく下手したでに尋常に出た。「あ」と驚いたような言葉を投げた。丁寧に低くつむりを下げながら、

「こんな所まで……恐れ入ります。わたし早月葉さつきようと申しますが、旅には不慣れでおりますのにひとり旅でございますから……」

といってひとみを稲妻のように田川に移して、

「御迷惑ではございましょうが何分よろしく願います」

とまたつむりを下げた。田川はその言葉の終わるのを待ち兼ねたように引き取って、

「何不慣れはわたしの妻も同様ですよ。何しろこの船の中には女は二人ふたりぎりだからお互いです」

とあまりなめらかにいつてのけたので、妻の前でもはばかりように今度は態度を改めながら事務長に向かつて、

「チャイニース・ステアレージには何人なんにんほどいますか日本の女は」

と問いかけた。事務長は例の塩から声で

「さあ、まだ帳簿もろくろく整理して見ませんから、しっかりとばかり兼ねますが、何しろこのごろはだいぶふえました。三四十人もいますか。奥さんここが医務室です。何しろ九月といえ旧の二八月の八月ですから、太平洋のほうは暴^しける事もありますんだ。たまにはここにも御用ができますぞ。ちよつと船医も御紹介しておきますぞ」

「まあそんなに荒れますか」

と田川夫人は實際恐れたらしく、葉子を顧みながら少し色をかえた。事務長は事もなげに、

「暴^しけますんだずいぶん」

と今度は葉子のほうをまともに見やつてほほえみながら、おりから部屋^{へや}を出て来^こた興^{こうろ}録^くという船医を三人に引き合わせた。

田川夫妻を見送つてから葉子は自分の部屋にはいった。さらぬだにどこかじめじめするような船室^{カシ}には、きょうの雨のために蒸すような空気がこもっていて、汽船特有な西洋臭いにおいがことに強く鼻についた。帯の下になった葉子の胸から背にかけてあたりは汗がじんわりにじみ出たらしく、むしむしするような不愉快を感じるので、狭苦しい寝台^{バス}を取

りつけたり、洗面台を据えたりしてあるその間に、窮屈に積み重ねられた小荷物を見回しながら、帯を解き始めた。化粧鏡の付いた筆筒たんすの上には、果物くだもののかごが一つと花束が二つ載せてあつた。葉子は襟えり前まえをくつろげながら、だれからよこしたものとその花束の一つを取り上げると、そのそばから厚い紙切れのようなものが出て来た。手に取って見ると、それは手札形の写真だつた。まだ女学校に通っているらしい、髪を束そく髪はつにした娘の半身像で、その裏には「興録さま。取り残されたる千代ちよより」としてあつた。そんなものを興録がしまい忘れるはずがない。わざと忘れたふうに見せて、葉子の心に好奇心なり軽い嫉妬しつとなりをあおり立てようとする、あまり手もとの見えすいたからくりだと思ふと、葉子はさげすんだ心持ちで、犬にでもするようにぼいとそれを床の上にほうりなげた。一人ひとりの旅の婦人に対して船の中の男の心がどういふふうに動いているかをその写真一枚が語り貌がおだつた、葉子はなんという事なしに小さな皮肉な笑いを口びるの所に浮かべていた。

寝台の下に押し込んである平べったいトランクを引き出して、その中から浴衣ゆかたを取り出している、ノックもせずに突然戸をあけたものがあつた。葉子は思わず羞恥しゅうちから顔を赤らめて、引き出した派手はでな浴衣を楯たてに、しだらなく脱ぎかけた長襦袢ながじゆばんの姿をかくまいながら立ち上がって振り返って見ると、それは船医だつた。はなやかな下着を浴衣の所々

からのぞかせて、帯もなくほつそりと途方に暮れたように身を斜^{しや}にして立った葉子の姿は、男の目にはほしいままな刺激だった。懇意^{こんい}ずくらしく戸もたたかなかった興録もさすがにどぎまぎして、はいろいろにも出ようにも所在^{しきい}に窮して、闖^{しきい}に片足を踏み入れたまま当惑^{たうくわく}そうに立っていた。

「飛んだふうをしていまして御免くださいまし。さ、おはいり遊ばせ。どうぞ御用でもいらつしやいましたの」

と葉子は笑いかまけたようにいった。興録はいよいよ度を失いながら、

「いゝえ何、今でなくともいいのですが、元のお部屋のお枕^{まくら}の下にこの手紙が残っていましたのを、ボーイが届けて来ましたんで、早くさし上げておこうと思って実は何したんですか……」

といいながら衣囊^{かくし}から二通の手紙を取り出した。手早く受け取って見ると、一つは古藤が木村にあてたもの、一つは葉子にあてたものだった。興録はそれを手渡すと、一種の意味^{いみ}ありげな笑いを目だけに浮かべて、顔だけはいかにももつともらしく葉子を見やっていた。自分のした事を葉子もしたと興録は思っているに違いない。葉子はそう推量^{すいりやう}すると、かの娘の写真を床の上から拾い上げた。そしてわざと裏を向けながら見向きもしないで、

「こんなものがここにも落ちておりましたの。お妹さんでいらつしやいますか。おきれいですこと」

といいながらそれをつき出した。

興録は何かいいわけのような事をいって部屋へやを出て行った。と思うとしばらくして医務室のほうから事務長のらしい大きな笑い声が聞こえて来た。それを聞くと、事務長はまだそこにいたかと、葉子はわれにもなくはつとなつて、思わず着かえかけた着物の衣紋えもんに左手をかけたまま、うつむきかげんになつて横目をつかいながら耳をそばだてた。破裂するような事務長の笑い声がまた聞こえて来た。そして医務室の戸をさつとあけたらしく、声が急に一倍大きくなつて、

「Devil take it! No tame creature then,eh?」と乱暴にいう声が聞こえたが、それとともにマツチをする音がして、やがて葉巻はまきをくわえたままの口ごもりのする言葉で、

「もうじき検査けんえき船だ。準備はいいだろうな」

といい残したまま事務長は船医の返事も待たずに行ってしまったらしかった。かすかなにおいが葉子の部屋にも通かよつて来た。

葉子は聞き耳をたてながらうなだれていた顔を上げると、正面をきつて何という事なし

に微笑をもらした。そしてすぐぎよつとしてあたりを見回したが、われに返って自分一人きりなのに安堵して、いそいそと着物を着かえ始めた。

一一

絵島丸が横浜を抜はつびようみつかしてからもう三日たった。東京湾を出抜けると、黒潮に乗って、金華山きんかさん沖あたりからは航路を東北に向けて、まっしぐらに緯度を上のほぼつて行くので、気温は二日目あたりから目立って涼しくなつて行つた。陸の影はいつのまにか船のどの舷げんからもながめる事はできなくなつていた。背羽根の灰色な腹の白い海鳥が、時々思い出したようにさびしい声でなきながら、船の周囲を群れ飛ぶほかには、生き物の影とは見る事もできないようになつていた。重い冷たい潮霧ガスが野火のびの煙のように濛もう々もうと南に走つて、それが秋らしい狭霧さぎりとなつて、船体を包むかと思うと、たちまちからつと晴れた青空を船に残して消えて行つたりした。格別の風もないのに海面は色濃く波打ち騒いだ。三日目からは船の中に盛んにステイームが通り始めた。

葉子はこの三日というもの、一度も食堂に出ずに船室にばかり閉じこもっていた。船に

酔ったからではない。始めて遠い航海を試みる葉子にしては、それが不思議なくらいやすい旅だった。ふだん以上に食欲さえ増していた。神経に強い刺激が与えられて、とかく鬱結^{うつけつ}しやすかった血液も濃く重たいなりにもなめらかに血管の中を循環し、海から来る一種の力がからだのすみずみまで行きわたって、うずうずするほどの活力を感じさせた。もらし所のないその活気が運動もせずにいる葉子のからだから心に伝わって、一種の悵^{ゆうう}鬱^つに変わるようにさえ思えた。

葉子はそれでも船室を出ようとはしなかった。生まれてから始めて孤独に身を置いたような彼女は、子供のようにそれが楽しめたかったし、また船中で顔見知りのだれかれができる前に、これまでの事、これからの事を心にしめて考えてもみたいとも思った。しかし葉子が三日の間船室に引きこもり続けた心持ちには、もう少し違ったものもあった。葉子は自分が船客たちから激しい好奇の目で見られようとしているのを知っていた。立役^{たてやく}は幕明きから舞台に出ているものではない。観客が待ちに待って、待ちくたぶれそうになった時分に、しずしずと乗り出して、舞台の空気を思うさま動かさねばならぬのだ。葉子の胸の中にはこんなずるがしこいいたずらな心も潜^{ひそ}んでいたのだ。

三日目の朝電燈が百合^{ゆり}の花のしぼむように消えるころ葉子はふと深い眠りから蒸し暑さ

を覚えて目をさました。ステイムの通つて来るラディエターから、真空になった管の中に蒸気の冷えたしたたりが落ちて立てる激しい響きが聞こえて、部屋へやの中は軽く汗ばむほど暖まつていた。三日の間狭い部屋の中ばかりにいてすわり疲れ寝疲れのした葉子は、狭苦しい寝台バースの中に窮屈に寝ちぢまつた自分を見いだすと、下になった半身に軽いしびれを覚えて、からだを仰向けにした。そして一度開いた目を閉じて、美しく円味まるみを持った両の腕を頭の上に伸ばして、寝乱れた髪をもてあそびながら、さめぎわの快い眠りにまた静かに落ちて行つた。が、ほどもなくほんとうに目をさますと、大きく目を見開いて、あわてたように腰から上を起こして、ちやうど目通りのところにあるいちめんに水気で曇つた眼めを長い袖そでで押しぬぐつて、ほてつた頬ほおをひやひやするその窓ガラスにすりつけながら外を見た、夜はほんとうには明け離れていないで、窓の向こうには光のない濃い灰色がどんよりと広がっているばかりだった。そして自分のからだはずっと高まつてやがてまた落ちて行くなと思わしいところに、窓に近い舷げんにぎあつとあたつて碎けて行く波濤はとうが、単調な底力のある震動を船室に与えて、船はかすかに横にかしいだ。葉子は身動きもせず目にはその灰色をながめながら、かみしめるように船の動揺を味わつて見た。遠く遠く来たという旅情が、さすがにしみじみと感ぜられた。しかし葉子の目には女らしい涙は浮かばなかつ

た。活気のずんずん回復しつつあった彼女には何かパセティックな夢でも見ているような思いをさせた。

葉子はそうしたままで、過ぐる二日の間暇にまかせて思い続けた自分の過去を夢のように繰り返していた。連絡のない終わりのない絵巻がつぎつぎに広げられたり巻かれたりした。キリストを恋い恋うて、夜も昼もやみがたく、十字架を編み込んだ美しい帯を作つて献^{ささ}げようと一心に、日課も何もそちのけにして、指の先がささくれるまで編み針を動かした可^{かれん}憐な少女も、その幻想の中に現われ出た。寄宿舎の二階の窓近く大きな花を豊かに開いた木^{もく}蘭^{くらん}の香^{にお}いまでがそいらに漂つているようだった。国^{こく}分^{ぶん}寺^じ跡^しの、武^む蔵^{ざう}野^のの一角^{かく}らしい櫟^{いづみぎ}の林も現われた。すっかり少女のような無邪気な素^す直^{なお}な心になつてしまつて、孤^こ※^すとなると、その幻像はたわいもなく消えて、記憶はまた遠い過去に帰つて行つた。それがまただんだん現在のほうに近づいて来たと思うと、最後にはきつと倉地の姿が現われ出た。

それが葉子をいらいらさせて、葉子は始めて夢^{ゆめ}現^{うつ}の境からほんとうに目ざめて、うるさいものでも払いのけるように、眼^め窓^{まど}から目をそむけて寝^ね台^{だい}を離^{はな}れた。葉子の神経は朝からひどく興奮していた。ステイムで存分に暖まつて来た船室の中の空気は息^{いき}苦しい

ほどだった。

船に乗ってからろくろく運動もせずに、野菜氣やさいけの少ない物ばかりをむさぼり食べたので、身内の血には激しい熱がこもって、毛のさきへまでも通うようだった。寢台ベースから立ち上がった葉子は瞑眩めまいを感じるほどに上気して、氷のような冷たいものでもひしと抱きしめたい気持ちになった。で、ふらふらと洗面台のほうに行つて、ピツチャーの水をなみなみと陶器製の洗面盤にあげて、ずつぷりひたした手ぬぐいをゆるく絞つて、ひやつとするのを構わず、胸をあけて、それを乳房と乳房との間にぐつとあてがつてみた。強いはげしい動悸どうきが押えている手のひらへ突き返して来た。葉子はそうしたままで前の鏡に自分の顔を近づけて見た。まだ夜の氣が薄暗くさまよっている中に、頬ほおをほてらしながら深い呼吸をしている葉子の顔が、自分にすら物すごいほどなまめかしく映っていた。葉子は物好きらしく自分の顔に訳のわからない微笑をたたえて見た。

それでもそのうちに葉子の不思議な心のどよめきはしずまって行つた。しずまって行くにつれ、葉子は今までの引き続きでまた瞑想的めいそうてきな氣分に引き入れられていた。しかしその時はもう夢想家ではなかった。ごく實際的な鋭い頭が針のように光つてとがっていた。葉子はぬれ手ぬぐいを洗面盤にほうりなげておいて、静かに長椅子ながいすに腰をおろした。

笑い事ではない。いったい自分はどうするつもりでいるんだろう。そう葉子は出発以来の問いをもう一度自分に投げかけてみた。小さい時からまわりの人たちにはばかられるほど才はじけて、同じ年ごろの女の子とはいっても一調子違った行きかたを、するでもなくして来なければならなかった自分は、生まれる前から運命にでも呪^{のろ}われているのだろうか。それかといつて葉子はすべての女の順々に通^{とお}つて行く道を通る事はどうしてもできなかった。通つて見ようとした事は幾度あつたかわからない。こうさえ行けばいいのだろうと通つて来て見ると、いつでも飛んでもなく違った道を歩いている自分を見いだしてしまつていた。そしてつまずいては倒れた。まわりの人たちは手を取つて葉子を起こしてやる仕^{しかた}方も知らないような顔をしてただばかりくあざわらっている。そんなふうにししか葉子には思えなかった。幾度ものそんな苦い経験が葉子を片意地な、少しも人をたよううとしない女にしてしまった。そして葉子はいわば本能の向かせるように向いてどんどん歩くよりしかたがなかった。葉子は今さらのように自分のまわりを見回して見た。いつのまにか葉子はいちばん近いはずの人たちからもかけ離れて、たった一人^{ひとり}で幄^{がけ}のきわに立っていた。そこでただ一つ葉子を幄の上につないでいる綱には木村との婚約という事があるだけだ。そこに踏みとどまればよし、さもなければ、世の中との縁はたちどころに切れてしまうの

だ。世の中に活いきながら世の中との縁が切れてしまうのだ。木村との婚約で世の中は葉子に対して最後の和睦わぼくを示そうとしているのだ。葉子に取って、この最後の機会をも破り捨てようというのはさすがに容易ではなかった。木村といふ首くび桎かせを受けないでは生活の保障が絶え果てなければならぬのだから。葉子の懷中には百五十ドルの米貨があるばかりだった。定子の養育費だけでも、米国に足をおろすや否や、すぐに木村にたよらなければならぬのは目の前にわかつていた。後ご詰づめとなってくれる親類の一人もないのはもちろんの事、ややともすれば親切ごかしに無いものまでせびり取ろうとする手合いが多いのだ。たまたま葉子の姉妹の内実を知って気の毒だと思っても、葉子ではというように手出しを控えるものばかりだった。木村——葉子には義理にも愛も恋も起こり得ない木村ばかりが、葉子に対するただ一人の戦士なのだ。あわれな木村は葉子の蠱惑チャームに陥ったばかりで、早さつきけ月家の人々から否いや応おうなしにこの重い荷を背負わされてしまっているのだ。どうしてやろう。

葉子は思い余ったその場のがれから、筆筒たんすの上に興録こうろくから受け取ったまま投げ捨てて置いた古藤の手紙を取り上げて、白い西洋封筒の一端を美しい指の爪つめで丹念たんねんに細く破り取って、手筋は立派ながらまだどこかたどしい手跡でペンで走り書きした文句を読み

下して見た。

「あなたはおさんどんになるという事を想像してみる事ができますか。おさんどんという仕事^{なぞ}が女にあるという事を想像してみる事ができますか。僕はあなたを見る時はいつでもそう思つて不思議な心持ちになつてしまいます。いったい世の中には人を使つて、人から使われるという事を全くしないという人があるものでしょうか。そんな事ができるものでしょうか。僕はそれをあなたに考えていただきたいのです。

あなたは奇態な感じを与える人です。あなたのなさる事はどんな危険な事でも危険らしく見えません。行きづまった末にはこうという覚悟がちゃんとできているように思われるからでしょうか。

僕があなたに始めてお目にかかったのは、この夏あなたが木村君と一緒に八幡^{やわた}に避暑をしておられた時ですから、あなたについては僕は、なんにも知らないといつていいくらいです。僕は第一一般的に女というものについてなんにも知りません。しかし少しでもあなたを知つただけの心持ちからいうと、女の人というものは僕に取つては不思議な謎^{なぞ}です。あなたはどこまで行つたら行きづまると思っているんです。あなたはすでに木村君で行きづまっている人なんだと僕には思われるのです。結婚を承諾した以上はその

良人おつとに行きづまるのが女の人の当然な道ではないでしょうか。木村君で行きづまってください。木村君にあなたを全部与えてください。木村君の親友としてこれが僕の願いです。

全体同じ年齢でありながら、あなたからは僕などには子供に見えるのでしょから、僕という事などは頓とん着じゃくなさらないかと思いますが、子供にも一つの直覚があります。そして子供はきつぱりした物の姿が見たいのです。あなたが木村君の妻になると約束した以上は、僕という事にも權威があるはずだと思います。

僕はそうはいいながら一面にはあなたがうらやましいようにも、憎いようにも、かわいそうなようにも思います。あなたのならぬ事が僕の理性を裏切って奇怪な同情を喚よび起こすようにも思います。僕は心の底に起こるこんな働きをもしいて押しつぶして理屈一方に固まろうとは思いません。それほど僕は道学者ではないつもりです。それだからといって、今のままのあなたでは、僕にはあなたを敬親する気は起こりません。木村君の妻としてあなたを敬親したいから、僕はあえてこんな事を書きました。そういう時が来るようにしてほしいのです。

木村君の事を——あなたを熱愛してあなたの上に希望をかけている木村君の事を考え

ると僕はこれだけの事を書かずにはいられなくなります。

古藤義一

木村葉子様」

それは葉子に取ってはほんとうの子供っぽい言葉としか響かなかった。しかし古藤は妙に葉子には苦手^{にがて}だった。今も古藤の手紙を読んで見ると、ばかばかしい事がいわれているとは思いながらも、いちばん大事な急所を偶然のようにしっかりと捕えているようにも感じられた。ほんとうにこんな事をしていると、子供と見くびっている古藤にもあわれまれるはめになりそうな気がしてならなかった。葉子はなんとこの事なく怏鬱^{ゆううつ}になって古藤の手紙を巻きおさめもせず膝^{ひざ}の上に置いたまま目をすえて、じつと考えるともなく考えた。

それにしても、新しい教育を受け、新しい思想を好み、世事にうといだけに、世の中の習俗からも飛び離れて自由でありげに見える古藤さえが、葉子が今立っている岨^{がけ}のきわから先には、葉子が足を踏み出すのを憎み恐れる様子を明らかに見せているのだ。結婚というものが一人の女^{ひと}に取って、どれほど生活という実際問題と結び付き、女がどれほどその束縛の下に悩んでいるかを考えてみる事さえしようとはしないのだ。そう葉子は思ってもみた。

これから行こうとする米国という土地の生活も葉子はひとりでいろいろと想像しないではいられなかった。米国の人たちはどんなふうに自分を迎え入れようとはするだろう。とにかく今までの狭い悩ましい過去と縁を切つて、何の関りかかわもない社会の中に乗り込むのはおもしろい。和服よりもはるかに洋服に適した葉子は、その交際社会でも風俗では米国人を笑わせない事ができる。歓楽でも哀傷でもしつくりと実生活の中に織り込まれていくような生活がそこにはあるに違いない。女のチャームというものが、習慣的な絆きずなから解き放されて、その力だけに働く事のできる生活がそこにはあるに違いない。才能と力量さえあれば女でも男の手を借りずに自分をまわりの人に認めさせる事のできる生活がそこにはあるに違いない。女でも胸を張つて存分呼吸のできる生活がそこにはあるに違いない。少なくとも交際社会のどこかではそんな生活が女に許されているに違いない。葉子はそんな事を空想するとむずむずするほど快活になった。そんな心持ちで古藤の言葉などを考えてみると、まるで老人の繰り言のようにしか見えなかった。葉子は長い黙想の中から活々いきいきと立ち上がった。そして化粧をすましたために鏡のほうに近づいた。

木村を良人おつととするのになんの屈託くつたくがあろう。木村が自分の良人おつとであるのは、自分が木村の妻であるというほどに軽い事だ。木村という仮面……葉子は鏡を見ながらそう思つて

ほほえんだ。そして乱れかかる額ぎわの髪を、振り仰いで後ろになでつけたり、両方の鬢^{びん}を器用にかき上げたりして、良工が細工物でもするように楽しみながら元氣よく朝化粧を終えた。ぬれた手ぬぐいで、鏡に近づけた目のまわりの白粉^{おしろい}をぬぐい終わると、口びるを開いて美しくそろった歯並みをながめ、両方の手の指を壺^{つぼ}の口のように一^{ひとところ}所に集めて爪^{つめ}の掃除が行き届いているか確かめた。見返ると船に乗る時着て来た単衣^{ひとえ}のじみな着物は、世捨て人のようにだらりと寂しく部屋^{へや}のすみの帽子かけにかかったままになっていた。葉子は派手^{はで}な衿^{あわせ}をトランクの中から取り出して寝衣^{ねまき}と着かえながら、それに目をやると、肩にしっかりとしがみ付いて、泣きおめいた彼^かの狂氣じみた若者の事を思った。と、すぐそのそばから若者を小わきにかかえた事務長の姿が思い出された。小雨の中を、外套^{がいとう}も着ずに、小荷物でも運んで行ったように若者を棧橋の上におろして、ちよつと五十川女史^{いそがわ}に挨拶^{あいさつ}して船から投げた綱にすがるや否や、静かに岸から離れてゆく船の甲板の上に軽々と上がって来たその姿が、葉子の心をくすぐるように樂しませて思い出された。

夜はいつのまにか明け離れていた。眼窓^{めまど}の外は元のままに灰色はしているが、活々^{いきいき}とした光が添い加わって、甲板の上を毎朝規則正しく散歩する白髪の米人とその娘との足音がこつこつ快活らしく聞こえていた。化粧をすました葉子は長椅子^{ながいす}にゆっくり腰をかけて、

両足をまつすぐにそろえて長々と延ばしたまま、うつとりと思うともなく事務長の事を思っていた。

その時突然ノックをしてボーイがコーヒーを持ってはいって来た。葉子は何か悪い所でも見つけられたようにちよつとぎよつとして、延ばしていた足の膝ひざを立てた。ボーイはいつものように薄笑いをしてちよつと頭を下げて銀色の盆をたたみす畳椅子の上においた。そしてきょうも食事はやはり船室に運ぼうかと尋ねた。

「今晚からは食堂にしてください」

葉子はうれしい事でもいつて聞かせるようにこういった。ボーイはまじめくさつて「はい」といったが、ちらりと葉子を上目で見て、急ぐように部屋へやを出た。葉子はボーイが部屋へやを出てどんなふうをしているかがはつきり見えるようだった。ボーイはすぐににこにこ不思議な笑いをもらしながらケーキ・ウオークの足つきで食堂のほうに帰って行つたに違いない。ほどもなく、

「え、いよいよ御来迎？」
ごらいこう

「来たね」

というような野卑な言葉が、ボーイらしい軽薄な調子でこわだか声高に取りかわされるのを葉

子は聞いた。

葉子はそんな事を耳にしながらやはり事務長の事を思っていた。「三日も食堂に出ないで閉じこもっているのに、なんという事務長だろう、一ぺんも見舞いに来ないとはあんまりひどい」こんな事を思っていた。そしてその一方では縁もゆかりもない馬のようにただ頑がんじょう丈ひとりな一人の男がなんでこう思い出されるのだろうと思っていた。

葉子は軽いため息について何げなく立ち上がった。そしてまた長椅子ながいすに腰かける時には棚たなの上から事務長の名刺を持つて来てながめていた。「日本郵船会社絵島丸事務長勲六等倉地三吉」と明朝ミンチョウではつきり書いてある。葉子は片手でコーヒーをすすりながら、名刺を裏返してその裏をながめた。そしてまっ白なその裏に何か長い文句でも書いてあるかのよう、二重になる豊かな顎あごを襟えりの間に落として、少し眉まゆをひそめながら、長い間まじろぎもせず見つめていた。

一一一

その日の夕方、葉子は船に来てから始めて食堂に出た。着物は思いきって地味じみなくすん

だのを選んだけれども、顔だけは存分に若くつくっていた。二十を越すや越さずに見える、目の大きな、沈んだ表情の彼女の襟の藍鼠あいなずみは、なんとなく見る人の心を痛くさせた。細長い食卓の一端に、カップ・ボードを後ろにして座を占めた事務長の右手には田川夫人がいて、その向かいが田川博士、葉子の席は博士のすぐ隣に取ってあった。そのほかの船客も大概はすでに卓に向かつていた。葉子の足音が聞こえると、いち早く目くばせをし合ったのはボーイ仲間で、その次にひどく落ち付かぬ様子をし出したのは事務長と向かい合つて食卓の他の一端にいた鬚ひげの白いアメリカ人の船長であつた。あわてて席を立て、右手にナプキンを下げながら、自分の前を葉子に通らせて、顔をまっ赤かにして座に返つた。葉子はしとやかに人々の物数ものずき奇らしい視線を受け流しながら、ぐるっと食卓を回つて自分の席まで行くと、田川博士はぬすむように夫人の顔をちよつとうかがつておいて、肥ふとつたからだをよけるようにして葉子を自分の隣にすわらせた。

すわりずまいをただしている間、たくさんの注視の中にも、葉子は田川夫人の冷たいひとみの光を浴びているのを心地悪いほどに感じた。やがてきちんとつつましく正面を向いて腰かけて、ナプキンを取り上げながら、まず第一に田川夫人のほうに目をやってそつと挨拶あいさつすると、今までの角々かどかどしい目にもさすがに申しわけほどの笑えみを見せて、夫人が

何かいおうとした瞬間、その時までぎこちなく話を途切らしていた田川博士も事務長のほうを向いて何かいおうとしたところであつたので、両方の言葉が気まずくぶつかりあつて、夫婦は思わず同時に顔を見合わせた。一座の人々も、日本人といわず外国人といわず、葉子に集めていたひとみを田川夫妻のほうに向けた。「失礼」といつてひかえた博士に夫人はちよつと頭を下げておいて、みんなに聞こえるほどはつきり澄んだ声で、

「とんと食堂においでがなかつたので、お案じ申しましたの、船にはお困りですか」

といった。さすがに世慣れて才走つたその言葉は、人の上に立ちつけた重みを見せた。

葉子にはこやかに黙つてうなずきながら、位を一段落として会釈するのをそう不快には思わぬくらいだつた。二人の間の挨拶ふたりあいさつはそれなりで途切れてしまつたので、田川博士はかせはおむろに事務長に向かつてし續けていた話の糸目をつなごうとした。

「それから……その……」

しかし話の糸口は思うように出て来なかつた。事もなげに落ち付いた様子に見える博士の心の中に、軽い混乱が起こつてゐるのを、葉子はすぐ見て取つた。思いどおりに一座の気分を動揺させる事ができるという自信が裏書きされたように葉子は思つてそつと満足を感じていた。そしてボーイ長のさしずでボーイらが手器用てぎように運んで来たポタージュをす

りながら、田川博士のほうの話に耳を立てた。

葉子が食堂に現われて自分の視界にはいつてくると、臆^{おく}面^{めん}もなくじつと目を定めてその顔を見やった後に、無頓着^{むとんじやく}にスプーンを動かしながら、時々食卓の客を見回して気を配っていた事務長は、下くちびるを返して鬚^{ひげ}の先を吸いながら、塩さびのした太い声で、

「それからモンロー主義の本体は」

と話の糸目を引っぱり出しておいて、ともに博士を打ち見やった。博士は少し面伏^{おもふ}せな様子で、

「そう、その話でしたな。モンロー主義もその主張は初めのうちは、北米の独立諸州に対してヨーロッパの干渉を拒むというだけのものであったのです。ところがその政策の内容は年と共にだんだん変わっている。モンローの宣言は立派に文字になって残っているけれども、法律というわけではなし、文章も融^{ゆう}通^{づう}がきくようにできているので、取りようによつては、どうにでも伸縮する事ができるのです。マツキンレー氏などはずいぶん極端にその意味を拡張しているらしい。もつともこれにはクリーブランドという人の先例もあるし、マツキンレー氏の下にはもう一人有力な黒幕があるはずだ。どうです齋^{さい}藤^{とう}君」と二三人おいた斜向^{はすか}いの若い男を顧みた。齋藤と呼ばれた、ワシントン公使館赴任の外

交官補は、まっ赤になつて、今まで葉子に向けていた目を大急ぎで博士のほうにそらして見たが、質問の要領をはつきり捕えそこねて、さらに赤くなつて術ない身ぶりをした。これほどの席にさえかつて臨んだ習慣のないらしいその人の素性がそのあわてかたに充分に見えすいていた。博士は見下したような態度で暫時その青年のどぎまぎした様子を見ていたが、返事を待ちかねて、事務長のほうを向こうとした時、突然はるか遠い食卓の一端から、船長が顔をまっ赤にして、

「You mean Teddy the roughrider?」

といいながら子供のような笑顔えがほを人々に見せた。船長の日本語の理解力をそれほどに思い設けていなかったらしい博士は、この不意打ちに今度は自分がまごついて、ちよつと返事をしかねていると、田川夫人がさそくにそれを引き取つて、

「Good hit for you, Mr. Captain !」

と癖のない発音でいつてのけた。これを聞いた一座は、ことに外国人たちは、椅子いすから乗り出すようにして夫人を見た。夫人はその時人ひとの目にはつきかねるほどの敏捷すばしこさで葉子のほうをうかがつた。葉子は眉まゆ一つ動かさずに、下を向いたままでスープをすすつていた。

慎み深く大きじを持ちあつかいながら、葉子は自分に何かきわ立った印象を与えようとして、いろいろなまねを競い合っているような人々のさまを心の中で笑っていた。實際葉子が姿を見せてから、食堂の空気は調子を変えていた。ことに若い人たちの間には一種の重苦しい波動が伝わったらしく、物をいう時、彼らは知らず知らず激昂げきこうしたような高い調子になっていた。ことにいちばん年若く見える一人の上品な青年——船長の隣座にいるので葉子は家柄いえがらの高い生まれに違いないと思った——などは、葉子と一目顔を見合わせた。だが最後、震えんばかりに興奮して、顔を得上げえないでいた。それなのに事務長だけは、いつこう動かされた様子が見えぬばかりか、どうかした拍子ひょうしに顔を合わせた時でも、その臆面おくめんのない、人を人とも思わぬような熟視は、かえって葉子の視線をたじろがした。人間をながめあきたような気倦けだるげなその目は、濃いまつ毛の間から insolent な光を放つて人を射た。葉子はこうして思わずひとみをたじろがすたびにごとに事務長に対して不思議な憎しみを覚えるとともに、もう一度その憎むべき目を見すえてその中に潜む不思議な分に見窮めてやりたい心になった。葉子はそうした気分に従されて時々事務長のほうにひきつけられるように視線を送ったが、そのたびごとに葉子のひとみはもろくも手きびしく追い退けられた。

こうして妙な気分が食卓の上に織りなされながらやがて食事は終わった。一同が座を立つ時、物慣らされた物腰で、椅子いすを引いてくれた田川博士はかせにやさしく微笑を見せて礼をしながらも、葉子はやはり事務長の挙動を仔細しさいに見る事に半ば気を奪われていた。

「少し甲板に出てごらんになりました。寒くとも気分は晴れ晴れますから。わたしもちよと部屋へやに帰ってシヨールを取って出て見ます」

こう葉子にいつて田川夫人は良人おとこと共に自分の部屋のほうに去って行つた。

葉子も部屋に帰って見たが、今まで閉じこもつてばかりいるときほどにも思わなかつたけれども、食堂ほどの広さの所からでもそこに来て見ると、息氣いきづまりがしそうに狭苦しかつた。で、葉子は長椅子の下から、木村の父が使い慣れた古トランク——その上に古藤が油絵の具でY・Kと書いてくれた古トランクを引き出して、その中から黒い駝鳥だちようの羽のボアを取り出して、西洋臭いそのにおいを快く鼻に感じながら、深々と首を巻いて、甲板に出て行つて見た。窮屈な階子段はしごだんをややよろよろしながらのぼつて、重い戸をあけようとすると外気の抵抗がなかなか激しくつて押しもどされようとした。きりつと搾り上げしぼたような寒さが、戸のすきから縦に細長く葉子を襲つた。

甲板には外国人が五六人厚い外套がいとうにくるまつて、堅いテイクの床ゆかをかつかつと踏み

ならしながら、押し黙つて勢いよく右往左往に散歩していた。田川夫人の姿はそのへんにはまだ見いだされなかった。塩気を含んだ冷たい空気は、室内にのみ閉じこもっていた葉子の肺を押し広げて、頬ほおには血液がちくちくと軽く針をさすように皮膚に近く突き進んで来るのが感ぜられた。葉子は散歩客には構わずに甲板を横ぎつて船べりの手欄てすりによりかかりながら、波また波と果てもなく連なる水の堆積たいせきをはるばるとながめやった。折り重なつた鈍色にぶいろの雲のかなたに夕日の影は跡形もなく消えうせて、闇やみは重い不思議な瓦斯がすのように力強くすべての物を押しひしやげていた。雪をたつぷり含んだ空だけが、その間とわずかに争つて、南方には見られぬ暗い、燐りんのような、さびしい光を残していた。一種のテンポを取つて高くなり低くなりする黒い波濤はとうのかなたには、さらに黒ずんだ波の穂が果てもなく連なっていた。船は思つたより激しく動揺していた。赤いガラスをはめた檣しやう燈とうが空高く、右から左、左から右へと広い角度を取つてひらめいた。ひらめくたびに船が横かしぎになつて、重い水の抵抗を受けながら進んで行くのが、葉子の足からからだに伝わつて感ぜられた。

葉子はふらふらと船にゆり上げゆり下げられながら、まんじりともせず、黒い波の峰と波の谷とがかわるがわる目の前に現われるのを見つめていた。豊かな髪の毛とおして

寒さがしんと頭の中にしみこむのが、初めのうちは珍しくいい気持ちだったが、やがてしびれるような頭痛に変わって行つた。……と急に、どこをどう潜んで来たとも知れない、いやなさびしさが盗風とうふうのように葉子を襲つた。船に乗ってから春の草のように萌もえ出した元気はぼつきりと心を留められてしまった。こめかみがじんじんと痛み出して、泣きつかれのあとに似た不愉快な睡気ねむけの中に、胸をついて嘔はき気さえ催して来た。葉子はあわててあたりを見回したが、もうそこいらには散歩の人足ひとあしも絶えていた。けれども葉子は船室に帰る気力もなく、右手でしっかりと額を押えて、手欄てすりに顔を伏せながら念じるように目をつぶって見たが、いいようのないさびしさはいや増すばかりだった。葉子はふと定子を懷妊つわりしていた時のほげしい悪阻つわりの苦痛を思い出した。それはおりから痛ましい回想だった。……定子……葉子はもうその咎しもとには堪えないというように頭を振って、気を紛らすために目を開いて、とめどなく動く波の戯れを見ようとしたが、一目見るやぐらぐらと眩暈めまいを感じて一たまりもなくまた突つ伏ぶしてしまった。深い悲しいため息が思わず出るのを留めようとしてもかいがなかった。「船に酔つたのだ」と思つた時には、もうからだじゆうは不快な嘔感おうかんのためにわなわなと震えていた。

「嘔はけばいい」

そう思つて手欄てすりから身を乗り出す瞬間、からだじゅうの力は腹から胸もとに集まつて、背は思わずも激しく波打った。そのあとはもう夢のようだった。

しばらくしてから葉子は力が抜けたようになって、ハンカチで口もとをぬぐいながら、たよりなくあたりを見回した。甲板かんばんの上も波の上のように荒涼として人氣ひとけがなかった。明るく灯ひの光のもれていた眼窓めまどは残らずカーテンでおおわれて暗くなっていた。右にも左にも人はいない。そう思つた心のゆるみにつけ込んだのか、胸の苦しみはまた急によせ返して来た。葉子はもう一度手欄てすりに乗り出してほろほろと熱い涙をこぼした。たとえば高くつゝるした大石を切つて落としたように、過去というものが大きな一つの暗い悲しみとなつて胸を打った。物心を覚えてから二十五の今日こんにち日まで、張りつめ通した心の糸が、今こそ思い存分ゆるんだかと思われるその悲しい快こころよさ。葉子はそのむなしい哀感にひたりながら、重ねた両手の上に額を乗せて手欄てすりによりかかったまま重い呼吸をしながらほろほろと泣き続けた。一時性貧血を起こした額は死人のように冷えきつて、泣きながらも葉子はどうかするとふつと引き入れられるように、仮睡に陥ろうとした。そうしてははつと何かに驚かされたように目を開くと、また底の知れぬ哀感がどこからともなく襲い入った。悲しい快さ。葉子は小学校に通かよつてゐる時分でも、泣きたい時には、人前では齒をくいしばつてい

て、人のいない所まで行つて隠れて泣いた。涙を人に見せるといふのは卑しい事にしか思えなかった。乞食^{こじき}が哀れみを求めたり、老人が愚痴をいうのと同様に、葉子にはけがらわしく思っていた。しかしその夜に限つては、葉子はだれの前でも素直^{すなお}な心で泣けるような気がした。だれかの前でさめざめと泣いてみたいような気分になつていた。しみじみとあわれんでくれる人もありそうに思えた。そうした気持ちで葉子は小娘のようにたわいもなく泣きつづけていた。

その時甲板^{かんぱん}のかなたから靴^{くつ}の音が聞こえて来た。二人^{ふたり}らしい足音だった。その瞬間まではだれの胸にでも抱きついてしみじみ泣けると思つていた葉子は、その音を聞きつけるとはつというまもなく、張りつめたいつものような心になつてしまつて、大急ぎで涙を押しぬぐいながら、踵^{くびす}を返して自分の部屋^{へや}に戻^{もど}ろうとした。が、その時はもうおそかった。洋服姿の田川夫妻がはつきりと見分けがつくほどの距離に進みよつていたので、さすがに葉子もそれを見て見ぬふりでやり過ぐす事は得^えしなかった。涙をぬぐいきると、左手をあげて髪の毛のほつれをしなをしながらかき上げた時、二人はもうすぐそばに近寄つていた。

「あらあなたでしたの。わたしどもは少し用事ができておくれましたが、こんなにおそくまで室外^{そと}にいらしつてお寒くはありませんでしたか。気分はいかがです」

田川夫人は例の目下めしたの者にいい慣れた言葉を器用に使いながら、はつきりとかういつてのぞき込むようにした。夫妻はすぐ葉子が何をしていたかを感じたいらしい。葉子はそれをひどく不快に思った。

「急に寒い所に出ましたせいですかしら、なんだか頭つむりがぐらぐらいたしまして」

「お嘔もどしなされた……それはいけない」

田川博士はかせは夫人の言葉を聞くとともにというふうには、二三度こつくりとうなずいた。厚外套あつがいとうにくるまった肥ふとった博士と、暖かそうなスコッチの裾すそ長の服に、ロシア帽まゆを眉まゆぎわまでかぶった夫人との前に立つと、やさ形の葉子は背だけこそ高いが、二人ふたりの娘ほどにながめられた。

「どうだ一緒に少し歩いてみちや」

と田川博士がいうと、夫人は、

「ようございましょうよ、血液がよく循環して」と応じて葉子に散歩を促した。葉子はやむを得ず、かつかつと鳴る二人の靴くつの音と、自分の上草履うわぞうりの音とをさびしく聞きながら、夫人のそばにひき添かんばんって甲板の上を歩き始めた。ギーイときしみながら船が大きくかしぐのにうまく中心を取りながら歩こうとすると、また不快な気持ちきもちが胸先にこみ上げて来る

のを葉子は強く押し静めて事もなげに振る舞おうとした。

博士は夫人との会話の途切れ目を捕えては、話を葉子に向けて慰め顔にあしらおうとしたが、いつでも夫人が葉子のすべき返事をひたたくて物をいうので、せっかくの話は腰を折られた。葉子はしかし結句^{けっく}それをいい事にして、自分の思いにふけりながら二人に続いた。しばらく歩きなれてみると、運動ができたためか、だんだん嘔^は気^けは感ぜぬようになった。田川夫妻は自然に葉子を会話からのけものにして、二人の間で四方^{よもやま}山のうわさ話を取りかわし始めた。不思議なほどに緊張した葉子の心は、それらの世間話にはいささかの興味も持ち得ないで、むしろその無意味に近い言葉の数々を、自分の瞑^{めい}想^{そう}を妨げる騒音のようにうるさく思っていた。と、ふと田川夫人が事務長と言ったのを小耳にはさんで、思わず針でも踏みつけたようにぎよつとして、黙想から取って返して聞き耳を立てた。自分でも驚くほど神経が騒ぎ立つのをどうする事もできなかった。

「ずいぶんしたたか者らしゅうございますわね」

そう夫人のいう声がした。

「そうらしいね」

^{はかせ}博士の声には笑いがまじっていた。

「賭博が大の上手ですって」

「そうかねえ」

事務長の話はそれぎりで絶えてしまった。葉子はなんとなく物足らなくなつて、また何かいい出すだろうと心待ちにしていたが、その先を続ける様子がないので、心残りを覚えながら、また自分の心に帰つて行つた。

しばらくすると夫人がまた事務長のうわさをし始めた。

「事務長のそばにすわつて食事をするのはどうもいやでなりませんの」

「そんなら早月さんに席を代わつてもらつたらいいでしよう」

葉子は闇の中で鋭く目をかがやかしながら夫人の様子をうかがつた。

「でも夫婦がテーブルにならぶつて法はありませんわ……ねえ早月さん」

こう戯談らしく夫人はいつて、ちよつと葉子のほうを振り向いて笑つたが、べつに

その返事を待つというでもなく、始めて葉子の存在に気づきでもしたように、いろいろと身の上などを探りを入れるらしく聞き始めた。田川博士も時々親切らしい言葉を添えた。

葉子は始めのうちこそつましやかに事実にさほど遠くない返事をしていたものの、話がだんだん深入りして行くにつれて、田川夫人という人は上流の貴夫人だと自分でも思つて

いるらしいに似合わない思いやりのない人だと思い出した。それはあり内の質問だったかもしれない。けれども葉子にはそう思えた。縁もゆかりもない人の前で思うままな侮辱を加えられるとむつとせずにはいられなかった。知った所がなんにもならない話を、木村の事まで根はり葉はり問いただしていったいどうしようという気なのだろう。老人でもあるならば、過ぎ去った昔を他人にくどくどと話して聞かせて、せめて慰むという事もあるだろう。「老人には過去を、若い人には未来を」という交際術の初歩すら心得ないがさつな人だ。自分ですらそつと手もつけないで済ませたい血なまぐさい身の上を……自分は老人ではない。葉子は田川夫人が意地にかかつてこんな悪戯をするのだと思うと激しい敵意から口びるをかんだ。

しかしその時田川博士が、サルンからもれて来る灯の光で時計を見て、八時十分前だから部屋に帰ろうといい出したので、葉子はべつに何もいわずにしまった。三人が階子段を降りかけた時、夫人は、葉子の気分にはいっこう気づかぬらしく、——もしそうでなければ気づきながらわざと気づかぬらしく振る舞って、

「事務長はあなたのお部屋にも遊びに見えますか」

と突拍子もなくいきなり問いかけた。それを聞くと葉子の心は何という事なしに理不

尽な怒りに捕えられた。得意な皮肉でも思い存分に浴びせかけてやろうかと思つたが、胸をさすりおろしてわざと落ち付いた調子で、

「いゝえちつともお見えになりませんが……」

と空々しく聞こえるように答えた。夫人はまだ葉子の心持ちには少しも気づかぬふう

で、

「おやそう。わたしのほうへはたびたびいらして困りますのよ」

と小声でささやいた。「何を生意気な」葉子は前後なしにこう心のうちに叫んだが一

言も口には出さなかつた。敵意——嫉妬ともいい代えられそうな——敵意がその瞬間か

らすつかり根を張つた。その時夫人が振り返つて葉子の顔を見たならば、思わず博士を楯

に取つて恐れながら身をかわさずにはいられなかつたろう、——そんな場合には葉子ほも

とよりその瞬間に稲妻のようにすばしく隔壁のない顔を見せたには違いなかつたろうけれど

も。葉子は一言もいわずに黙礼したまま二人に別れて部屋に歸つた。

室内はむつとするほど暑かつた。葉子は嘔き気はもう感じてはいなかつたが、胸もどが

妙にしめつけられるように苦しいので、急いでボアをかいやって床の上に捨てたまま、投

げるように長椅子に倒れかかつた。

それは不思議だった。葉子の神経は時には自分でも持て余すほど鋭く働いて、だれも気のつかないにおいがたまらないほど気になったり、人の着ている着物の色合いが見てられないほど不調和で不愉快であったり、周囲の人が腑抜けな木偶のように甲斐なく思われたり、静かに空を渡って行く雲の脚が瞑眩がするほどめまぐるしく見えたりして、我慢にもじつとしていられない事は絶えずあったけれども、その夜のように鋭く神経のどがつて来た事は覚えがなかった。神経の末梢が、まるで大風にあつたこずえのようにざわざわと音がするかとさえ思われた。葉子は足と足をぎゅつとからみ合わせてそれに力をこめながら、右手の指先を四本そろえてその爪先を、水晶のように固い美しい歯で一思いに激しくかんで見たりした。悪寒のような小刻みな身ぶるいが絶えず足のほうから頭へと波動のように伝わった。寒いためにそうなるのか、暑いためにそうなるのかよくわからなかった。そうしていらいらしながらトランクを開いたままに取り散らした部屋の中をぼんやり見やつていた。目はうるさくかすんでいた。ふと落ち散ったものの中に葉子は事務長の名刺があるのに目をつけて、身をかめてそれを拾い上げた。それを拾い上げるとま二つに引き裂いてまた床になげた。それはあまりに手答えなく裂けてしまった。葉子はまた何かもつとうんと手答えのあるものを尋ねるように熱して輝く目でまじまじとあたりを見

回していた。と、カーテンを引き忘れていた。恥ずかしい様子を見られはしなかったかと思ふと胸がどきんとしていきなり立ち上がりとした拍子に、葉子は窓の外に人の顔を認めたように思った。田川博士のようでもあった。田川夫人のようでもあった。しかしそんなはずはない、二人はもう部屋に帰っている。事務長……

葉子は思わず裸体を見られた女のように固くなって立ちすくんだ。激しいおののきが襲つて来た。そして何の思慮もなく床の上のボアを取つて胸にあてがったが、次の瞬間にはトランクの中からシヨールを取り出してボアと一緒にそれをかかえて、逃げる人のように、あたふたと部屋を出た。

船のゆらぐごとに木と木とのすれあう不快な音は、おおかた船客の寝しずまった夜の寂^せ寞^{きぼく}の中にきわ立つて響いた。自動平衡器の中にともされた蠟燭^{ろうそく}は壁板に奇怪な角度を取つて、ゆるぎもせずにはんやりと光つていた。

戸をあけて甲板^{かんばん}に出ると、甲板のあなたはさっきのままの波また波の堆積^{たいせき}だった。

大煙筒から吐き出される煤煙^{ばいえん}はまっ黒い天の川のように無月^{むげつ}の空を立ち割つて水に近く斜めに流れていた。

一一一

そこだけは星が光っていないので、雲のある所がようやく知れるぐらい思いきつて暗い夜だった。おつかぶさつて来るかと見上くれば、目のまわるほど遠のいて見え、遠いと思つて見れば、今にも頭を包みそうに近く逼せまつてゐる。鋼はがねいろ色の沈黙した大空が、際限もない羽をたれたように、同じ暗色の海原に続く所から波がわいて、闇やみの中をのたうちまろびながら、見渡す限りわめき騒いでいる。耳を澄まして聞いていると、水と水とが激しくぶつかり合う底のほうに、

「おーい、おい、おい、おーい」

とかと思われる声ともつかない一種の奇怪な響きが、舷ふなべりをめぐる叫ばれていた。葉子は前後左右に大きく傾く甲板の上を、傾くままに身を斜めにしてからく重心を取りながら、よろけよろけブリッジに近いハッチの物陰までたどりついて、シヨールで深々と首から下を巻いて、白ペンキで塗った板囲いに身を寄せかけて立った、たたずんだ所は風かざしの下になつてゐるが、頭の上では、檣ほばしらからたれ下がった索綱さくこうの類が風にしなつてうなりを立て、アリユウシャン群島近い高緯度の空気は、九月の末とは思われぬほど寒く霜を含

んでいた。氣負いに氣負った葉子の肉体はかしさして寒いとは思わなかった。寒いとしてもむしろ快い寒さだった。もうどんどんと冷えて行く着物の裏に、心臓のはげしい鼓動につれて、乳房が冷たく触れたり離れたりするものが、なやましい氣分を誘い出したりした。それにたたずんでいるのに足が爪先からだんだんに冷えて行つて、やがて膝から下は知覺を失い始めたので、氣分は妙に上ずつて来て、葉子の幼い時からの癖である夢ともうつとも知れない音楽的な錯覺に陥つて行つた。五体も心も不思議な熱を覺えながら、一種のリズムの中に揺り動かされるようになって行つた。何を見るときもなく凝然と見定めた目の前に、無数の星が船の動揺につれて光のまたたきをしながら、ゆるいテンポをととのえてゆらりゆらりと静かにおどると、帆綱のうなりが張り切ったバスの声となり、その間を「おーい、おい、おい、おーい……」と心の声とも波のうめきともわからぬトレモロが流れ、盛り上がり、くずれこむ波また波がテノルの役目を勤めた。声が形となり、形が声となり、それから一緒にもつれ合う姿を葉子は目で聞いたり耳で見たりしていた。なんのために夜寒を甲板に出て来たか葉子は忘れていた。夢遊病者のように葉子はまっしぐらにこの不思議な世界に落ちこんで行つた。それでいて、葉子の心の一部分はいたましいほど醒めきつていた。葉子は燕のようにその音楽的な夢幻界を翔け上がりくぐりぬけてさまざま

な事を考えていた。

屈辱、屈辱……屈辱——思索の壁は屈辱というちかちかと寒く光る色で、いちめんに塗りつぶされていた。その表面に田川夫人や事務長や田川博士の姿が目まぐるしく音律に乗って動いた。葉子はうるさそうに頭の中にある手のようなもので無性に払いのけようと試みたがむだだった。皮肉な横目をつかつて青味を帯びた田川夫人の顔が、かき乱された水の中を、小さな泡が逃げてでも行くように、ふらふらとゆらめきながら上のほうに遠ざかって行つた。まずよかつたと思うと、事務長の insolent な目つきが低い調子の伴音となつて、じつと動かない中にも力ある震動をしながら、葉子の眼睛の奥を網膜まで見とおすほどぎゅつと見すえていた。「なんで事務長や田川夫人なんぞがこんなに自分をわすらすだろう。憎らしい。なんの因縁で……」葉子は自分をこう卑しみながらも、男の目を迎え慣れた媚びの色を知らず知らず上まぶたに集めて、それに応じようとする途端、日に向かつて目を閉じた時に綾をなして乱れ飛ぶあの不思議な種々な色の光体、それに似たものが繚乱として心を取り囲んだ。星はゆるいテンポでゆらりゆらりと静かにおどっている。「おーい、おい、おい、おーい」……葉子は思わずかつと腹を立てた。その憤りの膜の中にすべての幻影はすーっと吸い取られてしまった。と思うとその憤りすらが見る見

るばやけて、あとには感激のさらない死のような世界が果てしもなくどんよりとよんだ。葉子はしばらくは気が遠くなつて何事もわきまえないでいた。

やがて葉子はまたおもむろに意識の閬に近づいて来ていた。

煙突の中の黒い煤の間を、横すじかに休らいながら飛びながら、上つて行く火の子のように、葉子の幻想は暗い記憶の洞穴の中を右左によろめきながら奥深くたどつて行くのだった。自分でさえ驚くばかり底の底にまた底のある迷路を恐る恐る伝つて行くと、果てしもなく現われ出る人の顔のいちばん奥に、赤い着物を裾長に着て、まばゆいほどに輝き渡つた男の姿が見え出した。葉子の心の周囲にそれまで響いていた音楽は、その瞬間ぱつたり静まつてしまつて、耳の底がかゝんとするほど空恐ろしい寂莫の中に、船の舳のほうで氷をたたき破るような寒い時鐘の音が聞こえた。「カンカン、カンカン、カーン」……。葉子は何時の鐘だと考えてみる事もしないで、そこに現われた男の顔を見分けるやうとしたが、木村に似た容貌がおぼろに浮かんで来るだけで、どう見直して見てもはつきりした事はもどかしいほどわからなかつた。木村であるはずはないんだがと葉子はいらいしながら思つた。「木村はわたしの良人ではないか。その木村が赤い着物を着ているという法があるものか。……かわいそうに、木村はサン・フランシスコから今ごろはシ

ヤトルのほうに来て、私の着くのを一日千秋の思いで待っているだろうに、わたしはこんな事をしてここで赤い着物を着た男なんぞを見つめている。千秋の思いで待つ？ それはそうだろう。けれどもわたしは木村の妻になつてしまつたが最後、千秋の思いでわたしを待たつた木村がどんな良人おつとに変わるかは知れきつている。憎いのは男だ……木村でも倉地でも……また事務長なんぞを思い出している。そうだ、米国に着いたらもう少し落着いて考えた生きかたをしよう。木村だつて打てば響くくらいはする男だ。……あつちに行つてまとまつた金ができたら、なんといいてもかまわない、定子を呼び寄せてやる。あ、定子の事なら木村は承知の上だつたのに。それにしても木村が赤い着物などを着ているのはあんまりおかしい……」ふと葉子はもう一度赤い着物の男を見た。事務長の顔が赤い着物の上に似合わしく乗つていた。葉子はぎよつとした。そしてその顔をもつとはつきり見つめたために重い重いまぶたをしいて押し開く努力をした。

見ると葉子の前にはまさしく、角燈を持つて焦茶色こげちゃいろのマントを着た事務長が立つていた。そして、

「どうなさつたんだ今ごろこんな所に、……今夜はどうかしている……岡さんおか、あなたの仲間がもう一人ひとりここにいますよ」

といいながら事務長は魂を得たように動き始めて、後ろのほうを振り返った。事務長の後ろには、食堂で葉子と一目顔を見合わすと、震えんばかりに興奮して顔を得上げないでいた上品なかの青年が、まっさおな顔をして物におじたようにつつましく立っていた。

目はまざまざと開いていたけれども葉子はまだ夢心地だった。事務長のいるのに気づいた瞬間からまた聞こえ出した波濤の音は、前のように音楽的な所は少しもなく、ただ物狂おしい騒音となつて船に迫っていた。しかし葉子は今の境界がほんとうに現実の境界なのか、さつき不思議な音楽的の錯覚にひたっていた境界が夢幻の中の境界なのか、自分ながら少しも見さかいがつかないくらいぼんやりしていた。そしてあの荒唐な奇怪な心の adventure をかえつてまざまざとした現実の出来事でもあるかのように思いなして、目の前に見る酒に赤らんだ事務長の顔は妙に蠱惑的な気味の悪い幻像となつて、葉子を脅かそうとした。

「少し飲み過ぎたところにためといた仕事を詰めてやったんで眠れん。で散歩のつもりで甲板の見回りに出ると岡さん」

といいながらも一度後ろに振り返って、

「この岡さんがこの寒いに手欄からからだを乗り出してぽかんと海を見とるんです。取り

押えてケビンに連れて行こうと思うとすると、今度はあなたに出つくわす。物好きもあつたもんですね。海をながめて何がおもしろいかな。お寒かありませんか、シヨールなんぞも落ちてしまった」

どこの国なまりともわからぬ一種の調子が塩さびた声であやつられるのが、事務長の人となりによくそぐつて聞こえる。葉子はそんな事を思いながら事務長の言葉を聞き終わると、始めてはつきり目がさめたように思った。そして簡単に、

「いゝえ」

と答えながら上目づかいに、夢の中からでも人を見るようにうつとりと事務長のしぶとそうな顔を見やつた。そしてそのまま黙つていた。

事務長は例の insolent な目つきで葉子を一目に見くるめながら、

「若い方は世話が焼ける……さあ行きましよう」

と強い語調でいつて、からからと傍若無人に笑いながら葉子をせき立てた。海の波

の荒涼たるおめきの中に聞くこの笑い声は diabolic なものだつた。「若い方」……老成ぶつた事をいうと葉子は思つたけれども、しかし事務長にはそんな事をいう権利でもあるかのように葉子は皮肉な竹籠返しもせず、おとなしくシヨールを拾い上げて事務長のい

うまみにそのあとに続こうとして驚いた。ところが長い間そこにたたずんでいたものと見て、磁石じしやくで吸い付けられたように、両足は固く重くなつて一寸も動きそうにはなかつた。寒気のために感覚の痲痺まひしかかつた膝ひざの関節はしいて曲げようとする、筋を絶つほどの痛みを覚えた。不用意に歩き出そうとした葉子は、思わずのめり出さした上体をからく後ろにささえて、情けなげに立ちすくみながら、

「ま、ちよつと」

と呼びかけた。事務長の後ろに続こうとした岡と呼ばれた青年はこれを聞くといち早く足を止めて葉子のほうを振り向いた。

「始めてお知り合いになつたばかりなのに、すぐお心安だてをしてほんとうになんてございますが、ちよつとお肩を貸していただけませんでしょうか。なんですか足の先が凍つたようになってしまつて……」

と葉子は美しく顔をしかめて見せた。岡はそれらの言葉が拳こぶしとなつて続けさまに胸を打つともいつたように、しばらくの間どぎまぎ躊躇ちゆうちよしていたが、やがて思い切つたふうで、黙つたまま引き返して来た。身のたけも肩幅も葉子とそう違わないほどな華車きやしゃなからだをわなわなと震わせているのが、肩に手をかけないうちからよく知れた。事務長は

振り向きもしないで、靴のかかとをこつこつと鳴らしながら早二三間のかなたに遠ざかっていた。

鋭敏な馬の皮膚のようにだちだちと震える青年の肩におぶいかりながら、葉子は黒い大きな事務長の後ろ姿を仇かたきでもあるかのように鋭く見つめてそろそろと歩いた。西洋酒の芳醇な甘い酒の香が、まだ酔いからさめきらない事務長の身のまわりを毒々しい靄となつて取り巻いていた。放縦という事務長の心の臓は、今不用心に開かれている。あの無頓着そうな肩のゆすりの陰にすさまじい desire の火が激しく燃えているはずである。葉子は禁断の木の実を始めてくいかいだ原人のような渇欲をわれにもなくあおりたてて、事務長の心の裏をひつくり返して縫い目を見窮めようとばかりしていた。おまけに青年の肩に置いた葉子の手は、華車とはいいいながら、男性的な強い弾力を持つ筋肉の震えをまざまざと感ずるので、これらの二人の男が与える奇怪な刺激はほしいままにからまりあつて、恐ろしい心を葉子に起こさせた。木村……何をうるさい、よけいな事はいわずと黙って見ているがいい。心の中をひらめき過ぎる断片的な影を葉子は枯れ葉のように払いのけながら、目の前に見る蠱惑におぼれて行こうとのみした。口から喉はあえぎたいほどにひからびて、岡の肩に乗せた手は、生理的な作用から冷たく堅くなっていた。そして熱

をこめてうるんだ目を見張つて、事務長の後ろ姿ばかりを見つめながら、五体はふらふらとたわいもなく岡のほうによりそつた。吐き出す氣息いきは燃え立って岡の横顔をなでた。事務長は油断なく角燈で左右を照らしながら甲板の整頓せいとんに気を配って歩いている。

葉子はいたわるように岡の耳に口をよせて、

「あなたはどちらまで」

と聞いてみた。その声はいつものように澄んではいなかった。そして気を許した女からばかり聞かれるような甘たるい親しさがこもっていた。岡の肩は感激のために一入震えひとしおた。頓とみには返事もし得ないでいたようだったが、やがて臆病おくびょうそうに、

「あなたは」

とだけ聞き返して、熱心に葉子の返事を待つらしかった。

「シカゴまで参るつもりですの」

「僕も……わたしもそうです」

岡は待ち設けたように声を震わしながらきつぱりと答えた。

「シカゴの大学にでもいらつしやいますの」

岡は非常にあわてたようだった。なんと返事をしたものか恐ろしくためらうふうだった

が、やがてあいまいに口の中で、

「えゝ」

とだけつぶやいて黙ってしまった。そのおぼこさ……葉子は闇やみの中で目をかがやかしてほほえんだ。そして岡をあわれんだ。

しかし青年をあわれむと同時に葉子の目は稲妻のように事務長の後ろ姿を斜めにかすめた。青年をあわれむ自分は事務長にあわれまれているのではないか。始終一歩ずつ上うわて手を行くような事務長が一種の憎しみをもってながめやられた。かつて味わった事のないこの憎しみの心を葉子はどうする事もできなかった。

二人ふたりに別れて自分の船室に帰った葉子はほとんど delirium の状態にあつた。眼睛は大きく開いたままで、盲目めくら同様に部屋へやの中の物を見る事をしなかった。冷えきった手先はおどおどと両の袂たもとをつかんだり離したりしていた。葉子は夢中でシヨールとボアとをかなぐり捨て、もどかしげに帯だけほぐくと、髪も解かずに寝台の上に倒れかかって、横になったまま羽根枕まくらを両手でひしと抱いて顔を伏せた。なぜと知らぬ涙がその時堰せきを切ったように流れ出した。そして涙はあとからあとからみなぎるようにシートを湿うるしながら、充血した口びるは恐ろしい笑いをたたえてわなわなと震えていた。

一時間ほどそうしているうちに泣き疲れに疲れて、葉子はかけるものもかけずにそのまま深い眠りに陥って行つた。けばけばしい電燈の光はその翌日の朝までこのなまめかしくもふしだらな葉子の丸寝姿まるねすがたを画かいたように照らしていた。

一四

なんといつても船旅は単調だつた。たとい日々夜々に一瞬もやむ事なく姿を変える海の波と空の雲とはあつても、詩人でもないすべての船客は、それらに対して途方に暮れた倦けんたいの視線を投げるばかりだつた。地上の生活からすっかり遮断しゃだんされた船の中には、ごく小さな事でも目新しい事件の起こる事のみが待ち設けられていた。そうした生活では葉子が自然に船客の注意の焦点となり、話題の提供者となつたのは不思議もない。毎日毎日凍りつくような濃霧の間を、東へ東へと心細く走り続ける小さな汽船の中の社会は、あらわには知れないながら、何かさびしい過去を持つらしい、妖艶ようえんな、若い葉子の一挙一動を、絶えず興味深くじつと見守るように見えた。

かの奇怪な心の動乱の一夜を過ぐすと、その翌日から葉子はまたふだんのとおり、い

かにも足もとがあやうく見えながら少しも破綻はたんを示さず、ややもすれば他人の勝手になり
 そうでいて、よそからは決して動かされない女になっていた。始めて食堂に出た時のつ
 ましやかさに引きかえて、時には快活な少女のように晴れやかな顔つきをして、船客らと
 言葉をかわしたりした。食堂に現われる時の葉子の服装だけでも、退屈うんに倦うん果てた人々
 には、物好きな期待を与えた。ある時は葉子は慎み深い深窓しんそうの婦人らしく上品に、ある
 時は素養の深い若いディレツタントのように高尚こうしょうに、またある時は習俗から解放され
 た adventures とも思われる放胆を示した。その極端な変化が一日の中に起こつて来ても、
 人々はさして怪しく思わなかった。それほど葉子の性格には複雑なものが潜んでいるのを
 感じさせた。絵島丸が横浜の棧橋につながれている間から、人々の注意の中心となつてい
 た田川夫人を、海氣いぎにあつて息氣をふき返した人魚のような葉子のかたわらにおいて見る
 と、身分、閱歴、学殖、年齢などといういかめしい資格が、かえつて夫人を固い古ぼけた
 輪郭にはめこんで見せる結果になつて、ただ神体のない空虚な宮殿のような空そらいかめしい
 興なさを感じさせるばかりだった。女の本能の鋭さから田川夫人はすぐそれを感じいたら
 しかった。夫人の耳もとに響いて来るのは葉子のうわさばかりで、夫人自身の評判は見る
 見る薄れて行つた。ともすると田川博士はかせまでが、夫人の存在を忘れたような振る舞いをす

る、そう夫人を思わせる事があるらしかった。食堂の卓をはさんで向かい合う夫妻が他人同士のような顔をして互い互いにぬすみ見をするのを葉子がすばやく見て取った事などもあった。といつて今まで自分の子供でもあしらうように振る舞っていた葉子に対して、今さら夫人は改まった態度も取りかねていた。よくも仮面をかぶつて人を陥れたという女らしいひねくれた妬^{ねた}みひがみが、明らかに夫人の表情に読まれ出した。しかし実際の処置としては、くやしくても虫を殺して、自分を葉子まで引き下げるか、葉子を自分まで引き上げるよりしかたがなかった。夫人の葉子に対する仕打ちは戸板をかえすように違つて来た。葉子は知らん顔をして夫人のするがままに任せていた。葉子のもとより夫人のあわてたこの処置が夫人には致命的な不利益であり、自分には都合のいい仕合わせであるのを知っていたからだ。案のじよう、田川夫人のこの譲歩は、夫人に何らかの同情なり尊敬なりが加えられる結果とならなかつたばかりでなく、その勢力はますます下り坂になって、葉子はいつのまにか田川夫人と対等で物をいい合つても少しも不思議とは思わせないほどの高みに自分を持ち上げてしまつていた。落ち目になった夫人は年がいもなくしどろもどろになつていた。恐ろしいほどやさしく親切に葉子をあしらうかと思えば、皮肉らしくばか丁寧に物をいいかけたり、あるいは突然路傍の人に対するようなよそよそしさを装つて見せた

りした。死にかけた蛇へびののたうち回るのを見やる蛇使いのように、葉子は冷やややかにあざ笑いながら、夫人の心の葛藤かつとうを見やつていた。

単調な船旅にあき果てて、したたか刺激に飢えた男の群れは、この二人ふたりの女性を中心に、して知らず知らず渦巻うずまきのようにめぐっていた。田川夫人と葉子との暗闘は表面には少しも目に立たないで戦われていたのだけれども、それが男たちに自然に刺激を与えないではおかなかった。平らな水に偶然落ちて来た微風のひき起こす小さな波紋ほどの変化でも、船の中では一かどひとの事件だった。男たちはなぜともなく一種の緊張と興味とを感じるように見えた。

田川夫人は微妙な女の本能と直覚とで、じりじりと葉子の心のすみずみを探り回しているようだったが、ついにここぞという急所をつかんだらしく見えた。それまで事務長に対して見下したような丁寧さを見せていた夫人は、見る見る態度を変えて、食卓でも二人は、席が隣り合っているからという以上な親しげな会話を取りかわすようになった。田川博士までが夫人の意を迎えて、何かにつけて事務長の室へやに繁しげく出入りするばかりか、事務長はたいていの夜は田川夫妻の部屋へやに呼び迎えられた。田川博士はもとより船の正客である。それをそらすような事務長ではない。倉地は船医の興録こうろくまでを手伝わせて、田川夫妻の

旅情を慰めるように振る舞った。田川博士の船室には夜おそくまで灯^ひがかがやいて、夫人の興ありげに高く笑う声が室外まで聞こえる事が珍しくなかった。

葉子は田川夫人のこんな仕打ちを受けても、心の中で冷^{あざわら}笑っているのみだった。すでに自分が勝ち味になっているという自覚は、葉子に反動的な寛大な心を与えて、夫人が事務長を※な、動物性の勝った、どんな事をして来たのか、どんな事をするのかわからないようなたかが事務長になんの興味があるものか。あんな人間に気を引かれるくらいなら、自分はとうに喜んで木村の愛になずいているのだ。見当違いもいいかげんにするがいい。そう齒^はがみをしたいくらいな気分で思った。

ある夕方葉子はいつものとおり散歩しようと甲板^{かんぱん}に出て見ると、はるか遠い手欄^{てすり}の所に岡^{ひとり}がたった一人しよんぼりとよりかかつて、海を見入っていた。葉子はいたずら者らしくそつと足音を盗んで、忍び忍び近づいて、いきなり岡と肩をすり合わせるようにして立つた。岡は不意に人が現われたので非常に驚いたふうで、顔をそむけてその場を立ち去ろうとするのを、葉子は否^{いや}応^{おう}なしに手を握って引き留めた。岡が逃げ隠れようとするのも道理、その顔には涙のあとがまざまざと残っていた。少年から青年になったばかりのような、内気らしい、小柄^{こがら}な岡の姿は、何もかも荒々しい船の中ではことさらデリケートな可憐^{かれん}な

ものに見えた。葉子はいたずらばかりでなく、この青年に一種の淡々^{あわあわ}しい愛を覚えた。

「何を泣いてらしたの」

小首を存分傾けて、少女が少女に物を尋ねるように、肩に手を置きそえながら聞いてみた。

「僕……泣いていやしません」

岡は両方の頬^ほを紅く彩^{あかいろど}つて、こういいながらくりとからだをそっぽうに向け換えようとした。それがどうしても少女のようなしぐさだった。抱きしめてやりたいようなその肉体と、肉体につつまれた心。葉子はさらにすり寄った。

「いゝえいゝえ泣いてらつしやいましたわ」

岡は途方に暮れたように目の下の海をながめていたが、のがれる術^{すべ}ののないのを覚^{さと}つて、大つびらにハンケチをズボンのポケットから出して目をぬぐった。そして少し恨むような目つきをして、始めてまともに葉子を見た。口びるまでが苺^{いちご}のように紅^{あか}くなっていた。青白い皮膚に嵌^はめ込まれたその紅^{あか}さを、色彩に敏感な葉子は見のがす事ができなかった。岡は何かしら非常に興奮していた。その興奮してぶるぶる震えるしなやかな手を葉子は手欄^{てすり}ごとじつと押えた。

「さ、これでおふき遊ばせ」

葉子の袂たもとからは美しい香りかおのこもった小さなリンネルのハンケチが取り出された。

「持つてるんですから」

岡は恐縮したように自分のハンケチを顧みた。

「何をお泣きになつて……まあわたしつたらよけいな事まで伺つて」

「何いいんです……ただ海を見たらなんとなく涙ぐんでしまったんです。からだが弱いもんですからくだらない事にまで感傷的になつて困ります。……なんでもない……」

葉子はいかにも同情するように合点合点した。岡が葉子とこうして一緒にいるのをひどくうれしがっているのが葉子にはよく知れた。葉子はやがて自分のハンケチを手欄てすりの上においたまま、

「わたしの部屋へやへもよろしかつたらいらつしやいまし。またゆっくりお話ししましょうね」となつこくいつてそこを去つた。

岡は決して葉子の部屋を訪れる事はしなかつたけれども、この事のあつて後は、二人はよく親しく話し合つた。岡は人なじみの悪い、話の種たねのない、ごく初心うぶな世慣れない青年だったけれども、葉子はわずかなタクトですぐ隔てを取り去ってしまった。そして打ち解

けて見ると彼は上品な、どこまでも純粋な、そして慧^さかしい青年だった。若い女性にはそれはにかみやな所から今まで絶えて接していなかったので、葉子にはすがり付くように親しんで来た。葉子も同性の恋をするような気持ちで岡をかわいがった。

そのころからだ、事務長が岡に近づくようになったのは。岡は葉子と話をしない時はいつでも事務長と散歩などをしていた。しかし事務長の親友とも思われる二三の船客に対しては口もきこうとはしなかった。岡は時々葉子に事務長のうわさをして聞かした。そして表面はあれほど粗暴のように見えながら、考えの変わった、年齢や位置などに隔てをおかない、親切な人だといったりした。もつと交際してみるといいともいった。そのたびごとに葉子は激しく反対した。あんな人間を岡が話し相手にするのは実際不思議なくらいだ。あの人のどこに岡と共通するような優^{すぐ}れた所があるなどとかからかった。

葉子に引き付けられたのは岡ばかりではなかった。午餐^{ごさん}が済んで人々がサルンに集まる時などは団^{だんらん}欒^{らん}がたいてい三つくらいに分かれてできた。田川夫妻の周囲にはいちばん多数の人が集まった。外国人だけの団体から田川のほうに来る人もあり、日本の政治家実業家連はもちろんわれ先にそこに馳^はせ参じた。そこからだんだん細く糸のようにつながれて若い留学生とか学者とかいう連中が陣を取り、それからまただんだん太くつながれて、葉

子と少年少女らの群れがいた。食堂で不意の質問に辟易へきえきした外交官補などは第一の連絡の綱となった。衆人の前では岡は遠慮するようにあまり葉子に親しむ様子は見せず不即不離の態度を保っていた。遠慮会釈なくそんな所で葉子になれ親しむのは子供たちだった。まっ白なモスリンの着物を着て赤い大きなリボンを装った少女たちや、水兵服で身軽に装った少年たちは葉子の周囲に花輪のように集まった。葉子がそういう人たちをかたみがわりに抱いたりかかえたりして、お伽話とぎばなしなどして聞かせている様子は、船中の見ものだった。どうかするとサルンの人たちは自分らの間の話題などは捨てておいてこの可憐かれんな光景をうつとり見やっているような事もあった。

ただ一つこれらの群れからは全く没交渉な一団があった。それは事務長を中心にした三四人の群れだった。いつでも部屋の一隅ぐうの小さな卓を囲んで、その卓の上にはウイスキー用の小さなコップと水とが備えられていた。いちばんいい香においの煙草たばこの煙もそこから漂つて来た。彼らは何かひそひそと語り合つては、時々傍若無人ぼうじゃくぶじんな高い笑い声を立てた。そうかと思うとじつと田川の群れの会話に耳を傾けていて、遠くのほうから突然皮肉の茶々を入れる事もあった。だれいうとなく人々はその一団を犬儒派けんじゆはと呼びなした。彼らがどんな種類の人でどんな職業に従事しているかを知る者はなかった。岡などは本能的にそ

の人たちを忌みきらっていた。葉子も何かしら気のおける連中だと思った。そして表面はいつこう無頓着に見えながら、自分に対して充分の観察と注意とを怠っていないのを感じていた。

どうしてもしかし葉子には、船にいるすべての人の中で事務長がいちばん気になった。そんなはず、理由のあるはずはないと自分をたしなめてみてもなんのこいもなかった。サルンで子供たちと戯れている時でも、葉子は自分のして見せる蠱惑的な姿態がいつでも暗々裡に事務長のためにされているのを意識しないわけには行かなかった。事務長がその場にいらない時は、子供たちをあやし楽しませる熱意さえ薄らぐのを覚えた。そんな時に小さい人たちはきまつてつまらなそうな顔をしたりあくびをしたりした。葉子はそうした様子を見るとさらに興味を失った。そしてそのまま立って自分の部屋に帰ってしまうような事をした。それにも係わらず事務長はかつて葉子に特別な注意を払うような事はないらしく見えた。それが葉子をますます不快にした。夜など甲板の上をそぞろ歩きしている葉子が、田川博士の部屋の中から例の無遠慮な事務長の高笑いの声をもれ聞いたりなぞすると、思わずかつとなつて、鉄の壁すら射通しそうな鋭いひとみを声のするほうに送らずにはいられなかった。

ある日の午後、それは雲行きの荒い寒い日だった。船客たちは船の動揺に辟易^{へきえき}して自分の船室に閉じこもるのが多かったので、サルンががら明きになっているのを幸い、葉子は岡を誘い出して、部屋のかどになった所に折れ曲がって据^すえてあるモロッコ皮のデイワ^{ひや}ンに膝と膝を触れ合わさんばかり寄り添って腰をかけて、トランプをいじって遊んだ。岡は日ごろそういう遊戯には少しも興味を持っていなかったが、葉子と二人^{ふたり}きりでいられるのを非常に幸福に思うらしく、いつになく快活に札をひねくった。その細いしなやかな手からぶきつちように札が捨てられたり取られたりするのを葉子はおもしろいものに見やりながら、断続的に言葉を取りかわした。

「あなたもシカゴにいらつしやるとおつしやつてね、あの晩」

「えゝいいました。……これで切つてもいいでしょう」

「あらそんなものでもつたいたい……もつと低いものはおありなさらない？……シカゴではシカゴ大学にいらつしやるの？」

「これでいいでしょうか……よくわからないんです」

「よくわからないって、そりやおかしゆうござんすわね、そんな事お決めなさらずに米^{あつち}国にいらつしやるって」

「僕は……」

「これでいただきますよ……僕は……何」

「僕はねえ」

「えゝ」

葉子はランプをいじるのをやめて顔を上げた。岡は懺悔ざんげでもする人のように、面おもてを伏せて紅あかくなりながら札をいじくっていた。

「僕のほんとうに行く所はボストンだったのです。そこに僕の家で学資をやってる書生がいて僕の監督をしてくれる事になっていたんですけれど……」

葉子は珍しい事を聞くように岡に目をすえた。岡はますますいい憎そうに、

「あなたにおあい申してから僕もシカゴに行きたくなってしまうたんです」

とだんだん語尾を消してしまった。なんと可憐かれんさ……葉子はさらに岡にすり寄った。

岡は真剣になつて顔まで青ざめて来た。

「お気にさわつたら許してください……僕はただ……あなたのいらつしやる所にいたいんです、こういうわけだか……」

もう岡は涙ぐんでいた。葉子は思わず岡の手を取つてやろうとした。

その瞬間にいきなり事務長が激しい勢いでそこにはいつて来た。そして葉子には目もくれずに激しく岡を引つ立てるようにして散歩に連れ出してしまった。岡は唯々としてそのあとにしたがつた。

葉子のかつとなつて思わず座から立ち上がった。そして思い存分事務長の無礼を責めようと身構えた。その時不意に一つの考えが葉子の頭をひらめき通った。「事務長はどこかで自分たちを見守っていたに違いない」

突つ立つたままの葉子の顔に、乳房ちぶさを見せつけられた子供のようなほほえみがほのかに浮かび上がった。

一五

葉子はある朝思いがけなく早起きをした。米国に近づくにつれて緯度はだんだん下がって行つたので、寒気も薄らいでいたけれども、なんといつても秋立つた空気は朝ごとに冷え冷えと引きしまっていた。葉子は温室のような船室からこのきりつとした空氣に触れようとして甲板かんぱんに出てみた。右舷うげんを回つて左舷に出ると計らずも目の前に陸影を見つけ出し

て、思わず足を止めた。そこには十日ほど念頭から絶え果てていたようなものが海面から浅くもれ上がって続いていた。葉子は好奇心な目をかがやかしながら、思わず一たんとめた足を動かして手欄に近づいてそれを見渡した。オレゴン松がすすくと白波の激しくかみよせる岸べまで密生したバンクーバー島の低い山なみがそこにあった。物すぐく底光りをするまっさおな遠洋の色は、いつのまにか乱れた波の物狂わしく立ち騒ぐ沿海の青灰色に変わって、その先に見える暗緑の樹林はどんよりとした雨空の下に荒涼として横たわっていた。それはみじめな姿だった。距りの遠いせい^{へだた}か船がいくら進んでも景色にはいささかの変化も起こらないで、荒涼たるその景色はいつまでも目の前に立ち続いていた。古綿^{ふるわた}に似た薄雲をもれる朝日の光が力弱くそれを照らすたびごとに、煮え切らない影と光の変化がかすかに山と海とをなでて通るばかりだ。長い長い海洋の生活に慣れた葉子の目には陸地の印象はむしろきたないものでも見るように不愉快だった。もう三日ほどすると船はいやでもシャトルの栈橋につながれるのだ。向こうに見えるあの陸地の続きにシャトルはある。あの松の林が切り倒されて少しばかりの平地となった所に、ここに一つかしこに一つというように小屋が建ててあるが、その小屋の数が東に行くにつれてだんだん多くなつて、しまいには一かたまりの家屋ができる。それがシャトルであるに違いない。うらさび

しく秋風の吹きわたるその小さな港町の棧橋に、野獣のような諸国の労働者が群がる所に、この小さな絵島丸が疲れきった船体を横たえる時、あの木村が例のめまぐるしい機敏さで、アメリカ風になり済ましたらしい物腰で、まわりの景色に釣り合わない景気のいい顔をして、船梯子を上つて来る様子までが、葉子には見るように想像された。

「いやだいやだ。どうしても木村と一緒にするのはいやだ。私は東京に帰ってしまおう」
葉子はだだっ子らしく今さらそんな事を本気に考えてみたりしていた。

水夫長と一人のボーイとが押し並んで、靴と草履との音をたてながらやって来た。そして葉子のそばまで来ると、葉子が振り返ったので二人ながら慇懃に、

「お早うございます」

と挨拶した。その様子がいかにも親しい目上に対するような態度で、ことに水夫長は、「御退屈でございましたらう。それでもこれであと三日になりました。今度の航海にはしかしお陰様で大助かりをしまして、ゆうべからきわだってよくなりましたてね」と付け加えた。

葉子は一等船客の間の話題の的であつたばかりでなく、上級船員の間のうわさの種であつたばかりでなく、この長い航海中に、いつのまにか下級船員の間にも不思議な勢力にな

つていた。航海の八日目かに、ある老年の水夫がフォクスルで仕事をしていた時、錨いかりの鎖に足先をはさまれて骨をくじいた。プロメネード・デッキで偶然それを見つけた葉子は、船医より早くその場に駆けつけた。結びっこぶのように丸まって、痛みのためにもがき苦しむその老人のあとに引きそつて、水夫部屋べやの入り口まではたくさんの船員や船客が物珍しそうについて来たが、そこまで行くと船員ですらが中にはいるのを躊躇ちゆうちよした。どんな秘密が潜んでいるかだれも知る人のないその内部は、船中では機関室よりも危険な一区域と見なされていただけに、その入り口さえが一種人を脅かすような薄気味わるさを持っていた。葉子はしかしその老人の苦しみもがく姿を見るとそんな事は手もなく忘れてしまっていた。ひよつとすると邪魔物扱いにされてあの老人は殺されてしまうかもしれない。あんな齡としまでこの海上の荒々しい労働に縛られているこの人にはたよりになる縁者もないのだろう。こんな思いやりがとめどもなく葉子の心を襲い立てるので、葉子はその老人に引きずられてでも行くようにどんどん水夫部屋の中に降りて行った。薄暗い腐敗した空気が蒸れむ上がるように人を襲つて、陰の中にうようようごめく群れの中からは太く錆びた声が投げかわされた。闇やみに慣れた水夫たちの目はやにわに葉子の姿を引っ捕えたらしい。見る見る一種の興奮が部屋のすみずみにまでみちあふれて、それが奇怪なのしり声とな

つて物すごく葉子に逼^{せま}つた。だぶだぶのズボン一つで、節くれ立った厚みのある毛胸に一糸もつけない大男は、やおら人^{ひと}中^{なか}から立ち上がると、ずかずか葉子に突きあたらんばかりにすれ違つて、すれ違いざまに葉子の顔を孔^{あな}のあくほどにらみつけて、聞くにたえない雑^{ぞう}言^{ごん}を高々とののしつて、自分の群れを笑わした。しかし葉子は死にかけた子にかしなく母のように、そんな事には目もくれずに老人のそばに引き添つて、臥^ね安^{やす}いように寢床を取りなおしてやつたり、枕^{まくら}をあてがつてやつたりして、なおもその場を去らなかつた。そんなむさ苦しいきたない所において老人がほつたらかしておかれるのを見ると、葉子はなんという事なしに涙があとからあとから流れてたまらなかつた。葉子はそこを出て無理に船医の興録をそこに引っぱつて来た。そして權威^{ゆうゐ}を持った人のように水夫長にはつきりしたさしずをして、始めて安心して悠^{ゆう}々^{ゆう}とその部屋を出た。葉子の顔には自分のした事に対して子供のような喜びの色が浮かんでいた。水夫たちは暗い中にもそれを見のがさなかつたと見える。葉子が出て行く時には一人^{ひとり}として葉子に雑^{ぞう}言^{ごん}をなげつけるものがいなくなつた。それから水夫らはだれいうとなしに葉子の事を「姉御^{あねご}姉御」と呼んでうわさするようになった。その時の事を水夫長は葉子に感謝したのだ。

葉子はしんみにいろいろと病人の事を水夫長に聞きただした。実際水夫長に話しかけら

れるまでは、葉子はそんな事は思い出しもしていなかったのだ。そして水夫長に思い出させられて見ると、急にその老水夫の事が心配になり出したのだった。足はどうとう不具になつたらしいが痛みはたいいなくなつたと水夫長がいうと葉子は始めて安心して、また陸のほうに目をやった。水夫長とボーイとの足音は廊下のかなたに遠ざかつて消えてしまった。葉子の足もとにはただかすかなエンジンの音と波が舷ふなばたを打つ音とが聞こえるばかりだった。

葉子はまた自分一人の心に帰ろうとしてしばらくじつと単調な陸地に目をやっていた。その時突然岡が立派な西洋絹の寝衣ねまきの上に厚い外套がいとうを着て葉子のほうに近づいて来たのを、葉子は視角の一端にちらりと捕えた。夜でも朝でも葉子がひとりでいると、どこでどうしてそれを知るのか、いつのまにか岡がきつと身近みぢかに現われるのが常なので、葉子は待ち設けていたように振り返つて、朝の新しいやさしい微笑を与えてやった。

「朝はまだずいぶん冷えますね」

といいながら、岡は少し人になれた少女のように顔を赤くしながら葉子のそばに身を寄せた。葉子は黙つてほほえみながらその手を取つて引き寄せて、互いに小さな声で軽い親しい会話を取りかわし始めた。

と、突然岡は大きな事でも思い出した様子で、葉子の手をふりほどきながら、

「倉地さんがね、きょうあなたにぜひ願いたい用があるっていつてましたよ」

といった。葉子は、

「そう……」

とごく軽く受けるつもりだったが、それが思わず息苦しいほどの調子になっているのに気がついた。

「なんでしよう、わたしになんぞ用って」

「なんだかわたしちつとも知りませんが、話をしてごらんなさい。あんなに見えるけれども親切な人ですよ」

「まだあなただまされていらつしやるのね。あんな高慢ちきな乱暴な人わたしきらいですわ。……でも先方^{むこう}で会いたいというのなら会ってあげてもいいから、ここにいらつしやいて、あなた今すぐいらしって呼んで来てくださいますな。会いたいなら会いたようにするがようござんすわ」

葉子は実際激しい言葉になっていた。

「まだ寝ていますよ」

「いいから構わないから起こしておやりになればよござんすわ」

岡は自分に親しい人を親しい人に近づける機会が到来したのを誇り喜ぶ様子を見せて、いそいそと駆けて行つた。その後ろ姿を見ると葉子は胸に時ならぬときめきを覚えて、眉まゆの上の所にさつと熱い血の寄つて来るのを感じた。それがまた憤いきどおろしかった。

見上げると朝の空を今まで蔽おほうていた綿のような初秋の雲は所々ほころびて、洗いすました青空がまばゆく切れ目切れ目に輝き出していた。青灰色によごれていた雲そのものすらが見違えるように白く軽くなって美しい笹ささ縁へりをつけていた。海は目も綾あやな明暗をなし、単調な島影もさすがに頑固がんこな沈黙ばかりを守りつづけてはいなかった。葉子の心は抑おさえよう抑えようとしても軽くはなやかにばかりなつて行つた。決戦……と葉子はその勇み立つ心の底で叫んだ。木村の事などはどうの昔に頭の中からこそぎ取るように消えてしまつて、そのあとにはただ何とはなしに、子供らしい浮き浮きした冒険の念ばかりが働いていた。自分でも知らずにいたような weird な激しい力が、想像も及ばぬ所にぐんぐんと葉子を引きずつて行くのを、葉子は恐れながらもどこまでもついて行こうとした。どんな事があつても自分がその中心になつていて、先方むこうをひき付けてやろう。自分をはぐらかすような事はしまいと始終張り切つてばかりいたこれまでの心持ちと、この時わくがごとく持

ち上がつて来た心持ちとは比べものにならなかった。あらん限りの重荷を洗いざらい思いきりよく投げすててしまつて、身も心も何か大きな力に任しきるその快き心安さは葉子をすっかり夢心地にした。そんな心持ちの相違を比べて見る事さえできないくらいだった。葉子は子供らしい期待に目を輝かして岡の歸つて来るのを待つていた。

「だめですよ。床の中にいて戸も明けてくれずに、寝言みたいな事をいつてるんですもの」といいながら岡は当惑顔で葉子のそばに現われた。

「あなたこそだめね。ようござんすわ、わたしが自分で行つて見てやるから」

葉子にはそこにいる岡さえなかった。少し怪訝そうに葉子のいつになくそわそわした様子を見守る青年をそこに捨ておいたまま葉子は險しく細い階子段を降りた。

事務長の部屋は機関室と狭い暗い廊下一つを隔てた所にあつて、日の目を見ていた葉子には手さぐりをして歩かねばならぬほど勝手がちがつていた。地震のように機械の震動が廊下の鉄壁に伝わつて来て、むせ返りそうな生暖かい蒸気のおいと共に人を不愉快にした。葉子は鋸屑を塗りこめてざらざらと手ざわりのいやな壁をなでて進みながらようやく事務室の戸の前に来て、あたりを見回して見て、ノックもせずいきなりハンドルをひねった。ノックをするひまもないようなせかせかせした気分になつていた。戸は音も立てず

にやすやすとあいた。「戸もあけてくれずに……」との岡の言葉から、てつきり鍵^{かぎ}がかかっていると思つていた葉子にはそれが意外でもあり、あたりまえにも思えた。しかしその瞬間には葉子はわれ知らずはつとなつた。ただ通りすがりの人にでも見付けられまいとする心が先に立つて、葉子は前後のわきまもなく、ほとんど無意識に部屋^{へや}にはいると、同時にぱたんと音をさせて戸をしめてしまった。

もうすべては後悔にはおそすぎた。岡の声で今寢床から起き上がったらしい事務長は、荒い棒^{ぼう}縞^{しま}のネルの筒袖^{つつそで}一枚を着たままで、目のはれぼったい顔をして、小山のような大きな五体を寢床にくねらして、突然はいつて来た葉子をぎつと見守つていた。とうの昔に心の中は見とおしきつていような、それでいて言葉もろくろくかわさないほどに無^{むとん}頓着^{じやく}に見える男の前に立つて、葉子はさすがにしばらくはいい出^いづべき言葉もなかった。あせる氣を押し鎮^{しず}め押しししずめ、顔色を動かさないだけの沈着を持ち続けようとつとめたが、今までに覚えない惑乱のために、頭はぐらぐらとなつて、無意味だと自分でさえ思われるような微笑をもらす愚かさをどうする事もできなかった。倉地は葉子^へがその朝その部屋^へに来るのを前からちゃんと知り抜いてでもいたように落ち付き払って、朝の挨拶^{あいさつ}もせず、

「さ、おかけなさい。ここが楽だ」

いつものとおりな少し見おろした親しみのある言葉をかけて、昼間は長椅子^{ながいす}がわりに使う寝台の座を少し譲って待っている。葉子は敵意を含んでさえ見える様子で立ったまま、
「何か御用がおりになるそうでございますが……」

固くなりながらいつて、あゝまた見えすく事をいつてしまったとすぐ後悔した。事務長は葉子の言葉を追いかけるように、

「用はあとでいいいます。まあおかけなさい」

といつてすましていた。その言葉を聞くと、葉子はそのいいなり放題になるよりしかたがなかった。「お前は結局はここにすわるようになるんだよ」と事務長は言葉の裏に未来を予知しきつているのが葉子の心を一種捨てばちなものにした。「すわつてやるものか」という習慣的な男に対する反抗心はただわけもなくひしがれていた。葉子はつかつかと進みよつて事務長と押し並んで寝台に腰かけてしまった。

この一つの挙動が——このなんでもない一つの挙動が急に葉子の心を軽くしてくれた。葉子はその瞬間に大急ぎで今まで失いかけていたものを自分のほうにたぐり戻した^{もど}。そして事務長を流し目に見やつて、ちよつとほほえんだその微笑には、さっきの微笑の愚かし

さが潜んでいないのを信ずる事ができた。葉子の性格の深みからわき出るおそろしい自然さがまとまった姿を現わし始めた。

「何御用でいらつしやいます」

そのわざとらしい造り声の中にかすかな親しみをこめて見せた言葉も、肉感的に厚みを帯びた、それでいて賢しげに締まりのいい二つの口びるにふさわしいものとなっていた。

「きよう船が検疫所に着くんです、きようの午後に。ところが検疫医がこれなんだ」

事務長は朋輩ほうばいにでも打ち明けるように、大きな食指を鍵形かぎがたにまげて、たぐるような格好をして見せた。葉子がちよつと判じかねた顔つきをしていると、

「だから飲ましてやらんならんですよ。それからポーカーにも負けてやらんならん。美人がいれば拝ましてもやらんならん」

となお手まねを続けながら、事務長は枕もとにおいてある頑固がんこなパイプを取り上げて、指の先で灰を押しつけて、吸い残りの煙草たばこに火をつけた。

「船をさえ見ればそうした悪戯わるさをしおるんだから、海坊主ぼうずを見るようなやつです。そういうと頭のつるりとした水母くらげじみた入道らしいが、実際は元氣のいい意気な若い医者でね。おもしろいやつだ。一つ会つてごらん。わたしだからがあんな所に年じゅう置かれればあ

あなるわさ」

といつて、右手に持ったパイプを膝がしらに置き添えて、向き直つてまともに葉子を見た。しかしその時葉子は倉地の言葉にはそれほど注意を払ってはいない様子を見せていた。ちようど葉子の向こう側にある事務テーブルの上に飾られた何枚かの写真を物珍しそうにながめやつて、右手の指先を軽く器用に動かしながら、煙草の煙が紫色に顔をかすめるのを払つていた。自分をおとりにまで使おうとする無礼もあなたなればこそなんともいわずにいるのだという心を事務長もさすがに推したらしい。しかしそれにも係わらず事務長は言いわけ一ついわず、いっこう平気なもので、きれいな飾り紙のついた金口煙草のきんぐち小箱を手を延ばして柵から取り上げながら、

「どうです一本」

と葉子の前にさし出した。葉子は自分が煙草をのむかのまぬかの問題をはじき飛ばすように、

「あれはどなた？」と写真の一つに目を定めた。

「どれ」

「あれ」葉子はそういつたままで指さしはしない。

「どれ」と事務長はもう一度いつて、葉子の大きな目をまじまじと見入ってからその視線をたどつて、しばらく写真を見分けていたが、

「はああれか。あれはねわたしの妻子ですんだ。荊妻けいさいと豚児とんじでもですよ」

といつて高々と笑いかけたが、ふと笑いやんで、険しい目で葉子をちらつと見た。

「まあそう。ちゃんとお写真をお飾りなすつて、おやさしゅうござんすわね」

葉子はしんなりと立ち上がつてその写真の前に行つた。物珍けだものしいものを見るといふ様子をしてはいたけれども、心の中には自分の敵がどんな獣物けだものであるかを見きわめてやるぞという激しい敵愾てきがいしん心が急に燃えあがつていた。前には芸者くろうとでもあつたのか、それとも良人おととの心を迎えるためにそう造つたのか、どこか玄人くろうとじみたきれいな丸髻まるまげの女が着飾つて、三人の少女を膝ひざに抱いたりそばに立たせたりして写つていた。葉子はそれを取り上げて孔あなのあくほどじつと見やりながらテーブルの前に立つていた。ぎこちない沈黙がしばらくそこ続いた。

「お葉さん」（事務長は始めて葉子をその姓で呼ばずにこう呼びかけた）突然震えを帯びた、低い、重い声が焼きつくように耳近く聞こえたと思うと、葉子は倉地の大きな胸と太い腕とで身動きもできないように抱きすくめられていた。もとより葉子はその朝倉地が野

獣のような assault に出る事を直覺的に覺悟して、むしろそれを期待して、その assault を、心ばかりでなく、肉体的な好奇心をもつて待ち受けていたのだったが、かくまで突然、なんの前ぶれもなく起こつて来ようとは思ひも設けなかつたので、女の本然の羞恥しゆううちから起こる貞操の防衛に駆られて、熱しきつたような冷えきつたような血を一時に体内に感じながら、かかえられたまま、侮蔑ぶべつをきわめた表情を二つの目に集めて、倉地の顔を斜めに見返した。その冷ややかな目の光は仮初めかりその男の心をたじろがすはずだった。事務長の顔は振り返つた葉子の顔に息氣いきのかかるほどの近さで、葉子を見入っていたが、葉子が与えた冷酷なひとみには目もくれぬまで狂わしく熱していた。（葉子の感情を最も強くあおり立てるものは寢床を離れた朝の男の顔だった。一夜の休息にすべての精気を充分回復した健康な男の容貌ようぼうの中には、女の持つすべてのものを投げ入れても惜しくないと思うほどの力がこもつていと葉子は始終感ずるのだった）葉子は倉地に存分な輕侮の心持ちを見せつけながらも、その顔を鼻の先に見ると、男性というものの強烈な牽引けんいんの力を打ち込まれるように感ぜずにはいられなかつた。息氣いきせわしく吐く男のため息は霰あられのように葉子の顔を打った。火と燃え上がらんばかりに男のからだからは desire の焰ほむろがぐんぐん葉子の血脈にまで広がって行つた。葉子はわれにもなく異常な興奮にがたがた震え始めた。

ふと倉地の手がゆるんだので葉子は切つて落とされたようにふらふらとよろけながら、
 危うく踏みとどまつて目を開くと、倉地が部屋へやの戸に鍵かぎをかけようとしているところだつた。鍵が合わないので、

「糞くそつ」

と後ろ向きになつてつぶやく倉地の声が最後の宣告のように絶望的に低く部屋の中に響いた。

倉地から離れた葉子はさながら母から離れた赤子のように、すべての力が急にどこかに消えてしまうのを感じた。あとに残るものとは底のない、たよりない悲哀ばかりだった。今まで味わつて来たすべての悲哀よりもさらに残酷な悲哀が、葉子の胸をかきむしつて襲つて来た。それは倉地のそこにいるのすら忘れさすくらいだった。葉子はいきなり寢床の上に丸まつて倒れた。そしてうつぶしになつたまま痙攣けいれん的に激しく泣き出した。倉地がその泣き声にちよつとためらつて立つたまま見ている間に、葉子は心の中で叫びに叫んだ。「殺すなら殺すがいい。殺されたつていい。殺されたつて憎みつづけてやるからいい。わたしは勝った。なんといつても勝った。こんなに悲しいのをなぜ早く殺してはくれないの

だ。この哀^{かな}しみにいつまでもひたつていたい。早く死んでしまいたい。……」

一六

葉子はほんとうに死の間をさまよい歩いたような不思議な、混乱した感情の狂いに泥^{でいす}酔^いして、事務長の部屋^{へや}から足もとも定まらずに自分の船室^{ふんしつ}に戻^{もど}つて来たが、精も根も尽き果ててそのままソファの上にぶつ倒れた。目のまわりに薄黒い暈^{かき}のできたその顔は鈍い鉛色をして、瞳孔^{どうこう}は光に対して調節の力を失っていた。軽く開いたままの口びるからもれる歯並びまでが、光なく、ただ白く見やられて、死を連想させるような醜い美しさが耳の付け根までみなぎっていた。雪解^{ゆきげ}時の泉^{いづみ}のように、あらん限りの感情が目まぐるしくわき上がっていたその胸には、底のほうに暗い悲哀がこちんとよどんでいるばかりだった。葉子はこんな不思議な心^{こころ}の状態からのがれ出ようと、思い出したように頭を働かして見たが、その努力は心にもなくかすかなはかないものだった。そしてその不思議に混乱した心^{こころ}の状態もいわばたえきれぬほどの切^{せつ}なさを持つていなかった。葉子はそんなにしてほんやりと目をさましそうになったり、意識の仮睡^{かすい}に陥^{おち}ったりした。猛烈な胃^い痙攣^{けいれん}を起こし

た患者が、モルヒネの注射を受けて、間歇的^{かんけつてき}に起こる痛みのために無意識に顔をしかめながら、麻薬^{まやく}の恐ろしい力の下に、ただ昏々^{こんこん}と奇怪な仮睡に陥り込むように、葉子の心は無理無体な努力で時々驚いたように乱れさわぎながら、たちまち物すごい沈滞^{ふち}の淵深く落ちて行くのだった。葉子の意志はいかに手を延ばしても、もう心の落ち行く深みには届きかねた。頭の中は熱を持つて、ただぼーと黄色く煙^{けむ}つていた。その黄色い煙の中を時々紅い^{あか}火や青い火がちかちかと神経をうずかして駆け通った。息^{いき}氣づまるようなけさの光景や、過去のあらゆる回想が、入り乱れて現われて来ても、葉子はそれに対して毛の末ほども心を動かされはしなかった。それは遠い遠い木魂^{こたま}のようにうつろにかすかに響いては消えて行くばかりだった。過去の自分と今の自分とのこれほどな恐ろしい距^{へだた}りを、葉子は恐れげもなく、成るがままに任せて置いて、重くよんだ絶望的な悲哀にただわけもなくどこまでも引っぱられて行つた。その先には暗い忘却が待ち設けていた。涙で重ったまぶたはだんだん打ち開いたままのひとみを蔽^{おほ}つて行つた。少し開いた口びるの間からは、うめくような軽い^{いびき}軋^{いびき}がもれ始めた。それを葉子はかすかに意識しながら、ソファの上にうつむきになったまま、いつとはなしに夢もない深い眠りに陥っていた。

どのくらい眠っていたかわからない。突然葉子は心臓でも破裂しそうな驚きに打たれて、

はつと目を開いて頭をもたげた。ずき／＼と頭の心しんが痛んで、部屋へやの中は火のように輝いて面おもても向けられなかった。もう昼ごろだないと気が付く中にも、雷とも思われる叫喚が船を震わして響き渡っていた。葉子はこの瞬間の不思議に胸をどきつかせながら聞き耳を立てた。船のおののきとも自分のおののきとも知れぬ震動が葉子の五体を木の葉のようにもてあそんだ。しばらくしてその叫喚がややしずまったので、葉子はようやく、横浜を出て以来絶えて用いられなかった汽笛の声である事を悟った。検疫所が近づいたのだなと思つて、襟えりもとをかき合わせながら、静かにソファの上に膝ひざを立てて、眼窓めまどから外面とのもをのぞいて見た。けさまでは雨雲に閉じられていた空も見違えるようにならつと晴れ渡つて、紺こ青んじょうの色の日の光のために奥深く輝いていた。松が自然に美しく配置されて生え茂つた岩がかつた岸がすぐ目の先に見えて、海はいかにも入り江らしく可憐かれんなさざ波をつらね、その上を絵島丸は機関どうきの動悸を打ちながら徐しずかに走っていた。幾日の荒々しい海路からここに來て見ると、さすがにそこには人間の隠れ場らしい静かさがあつた。

岸の奥まつた所に白い壁の小さな家屋が見られた。そのかたわらには英国の国旗が微風にあおられて青空の中に動いていた。「あれが検疫官のいる所なのだ」そう思つた意識の活動が始まるや否や、葉子の頭は始めて生まれ代わつたようにはつきりとなつて行つた。

そして頭がはつきりして来るとともに、今まで切り放されていたすべての過去があるべき姿を取って、明瞭めいりょうに現在の葉子と結び付いた。葉子は過去の回想が今見たばかりの景色からでも来たように驚いて、急いで眼窓めまどから顔を引つ込めて、強敵に襲いかかれた孤軍のように、たじろぎながらまたソファの上に臥倒ねたおれた。頭の中は急に叢むらがり集まる考えを整理するために激しく働き出した。葉子はひとりでに両手で髪の毛の上からこめかみの所を押えた。そして少し上目うわめをつかつて鏡のほうを見やりながら、今まで閉止していた乱想の寄せ来るままに機敏にそれを送り迎えようと身構えた。

葉子とはにかく恐ろしい崖がけのきわまで来てしまった事を、そしてほとんど無反省で、本能に引きずられるようにして、その中に飛び込んだ事を思わないわけには行かなかった。親類縁者に促されて、心にもない渡米を余儀なくされた時に自分で選んだ道——ともかく木村と一緒になろう。そして生まれ代わったつもりで米国の社会にはいりこんで、自分が見つけあぐねていた自分というものを、探り出してみよう。女というものが日本とは違って考えられているらしい米国で、女としての自分がどんな位置にすわる事ができるか試ためしてみよう。自分はどうしても生まるべきでない時代に、生まるべきでない所に生まれて来たのだ。自分の生まるべき時代と所とはどこか別にある。そこでは自分は女王の座になお

つても恥ずかしくないほどの力を持つ事ができるはずなのだ。生きているうちにそこをさがし出したい。自分の周囲にまつわって来ながらいつのまにか自分を裏切って、いつどんな所にも平気で生きていられるようになり果てた女たちの鼻をあかさしてやろう。若い命を持ったうちにそれだけの事をぜひしてやろう。木村は自分のこの心の企みたくらを助ける事のできる男ではないが、自分のあとについて来られないほどの男でもあるまい。葉子はそんな事も思っていた。日清戦争が起こつたころから葉子ぐらいの年配の女が等しく感じ出した一種の不安、一種の幻滅——それを激しく感じた葉子は、謀叛人むほんにんのように知らず知らず自分のまわりの少女たちにある感情的な教唆を与えていたのだが、自分自身ですらがどうしてこの大事な瀬戸ぎわを乗り抜けるのかは、少しもわからなかった。そのころの葉子は事ごとに自分の境遇が氣にくわないでただいらしていた。その結果はただ思うままを振る舞って行くよりしかたがなかった。自分はどんな物からもほんとうに訓練されてはいないんだ。そして自分にはどうにでも働く鋭い才能と、女の強味（弱味ともいわばいえ）になるべき優れた肉体と激しい情緒とがあるのだ。そう葉子は知らず知らず自分を見ていた。そこから盲滅法めくらめつぽうに動いて行つた。ことに時代の不思議な目ざめを経験した葉子に取つては恐ろしい敵は男だった。葉子はそのためになんどつまずいたかしのれない。

しかし、世の中にはほんとうに葉子を扶け起こしてくれる人がなかった。「わたしが悪ければ直すだけの事をして見せてごらん」葉子は世の中に向いてこういい放ってやりたかった。女を全く奴隷の境^{どれい きようがい}に沈め果てた男はもう昔のアダムのように正直ではないんだ。女がじつとしている間は慇懃^{いんぎん}に見せるが、女が少しでも自分で立ち上がろうとすると、打って変わって恐ろしい暴王になり上がるのだ。女までがおめおめと男の手伝いをしている。葉子は女学校時代にしたたかその苦^{にが}い杯をなめさせられた。そして十八の時一木部孤※と見きわめたその心が、木部という、空想の上でこそ勇氣も生彩もあれ、実生活においては見下げ果てたほど貧弱で簡単な一書生の心としいて結びつかねばならぬと思った時、葉子は身ぶるいするほど失望して木部と別れてしまったのだ。

葉子のなめたすべての経験は、男に束縛を受ける危険を思わせるものばかりだった。しかしなんとという自然のいたずらだろう。それとともに葉子は、男というものなしには一刻も過ごされないものとなっていた。砒石^{ひせき}の用法を謬^{あやま}った患者が、その毒の恐ろしさを知りぬきながら、その力を借りなければ生きて行けないように、葉子は生の喜びの源を、まかり違えば、生そのものを虫ばむべき男というものに、求めずにはいられないディレンマに陥ってしまったのだ。

肉欲の牙を鳴らして集まって来る男たちに対して、（そういう男たちが集まって来るのはほんとうは葉子自身がふりまく香いのためだとは気づいていて）葉子は冷笑しながら蜘蛛のように網を張った。近づくものは一人残らずその美しい四つ手網にからめ取った。葉子の心は知らず知らず残忍になっていた。ただあの妖力ある女郎蜘蛛のように、生きていたい要求から毎日その美しい網を四つ手に張った。そしてそれに近づきもし得ないで、のしり騒ぐ人たちを、自分の生活とは関係のない木か石でもあるように冷然と尻目にかけた。

葉子はほんとうをいうと、必要に従うというほかに何をすればいいのかわからなかった。葉子に取っては、葉子の心持ちを少しも理解していない社会ほど愚かしげな醜いものはなかった。葉子の目から見た親類という一群れはただ貪欲な賤民としか思えなかった。父はあわれむべく影の薄い一人の男性に過ぎなかった。母は——母はいちばん葉子の身近にいたといつていい。それだけ葉子は母と両立し得ない仇敵のような感じを持った。母は新しい型にわが子を取り入れることを心得てはいたが、それを取り扱う術は知らなかった。葉子の性格が母の備えた型の中で驚くほどすると生長した時に、母は自分以上の法力を憎む魔女のように葉子の行く道に立ちはだかった。その結果二人の間には第三者

から想像もできないような反目と衝突とが続いたのだった。葉子の性格はこの暗闘のお陰で曲折のおもしろさと醜さとを加えた。しかしなんととっても母は母だった。正面からは葉子のする事なす事に批点を打ちながらも、心の底でいちばんよく葉子を理解してくれたに違いないと思うと、葉子は母に対して不思議ななつかしみを覚えるのだった。

母が死んでからは、葉子は全く孤独である事を深く感じた。そして始終張りつめた心持ちと、失望からわき出る快活さで、鳥が木から木に果実を探るように、人から人に歡樂を求めて歩いたが、どこからともなく不意に襲つて来る不安は葉子を底知れぬ悵鬱ゆううつの沼に蹴落けおとした。自分は荒磯あらいそに一本流れよつた流れ木ではない。しかしその流れ木よりも自分は孤独だ。自分は一ひら風に散つてゆく枯れ葉ではない。しかしその枯れ葉より自分はうらさびしい。こんな生活よりほかにする生活はないのかしらん。いったいどこに自分の生活をじつと見ていてくれる人があるのだろうか。そう葉子はしみじみ思う事がないでもなかった。けれどもその結果はいつでも失敗だった。葉子はこうしたさびしさに促されて、乳母うばの家を尋ねたり、突然大塚おおつかの内田にあいに行ったりして見るが、そこを出て来る時にはただ一入ひとしおの心のむなしさが残るばかりだった。葉子は思い余つてまた淫みだらな満足を求めるために男の中に割つてはいるのだった。しかし男が葉子の目の前で弱味を見せた瞬

間に、葉子はきようまん驕慢な女王のように、その捕虜からおもて面をそむけて、その出来事を悪夢のように忌みきらった。冒険の獲物えものはきまりきって取るにも足らないやくざものである事を葉子はしみじみ思わされた。

こんな絶望的な不安に攻めさいなめられながらも、その不安に駆り立てられて葉子は木村という降参人をとにかくその良人おとこに選んでみた。葉子は自分がなんとかして木村にそりを合わせる努力をしたならば、一生いっしょうが涯木村と連れ添って、普通の夫婦のような生活ができないものでもないと思ふまでになつていた。しかしそんなつぎはぎな考えかたが、どうしていつまでも葉子の心の底を虫ばむ不安をいやす事ができよう。葉子が気を落ち付けて、米国に着いてからの生活を考えてみると、こうあつてこそと思ひ込むような生活には、木村はのけ物になるか、邪魔者になるほかはないようにも思えた。木村と暮らそう、そう決心して船に乗ったのではあつたけれども、葉子の気分は始終ぐらつき通しにぐらついていたのだ。手足のちぎれた人形をおもちや箱にしまったものか、いっそ捨ててしまったものかと躊躇ちゆうちよする少女の心に似たぞんざいなためらいを葉子はいつまでも持ち続けた。

そういう時突然葉子の前に現われたのが倉地事務長だった。横浜の棧橋につながれた絵

島丸の甲板かんばんの上で、始めて猛獸のようなこの男を見た時から、稲妻のように鋭く葉子はこの男の優越を感受した。世が世ならば、倉地は小さな汽船の事務長なんぞをしている男ではない。自分と同様に間違つて境遇おそづけられて生まれて来た人間なのだ。葉子は自分の身につまされて倉地をあわれみもし畏れおそもした。今までだれの前に出て平気で自分の思う存分を振る舞っていた葉子は、この男の前では思わず知らず心にもない矯きよう飾しよくを自分の性格の上にまで加えた。事務長の前では、葉子は不思議にも自分の思っているのとちように反対の動作をしていた。無条件的な服従という事も事務長に対してだけはただ望ましい事にばかり思えた。この人に思う存分打ちのめされたら、自分の命は始めてほんとうに燃え上がるのだ。こんな不思議な、葉子にはあり得ない欲望すらが少しも不思議でなく受け入れられた。そのくせ表面うわべでは事務長の存在をすら気が付かないように振る舞った。ことに葉子の心を深く傷つけたのは、事務長の物懶ものうげな無関心な態度だった。葉子がどれほど人の心をひきつける事をいつた時でも、した時でも、事務長は冷然として見向こうともしなかつた事だ。そういう態度に出られると、葉子は、自分の事は棚たなに上げておいて、激しく事務長を憎んだ。この憎しみの心が日一日と募つて行くのを非常に恐れたけれども、どうしようもなかつたのだ。

しかし葉子はとうとうけさの出来事にぶつ突かってしまった。葉子は恐ろしい^{がけ}崖のきわからめちやくちやに飛び込んでしまった。葉子の目の前で今まで住んでいた世界はがらつと変わってしまった。木村がどうした。米国がどうした。養って行かなければならない妹や定子がどうした。今まで葉子を襲い続けていた不安はどうした。人に犯されまいと身構えていたその自尊心はどうした。そんなものは木^こつ葉^はみ^みじん^{じん}に無くなってしまっていた。倉地を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜^{みつ}と思おう。倉地を自分ひとりに得さえすれば……。今まで知らなかった、捕虜の受くる蜜より甘い屈辱！

葉子の心はこんなに順序立っていたわけではない。しかし葉子は両手で頭を押えて鏡を見入りながらこんな心持ちを果てしもなくかみしめた。そして追想は多くの迷路をたどりぬいた末に、不思議な仮睡状態に陥る前まで進んで来た。葉子はソファを牝鹿^{めじか}のように立ち上がって、過去と未来とを断ち切った現在^{せつな}剎那のくらむばかりな変身に打ちふるいながらほほえんだ。

その時ろくろくノツクもせずに事務長がはいって来た。葉子のただならぬ姿には頓^{とんじや}着^くなく、

「もうすぐ検疫官がやって来るから、さつきの約束を頼みますよ。資本入らずで大役が勤

まるんだ。女というものはいいものだ。や、しかしあなたのはだいぶ資本がかかつとるでしょうね。……頼みますよ」と戯談じょうだんらしくいった。

「はあ」葉子はなんの苦もなく親しみの限りをこめた返事をした。その一声の中には、自分でも驚くほどの蠱惑こわくの力がこめられていた。

事務長が出て行くと、葉子は子供のように足なみ軽く小さな船室の中を小跳りこおどして飛び回った。そして飛び回りながら、髪をほごしにかかつて、時々鏡に映る自分の顔を見やりながら、こらえきれないようにぬすみ笑いをした。

一七

事務長のさしがねはうまい坪つぼにはまった。検疫官は絵島丸の検疫事務をすっかり年とつた次位の医官に任せてしまつて、自分は船長室で船長、事務長、葉子を相手に、話に花を咲かせながらトランプをいじり通した。あたりまえならば、なんとかかとか必ず苦情の持ち上がるべき英国風の小やかましい検疫もあつさり済んで放蕩者ほうとうものらしい血氣盛りな検疫官は、船に来てから二時間そこできげんよく歸つて行く事になった。

停とまるともなく進行を止めていた絵島丸は風のまにまに少しずつ方向を変えながら、二人の医官を乗せて行くモーター・ボートが舷げん側そくを離れるのを待っていた。折り目正しい長めな紺の背広を着た検疫官はボートの舵座かじざに立ち上がって、手欄てすりから葉子と一緒に胸から上を乗り出した船長となお戯談じようだんを取りかわした。船梯子ふなばしの下まで医官を見送った事務長は、物慣れた様子でポケットからいくらかを水夫の手につかませておいて、上を向いて相図をすると、船梯子ふなばしはきりきりと水平に巻き上げられて行く、それを事もなげに身軽く駆け上って来た。検疫官の目は事務長への挨拶あいさつもそこそこに、思いきり派手はでな装いを凝らした葉子のほうに吸い付けられるらしかった。葉子はその目を迎えて情をこめた流眄ながしめを送り返した。検疫官がその忙しい間にも何かしきりに物をいおうとした時、けたたましい汽笛が一抹いちまつの白煙を青空に揚げて鳴りはためき、船尾からはすさまじい推進機の震動が起り始めた。このあわただしい船の別れを惜しむように、検疫官は帽子を取って振り動かしながら、噪音そうおんにもみ消される言葉を續けていたが、もとより葉子にはそれは聞こえなかった。葉子はただにことにことほえみながらうなずいて見せた。そしてただ一時のいたずらごころから髪にさしていた小さな造花を投げてやると、それがあわよく検疫官の肩にあたって足もとにすべり落ちた。検疫官が片手に舵綱かじづなをあやつりながら、

有頂点うちようてんになつてそれを拾おうとするのを見ると、船舷ふなばたに立ちならんで物珍しげに陸地を見物していたステヤレージの男女の客は一斉いつせいに手をたたいてどよめいた。葉子はあたりを見回した。西洋の婦人たちは等しく葉子を見やって、その花々しい服装から軽率かるはずみらしい挙動を苦々しく思うらしい顔つきをしていた。それらの外国人の中には田川夫人もまじつていた。

検疫官は絵島丸が残して行つた白沫はくまつの中で、腰をふらつかせながら、笑い興きようずる群集にまで幾度も頭を下げた。群集はまた思い出したように漫罵まんばを放つて笑いどよめいた。それを聞くと日本語のよくわかる白髪はくの船長は、いつものように顔を赤くして、気の毒にくそうに恥はずかしげな目を葉子に送つたが、葉子のはしたない群集の言葉にも、苦々にくにくしげな船客の顔色にも、少しも頓着とんじやくしないふうで、ほほえみ続けながらモーター・ボートのほうを見守つているのを見ると、未通女おほこらしくさらにまっ赤かになつてその場をはずしてしまつた。

葉子は何事も屈託くつたくなくただおもしろかつた。からだじゆうをくすぐるような生の歓よろこびから、ややもするとなんでもなく微笑が自然に浮かび出ようとした。「けさから私はこんなに生まれ代しろわりしました御覧なさい」といつてだれにでも自分の喜びを披露ひろうしたいような氣

分になつていた。検疫官の官舎の白い壁も、そのほうに向かつて走つて行くモーター・ボートも見る見る遠ざかつて小さな箱庭のようになつた時、葉子は船長室でのきよの思い出し笑いをしながら、手欄てすりを離れて心あてに事務長を目で尋ねた。と、事務長は、はるか離れた船艙せんそうの出口に田川夫妻と鼎かなえになつて、何かむずかしい顔をしながら立ち話をしていた。いつもの葉子ならば三人の様子で何事が語られているかぐらいはすぐ見て取るのだが、その日はただ浮き浮きした無邪気な心ばかりが先に立って、だれにでも好意のある言葉をかけて、同じ言葉で酬むくいられたい衝動に駆られながら、なんの気なしにそちに足を向けようとして、ふと気がつく、事務長が「来てはいけない」と激しく目に物を言わせているのが覺さとれた。気が付いてよく見ると田川夫人の顔にはまごうかたなき悪意がひらめいていた。

「またおせっかいだな」

一秒の躊躇ちゆうちよもなく男のような口調で葉子はこう小さくつぶやいた。「構うものか」そう思いながら葉子は事務長の目使いにも無頓着むとんじやくに、快活な足どりでいそいそと田川夫妻のほうに近づいて行つた。それを事務長もどうすることもできなかった。葉子は三人の前に来ると軽く腰をまげて後れ毛おくげをかき上げながら顔じゆうを蠱惑こわくてき的なほほえみにして

挨拶あいさつした。田川博士の頬ほおにはいち早くそれに応ずる物やさしい表情が浮かぼうとしていた。

「あなたはぜひぶんな乱暴をなさる方かたですのね」

いきなり震えを帯びた冷やかかな言葉が田川夫人から葉子に容赦もなく投げつけられた。それは底意地の悪い挑戦ちようせんてき的な調子で震えていた。田川博士はかせはこのとっさの気まづい場面を繕うため何か言葉を入れてその不愉快な緊張をゆるめようとするらしかったが、夫人の悪意はせき立って募るばかりだった。しかし夫人は口に出してはもうなんにもいわなかった。

女の間に起こる不思議な心と心との交渉から、葉子はなんという事なく、事務長と自分との間にけさ起こったばかりの出来事を、輪郭だけではあるとしても田川夫人が感づいているなど直覚した。ただ一言ひとことではあつたけれども、それは検疫官とトランプをいじった事を責めるだけにしては、激し過ぎ、悪意がこめられ過ぎていることを直覚した。今の激しい言葉は、その事を深く根に持ちながら、検疫医に対する不謹慎な態度をたしなめる言葉のようにして使われているのを直覚した。葉子の心のすみからすみまでを、溜飲りゅういんの下がるような小気味よさが小おどりしつつ走はせめぐった。葉子は何をそんなに事々しくた

しなめられる事があるのだろうというような少ししやあしやあした無邪氣な顔つきで、首をかしげながら夫人を見守った。

「航海中とはかくわたし葉子さんのお世話をお頼まれ申しているんですからね」

初めはしとやかに落ち付いていうつもりじゃなかったが、それがだんだん激して途切れがちな言葉になって、夫人はしまいには激動から息氣をさえはずましていた。その瞬間に火のような夫人のひとみと、皮肉に落ち付き払った葉子のひとみが、ぱったり出つくわして小ぜり合いをしたが、また同時に蹴返すように離れて事務長のほうに振り向けられた。

「ごもつともです」

事務長は虻あぶに当惑した熊くまのような顔つきで、柄がらにもない謹慎を装いながらこう受け答えた。それから突然本氣な表情に返って、

「わたしも事務長であつて見れば、どのお客様に対しても責任があるので、御迷惑になるような事はせんつもりですが」

ここで彼は急に仮面を取り去ったようににこにこし出した。

「そうむきになるほどの事でもないじゃありませんか。たかが早月さつきさんに一度か二度愛あい嬌きょうをいうていただいて、それで検疫の時間が二時間から違うのですもの。いつでもここ

で四時間の以上もむだにせにやなんのですて」

田川夫人がますますせき込んで、矢継ぎ早にまくしかけようとするのを、事務長は事もなげに軽々とおつかぶせて、

「それにしてからがお話はいかがです、部屋で伺いしましょうか。ほかのお客様の手前もいかがです。博士、例のとおり狭つこい所ですが、甲板ではゆっくりもできませんで、あそこでお茶でも入れましょう。早月さんあなたもいかがです」

と笑い笑い言つてからくるリツと葉子のほうに向き直つて、田川夫妻には気が付かないように頓狂な顔をちよつとして見せた。

横浜で倉地のあとに続いて船室への階子段を下る時始めて嗅ぎ覚えたウイスキーと葉巻とのまじり合つたような甘たるい一種の香いが、この時かすかに葉子の鼻をかすめたと思つた。それをかぐと葉子の情熱のほむらが一時にあり立てられて、人前では考えられもせぬような思いが、旋風のごとく頭の中をこそいで通るのを覚えた。男にはそれがどんな印象を与えたかを顧みる暇もなく、田川夫妻の前ということもはばからずに、自分では醜いに違いないと思うような微笑が、覚えず葉子の眉の間に浮かび上がった。事務長は小むずかしい顔になつて振り返りながら、

「いかがです」ともう一度田川夫妻を促した。しかし田川博士は自分の妻のおとなげないのをあわれむ物わかりのいい紳士という態度を見せて、態ていよく事務長にことわりをいって、夫人と一緒にそこを立ち去った。

「ちよつといらつしやい」

田川夫妻の姿が見えなくなると、事務長はろくろく葉子を見むきもしないでこういうながら先に立った。葉子は小娘のようにいそいそとそのあとについて、薄暗い階はしごだん子段にかかると男におぶいかかるようにしてこぜわしく降りて行つた。そして機関室と船員室との間にある例の暗い廊下を通つて、事務長が自分の部屋の戸をあけた時、ぱつと明るくなつた白い光の中に、nonchalantなdiabolicな男の姿を今さらのように一種の畏れおそとなつたことをこめて打ちながめた。

部屋にはいると事務長は、田川夫人の言葉でも思い出したらしくめんどくさそうに吐と息いき一つして、帳簿を事務テーブルの上にほうりなげておいて、また戸から頭だけつき出して、「ボーイ」と大きな声で呼び立てた。そして戸をしめきると、始めてまともに葉子に向きなかつた。そして腹をゆすり上げて続けさまに思い存分笑つてから、

「え」と大きな声で、半分は物でも尋ねるように、半分は「どうだい」といったような調

子でいって、足を開いて *akimbo* をして突つ立ちながら、ちよいと無邪気に首をかしげて見せた。

そこにボーイが戸の後ろから顔だけ出した。

「シャンペンだ。船長の所にバーから持つて来さしたのが、二三本残ってるよ。十の字三つぞ（大至急という軍隊用語）。……何がおかしいかい」

事務長は葉子のほうを向いたままこういつたのであるが、実際その時ボーイは意味ありげににやにや薄笑いをしていた。

あまりに事もなげな倉地の様子を見てみると葉子は自分の心の切なさ^{せつ}に比べて、男の心を恨めしいものに思わずにいられなくなった。けさの記憶のまだ生々^{なまなま}しい部屋^{へや}の中を見るにつけても、激しく嵩^{たか}ぶつて来る情熱が妙にこじれて、いても立ってもいられないもどかしさが苦しく胸に逼^{せま}るのだった。今まではまるきり眼中になかった田川夫人も、三等の女客の中で、処女とも妻ともつかぬ二人^{ふたり}の二十女も、果ては事務長にまつわりつくあの小娘のような岡までが、写真で見た事務長の細君と一緒にあって、苦しい敵意を葉子の心にあり立てた。ボーイにまで笑いにされて、男の皮を着たこの好色の野獣のなぶりものにされているのではないか。自分の身も心もただ一息にひしぎつぶすかと見えるあの恐

ろしい力は、自分を征服すると共にすべての女に対しても同じ力で働くのではないか。そのたくさんの女の中の影の薄い一人の女として彼は自分を扱っているのではないか。自分には何物にも代え難く思われるけさの出来事があつたあとでも、ああ平気でいられるそののんきさはどうしたものだろう。葉子は物心がついてから始終自分でも言い現わす事のできない何物かを逐い求めていた。その何物かは葉子のすぐ手近にありながら、しっかりとつかむ事はどうしてもできず、そのくせいつでもその力の下に傀儡のようにあてもなく動かされていた。葉子はけさの出来事以来なんとなく思いあがつていたのだ。それはその何物かがおぼろげながら形を取って手に触れたように思ったからだ。しかしそれも今から思えば幻影に過ぎないらしくもある。自分に特別な注意も払っていなかったこの男の出来心に対して、こつちから進んで情をそるような事をした自分はなんという事をしたのだろう。どうしたらこの取り返しのない自分の破滅を救う事ができるのだろうと思つて来ると、一秒でもこのいまわしい記憶のさまよう部屋の中にはいたたまれないように思え出した。しかし同時に事務長は断ちがたい執着となつて葉子の胸の底にこびりついていた。この部屋をこのままで出て行くのは死ぬよりもつらい事だった。どうしてもはつきりと事務長の心を握るまでは……葉子は自分の心の矛盾に業を煮やししながら、自分をさげすみ果

てたような絶望的な怒りの色を口びるのあたりに宿して、黙ったまま陰鬱^{いんうつ}に立っていた。今までそわそわと小魔^{しょうま}のように葉子の心をめぐりおどっていたはなやかな喜び——それはどこに行ってしまったのだろうか。

事務長はそれに気づいたのか気がつかないのか、やがてよりかかりのないまるい事務いすに尻^{しり}をすえて、子供のような罪のない顔をしながら、葉子を見て軽く笑っていた。葉子はその顔を見て、恐ろしい大胆な悪事を赤児^{あかご}同様の無邪気さで犯しうる質^{たち}の男だと思った。葉子はこんな無自覚な状態にはとてもなつていられなかった。一足ずつ先^{さき}を越されているのかしらという不安までが心の平衡をさらに狂わした。

「田川博士は馬鹿^{ばか}ばかりで、田川の奥さんは利口ばかりというんだ。はゝゝゝゝ」

そういつて笑つて、事務長は膝^{ひざ}がしらははつしと打った手をかえして、机の上にある葉巻をつまんだ。

葉子は笑うよりも腹だたしく、腹だたしいよりも泣きたいくらいになつていた。口びるをぶるぶると震わしながら涙でもたまつたように輝く目は剣^{けん}を持って、恨みをこめて事務長を見入ったが、事務長は無頓着^{むとんじやく}に下を向いたまま、一心に葉巻に火をつけている。葉子は胸^{おそ}に抑えあまる恨みつらみをいい出すには、心があまりに震えて喉^{のど}がかわききつてい

るので、下くちびるをかみしめたまま黙っていた。

倉地はそれを感じているのだのにと葉子は置きざりにされたようなやり所のないさびしさを感じていた。

ボーイがシャンペンとコップとを持つてはいって来た。そして丁寧にそれを事務テーブルの上に置いて、さっきのように意味ありげな微笑をもらしながら、そつと葉子をぬすみ見た。待ち構えていた葉子の目はしかしボーイを笑わしてはおかなかった。ボーイはぎよつとして飛んでもない事をしたというふうに、すぐ慎み深い給仕らしく、そこそこ部屋を出て行った。

事務長は葉巻の煙に顔をしかめながら、シャンペンをついで盆を葉子のほうにさし出した。葉子は黙って立つたまま手を延ばした。何をするにも心にもない作り事をしているようだった。この短い瞬間に、今までの出来事でいかげん乱れていた心は、身の破滅がとうとう来てしまったのだというおそろしい予想に押しひしがれて、頭は氷で巻かれたように冷たく気うとくなつた。胸から喉もとにつきあげて来る冷たいそして熱い球のようなものを雄々しく飲み込んでも飲み込んでも涙がややともすると目がしらを熱くうるおして来た。薄手のコップに泡を立てて盛られた黄金色の酒は葉子の手の中で細かいさざ波を立て

てた。葉子はそれを気取られまいと、しいて左の手を軽くあげて鬢の毛をかき上げながら、コップを事務長のと打ち合わせたが、それをきっかけに願でもほどけたように今までからく持ちこたえていた自制は根こそぎくずされてしまった。

事務長がコップを器用に口びるにあてて、仰向きかげんに飲みほす間、葉子は杯を手にもったまま、ぐびりぐびりと動く男の喉を見つめていたが、いきなり自分の杯を飲まないまま盆の上にかえして、

「よくもあなたはそんなに平気でいらつしやるのね」

と力をこめるつもりでいったその声はいくじなくも泣かんばかりに震えていた。そして堰を切ったように涙が流れ出ようとするのを糸切り歯でかみきるばかりにしいてくいとめた。

事務長は驚いたらしかった。目を大きくして何かいおうとするうちに、葉子の舌は自分でも思い設けなかった情熱を帯びて震えながら動いていた。

「知っています。知っていますとも……。あなたはほんとに……ひどい方ですのね。わたしなんにも知らないと思つてらつしやるのね。えゝ、わたしは存じません、存じません、ほんとに……」

何をいうつもりなのか自分でもわからなかった。ただ激しい嫉妬が頭をぐらぐらさせるばかりに嵩じて来るのを知っていた。男がある機会には手傷も負わないで自分から離れて行く……そういうまいましい予想で取り乱されていた。葉子は生来こんなみじめなまっ暗な思いに捕えられた事がなかった。それは生命が見す見す自分から離れて行くのを見守るほどみじめでまっ暗だった。この人を自分から離れさすくらいなら殺してみせる、そう葉子とはとつさに思いつめてみたりした。

葉子はもう我慢にもそこに立っていられなくなった。事務長に倒れかかりたい衝動をしていてじつとこらえながら、きれいに整えられた寝台にようやく腰をおろした。美妙的な曲線を長く描いてのどかに開いた眉根は痛ましく眉間に集まって、急にやせたかと思うほど細った鼻筋は恐ろしく感傷的な痛々しさをその顔に与えた。いつになく若々しく装った服装までが、皮肉な反語のように小股の切れあがったやせ形なその肉を痛ましく虐待した。長い袖の下で両手の指を折れよとばかり組み合わせて、何もかも裂いて捨てたいヒステリックな衝動を懸命に抑えながら、葉子は唾も飲みこめないほど狂おしくなってしまうていた。

事務長は偶然に不思議を見つけた子供のような好奇心なあきれた顔つきをして、葉子の姿を見やっていたが、片方のスリッパを脱ぎ落としたその白足袋の足もとから、やや乱れた

束髪^{そくはつ}までをしげしげと見上げながら、

「どうしたんです」

といぶかるごとく聞いた。葉子はひつたくるようにさそくに返事をしようとしたけれども、どうしてもそれができなかった。倉地はその様子を見ると今度はまじめになった。そして口の端^{はた}まで持つて行つた葉巻をそのままトレイの上に置いて立ち上がりながら、

「どうしたんです」

ともう一度聞きなおした。それと同時に、葉子も思いきり冷酷に、

「どうもしやしません」

という事ができた。二人の言葉がもつれ返つたように、二人の不思議な感情ももつれ合つた。もうこんな所にはいない、葉子はこの上の圧迫には堪^たえられなくなって、はなやかな裾^{すそ}を蹴^け乱^{みだ}しながらまっしぐらに戸口のほうに走り出ようとした。事務長はその瞬間に葉子のなやかな肩をさえぎりとめた。葉子はさえぎられて是非なく事務テーブルのそばに立ちすくんだが、誇りも恥も弱さも忘れてしまっていた。どうにでもなれ、殺すか死ぬかするのだ、そんな事を思うばかりだった。こらえにこらえていた涙を流れるに任せながら、事務長の大きな手を肩に感じたままに、しゃくり上げて恨めしそうに立っていたが、手近

に飾つてある事務長の家族の写真をみると、かつと氣がのぼせて前後のわきまえもなく、それを引つたくるとともに両手にあらん限りの力をこめて、人殺しでもするような氣負いでした。ずたに引き裂いた。そしてみくたになつた写真の屑くずを男の胸も透とおれと投げつけると、写真のあたつたその所にかみつもしかねまじき狂亂の姿となつて、捨て身に武者ぶりついた。事務長は思わず身を退ひいて両手を伸ばして走りよる葉子をせき止めようとしたが、葉子はわれにもなく我武者がむしゃにすり入つて、男の胸に顔を伏せた。そして両手で肩の服地を爪つめも立てよとつかみながら、しばらく齒をくいしばつて震えているうちに、それがだんだんすすり泣きに変わつて行つて、しまいににはさめぎめと声を立てて泣きはじめた。そしてしばらくは葉子の絶望的な泣き声ばかりが部屋へやの中の静かさをかき乱して響いていった。

突然葉子は倉地の手を自分の背中に感じて、電氣にでも触れたように驚いて飛びのいた。倉地に泣きながらすりついた葉子が倉地からどんなものを受け取らねばならぬかは知れきつていたのに、優しい言葉でもかけてもらえるかのごとく振る舞つた自分の矛盾にあきて、恐ろしさに両手で顔をおおいながら部屋のすみに退さがつて行つた。倉地はすぐ近寄つて来た。葉子は猫ねこに見込まれたカナリヤのように身もだえしながら部屋の中を逃げにかか

つたが、事務長は手もなく追いつがって、葉子の二の腕を捕えて力まかせに引き寄せた。葉子も本氣にあらん限りの力を出してきからつた。しかしその時の倉地はもうふだんの倉地ではなくなっていた。けさ写真を見ていた時、後ろから葉子を抱きしめたその倉地が目ざめていた。怒った野獸に見る狂暴な、防ぎようのない力があらしのように男の五体をさいなむらしく、倉地はその力の下にうめきもがきながら、葉子にまっしぐらにつかみかかった。

「またおれをばかにしやがるな」

という言葉がくいしばった齒の間から雷のように葉子の耳を打った。

あゝこの言葉——このむき出しな有頂点な興奮した言葉こそ葉子が男の口から確かに聞こうと待ち設けた言葉だったのだ。葉子は乱暴な抱擁の中にそれを聞くとともに、心のすみに軽い余裕のできたのを感じて自分というものがどこかのすみに頭をもたげかけたのを覚えた。倉地の取った態度に対して作為のある応対ができそうにさえなつた。葉子は前どおりすすり泣きを続けてはいたが、その涙の中にはもう偽りのしづくすらまじっていた。

「いやです放して」

こういつた言葉も葉子にはどこか戯曲的な不自然な言葉だった。しかし倉地は反対に葉

子の一語一語に酔いしれて見えた。

「だれが離すか」

事務長の言葉ははじめにもかすれおのいていた。葉子はどんどん失った所を取り返して行くように思った。そのくせその態度は反対にますますたよりなげなやる瀬ないものになつていた。倉地の広い胸と太い腕との間に羽^はがい^はに抱きしめられながら、小鳥のようにぶるぶると震えて、

「ほんとうに離してくださいまし」

「いやだよ」

葉子は倉地の接吻^{せつぶん}を右に左によけながら、さらに激しくすすり泣いた。倉地は致命傷を受けた獣^{けもの}のようにうめいた。その腕には悪魔のような血の流れるのが葉子にも感ぜられた。葉子は程^{ほど}を見計らっていた。そして男の張りつめた情欲の糸が絶ち切れんばかりに緊張した時、葉子はふと泣きやんできつと倉地の顔を振り仰いだ。その目からは倉地が思いもかけなかった鋭い強い光が放たれていた。

「ほんとうに放していただきます」

ときつぱりいって、葉子は機敏にちよつとゆるんだ倉地の手をすりぬけた。そしていち

早く部屋を横筋かいに戸口まで逃げのびて、ハンドルに手をかけながら、

「あなたはけさこの戸に鍵をおかけになって、……それは手籠めです……わたし……」

といつて少し情に激してうつむいてまた何かいい続けようとするらしかったが、突然戸をあけて出て行ってしまった。

取り残された倉地はあきれてしばらく立っているようだったが、やがて英語で乱暴な呪を口走りながら、いきなり部屋を出て葉子のあとを追って来た。そしてまもなく葉子の部屋の所に来てノックした。葉子は鍵をかけたまま黙って答えないでいた。事務長はなお二三度ノックを続けていたが、いきなり何か大声で物をいいながら船医の興録の部屋にはいるのが聞こえた。

葉子は興録が事務長のさしがねでなんとかいいに来るだろうとひそかに心待ちにしていた。ところがなんともいつて来ないばかりか、船医室からは時々あたりをはばからない高笑いさえ聞こえて、事務長は容易にその部屋を出て行きそうな気配もなかった。葉子は興奮に燃え立ついらした心でそこにいる事務長の姿をいろいろ想像していた。ほかの事の一つも頭の中にはいつて来なかった。そしてつくづく自分の心の変りかたの激しさに驚かずにはいられなかった。「定子！ 定子！」葉子は隣にいる人を呼び出すような気

で小さな声を出してみた。その最愛の名を声にまで出してみても、その響きの中には忘れていた夢を思い出したほどの反応こたえもなかった。どうすれば人の心というものはこんなにまで変わり果てるものだろう。葉子は定子をあわれむよりも、自分の心をあわれむために涙ぐんでしまった。そしてなんの気なしに小卓の前に腰をかけて、大切なものの中にしまっておいた、そのころ日本では珍しいファウンテン・ペンを取り出して、筆の動くままにそこにあつた紙きれに字を書いてみた。

「女の弱き心につけ入りたもうはあまりに酷むじきお心とただ恨めしく存じ参らせ候そあらわ妾の運命はこの船に結ばれたる奇くしきえにしや候そうらいけん心がらとは申せ今は過去のすべて未来のすべてを打ち捨ててただ目の前の恥ずかしき思いに漂うばかりなる根なし草の身となり果て参らせ候を事もなげに見やりたもうが恨めしく恨めしく死」

となんのくふうもなく、よく意味もわからないで一瀉いつしやせんり千里に書き流して来たが、「死」という字に來ると、葉子はペンも折れよといらいらしくその上を塗り消した。思いのままを事務長にいつてやるのは、思い存分自分をもてあそべといつてやるのと同じ事だった。葉子は怒りに任せて余白を乱暴にいたずら書きでよごしていた。

と、突然船医の部屋から高々と倉地の笑い声が聞こえて来た。葉子はわれにもなく頭つむりを

上げて、しばらく聞き耳を立ててから、そつと戸口に歩み寄つたが、あとはそれなりまた静かになった。

葉子は恥ずかしげに座にもど戻つた。そして紙の上に思い出すままに勝手な字を書いたり、形の知れない形を書いてみたりしながら、ずきんずきんと痛む頭をぎゅつと肘ひじをついた片手で押えてなんという事もなく考えつづけた。

念が届けば木村にも定子にもなんの用があるう。倉地の心さえつかめばあとは自分の意い地じ一つだ。そうだ。念が届かなければ……念が届かなければ……届かなければあらゆるものに用がなくなるのだ。そうしたら美しく死のうねえ。……どうして……私はどうして……けれども……葉子はいつのまにか純粹に感傷的になつていた。自分にもこんなおぼこな思いが潜んでいたかと思うと、抱いてなでさすつてやりたいほど自分がかわゆくもあつた。そして木部と別れて以来絶えて味わわなかつたこの甘い情緒に自分からほだされおぼれて、心しんじゅう中ちゆうでもする人のような、恋に身をまかせる心安さにひたりながら小机に突つ伏してしまつた。

やがて酔いつぶれた人のように頭つむりをもたげた時は、とうに日がかげつて部屋の中にははなやかに電燈がともつていた。

いきなり船医の部屋の戸が乱暴に開かれる音がした。葉子ははっと思った。その時葉子の部屋の戸にどたりと突きあたった人の気配がして、「早月さん」と濁って塩がれた事務長の声がした。葉子は身のすくむような衝動を受けて、思わず立ち上がったたじろぎながら部屋のすみに逃げかくれた。そしてからだじゅうを耳のようにしていた。

「早月さんお願いだ。ちよつとあけてください」

葉子は手早く小机の上の紙を屑かごになげすて、ファウンテン・ペンを物陰にほうりこんだ。そしてせかせかとあたりを見回したが、あわてながら眼窓のカーテンをしめきつた。そしてまた立ちすくんだ、自分の心の恐ろしさにまどいながら。

外部では握り拳で続けさまに戸をたたいている。葉子はそわそわと裾前をかき合わせ、肩越しに鏡を見やりながら涙をふいて眉をなでつけた。

「早月さん!!」

葉子はややしばしとつおいつ躊躇していたが、とうとう決心して、何かあわてくさつて、鍵をがちがちやりながら戸をあけた。

事務長はひどく酔つてはいって来た。どんなに飲んでも顔色もかえないほどの強酒な倉地が、こんなに酔うのは珍しい事だった。締めきった戸に仁王立ちによりかかつて、冷

然とした様子で離れて立つ葉子をまじまじと見すえながら、

「葉子さん、葉さんが悪ければ早月さんだ。早月さん……僕のする事はするだけの覚悟があつてするんですよ。僕はね、横浜以来あなたに惚^ほれていたんだ。それがわからないあなたじゃないでしょう。暴力？ 暴力がなんだ。暴力は愚かなこった。殺したくなれば殺しても進んぜるよ」

葉子はその最後の言葉を聞くと暝眩^{めまい}を感じるほど有頂天になった。

「あなたに木村さんというのが付いてるくらいは、横浜の支店長から聞かされとるんだが、どんな人だか僕はもちろん知りませんさ。知らんが僕のほうがあなたに深惚^{ふかぼ}れしとる事だけは、この胸三寸でちゃんと知つとるんだ。それ、それがわからん？ 僕は恥も何もさらけ出していつとるんですよ。それでもわからんですか」

葉子は目をかがやかしながら、その言葉をむさぼった。かみしめた。そしてのみ込んだ。こうして葉子に取って運命的な一日は過ぎた。

その夜船はビクトリヤに着いた。倉庫の立ちならんだ長い棧橋に“Car to the Town Fare 15¢”と大きな白い看板に書いてあるのが夜目にもしるく葉子の眼窓めまどから見やられた。米国への上陸が禁ぜられているシナの苦力クリーがここから上陸するのと、相当の荷役とで、船の内外は急に騒々そうぞうしくなった。事務長は忙しいと見えてその夜はついに葉子の部屋へやに顔を見せなかった。そこいらが騒々しくなればなるほど葉子はたえようのない平和を感じた。生まれて以来、葉子は生に固着した不安からこれほどまできれいに遠ざかりうるものとは思ひも設けていなかった。しかもそれが空疎な平和ではない。飛び立つておどりたいほどの ecstasy を苦もなく押えうる強い力の潜んだ平和だった。すべての事に飽き足たった人のように、また二十五年にわたる長い苦しい戦いに始めて勝つて兜かぶとを脱いだ人のように、心にも肉にも快い疲労を覚えて、いわばその疲れを夢のように味わいながら、なよなよとソファに身を寄せて灯火を見つめていた。倉地がそこにいないのが浅い心残りだった。けれどもなんといつても心安かった。ともすれば微笑が口びるの上をさざ波のようにひらめき過ぎた。

けれどもその翌日から一等船客の葉子に対する態度は手のひらを返したように変わってしまった。一夜の間にこれほどの変化をひき起こす事のできる力を、葉子は田川夫人のほ

かに想像し得なかつた。田川夫人が世に時めく良人おとこを持つて、人の目に立つ交際をして、女盛りといい条、もういくらか下り坂であるのに引きかえて、どんな人の配偶にしてみても恥ずかしくない才能と容貌ようぼうとを持った若々しい葉子のたよりなげな身の上だが、二人に近づく男たちに同情の軽重を起こさせるのはもちろんだった。しかし道徳はいつでも田川夫人のような立場にある人の利器で、夫人はまたそれを有利に使う事を忘れない種類の人であつた。そして船客たちの葉子に対する同情の底に潜む野心——はかない、野心ともいえないほどの野心——もう一ついい換かゆれば、葉子の記憶に親切な男として、勇悍ゆうかんな男として、美貌びぼうな男として残りたいというほどの野心——に絶望の断定を与える事によつて、その同情を引つ込めさせる事のできるのも夫人は心得ていた。事務長が自己の勢力範囲から離れてしまった事も不快の一つだった。こんな事から事務長と葉子との関係は巧妙な手段でいち早く船中に伝えられたに違いない。その結果として葉子はたちまち船中の社交から葬られてしまった。少なくとも田川夫人の前では、船客の大部分は葉子に対して疎よそ々しい態度をして見せるようになった。中にもいちばんあわれなのは岡だった。だれがなんと告げ口したのか知らないが、葉子が朝おそく目をさまして甲板かんばんに出て見ると、いつものように手欄てすりによりかかつて、もう内海になつた波の色をながめていた彼は、葉子の姿

を認めるや否や、ふいとその場をはずして、どこへか影を隠してしまった。それからというものの、岡はまるで幽霊のようだった。船の中にいる事だけは確かだが、葉子がどうかしてその姿を見つけたと思うと、次の瞬間にはもう見えなくなっていた。そのくせ葉子は思わぬ時に、岡がどこかで自分を見守っているのを確かに感ずる事がたびたびだった。葉子はその岡をあわれむ事すらもう忘れていた。

結句船の中の人たちから度外視されるのを気安い事とまでは思わないでも、葉子がかかる結果にはいっこう無頓着^{むとんじやく}だった。もう船はきようシヤトルに着くのだ。田川夫人やそのほかの船客たちのいわゆる「監視」の下に苦^{もと}々^{にがにが}しい思いをするのもきよう限りだ。そう葉子は平気で考えていた。

しかし船がシヤトルに着くという事は、葉子にほかの不安を持ちきたさずにはおかなかった。シカゴに行つて半年か一年木村と連れ添うほかはあるまいとも思った。しかし木部の時でも二か月とは同棲^{どうせい}していなかったとも思った。倉地と離れては一日でもいられそうにはなかった。しかしこんな事を考えるには船がシヤトルに着いてからでも三日や四日の余裕はある。倉地はその事は第一に考えてくれているに違いない。葉子は今の平和をしいてこんな問題でかき乱す事を欲しなかったばかりでなくとてもできなかった。

葉子はそのくせ、船客と顔を見合わせるのが不快でならなかったので、事務長に頼んで船橋に上げてもらった。船は今瀬戸内せとうちのような狭い内海を動揺もなく進んでいた。船長はビクトリアで備いやと入れた水先案内みずさきと二人ならんで立っていたが、葉子を見るといつものとおり顔をまっ赤かにしながら帽子を取って挨拶あいさつした。ビスマークのような顔をして、船長より一がけも二がけも大きい白髪の水先案内はふと振り返ってじつと葉子を見たが、そのまま向き直って、

「Charmin' little lassie ! what is that ?」

とスコットランド風ふうな強い発音で船長に尋ねた。葉子にはわからないつもりでいったのだ。船長があわてて何かささやくと、老人はからからと笑ってちよつと首を引つ込ませながら、もう一度振り返って葉子を見た。

その毒気なくからからと笑う声が、恐ろしく気に入ったばかりでなく、かわいて晴れ渡った秋の朝の空となんともいえない調和をしていると思ひながら葉子は聞いた。そしてその老人の背中でもなでてやりたいような気になった。船は小動きこゆるもせずにアメリカ松はの生え茂った大島小島の間を縫みって、舷側げんそくに来てぶつかるさざ波の音ものどかだった。そして昼近くなつてちよつとした岬みさきをくると船がかわすと、やがてポート・タウンセンドに

着いた。そこでは米国官憲の検査が型ばかりあるのだ。くずした^{がけ}の土で埋め立てをして造った、棧橋まで小さな漁村で、四角な箱に窓を明けたような、生々^{なまなま}しい一色のペンキで塗り立てた二三階建ての家^や並み^なが、けわしい斜面に沿うて、高く低く立ち連なつて、岡の上には水上げの風車が、青空に白い羽根をゆるゆる動かしながら、かつたんこつととのんきらしく音を立てて回つていた。鷗^{かもめ}が群れをなして猫^{ねこ}に似た声でなきながら、船のまわりを水に近くのだかに飛び回るのを見るのも、葉子には絶えて久しい物珍しさだった。あめや^{あめや}飴屋の呼び売りのような声さえ町のほうから聞こえて来た。葉子はチャート・ルームの壁にもたれかかつて、ぽかぽかとさす秋の日の光を頭から浴びながら、静かな恵み深い心で、この小さな町の小さな生活の姿をながめやつた。そして十四日の航海の間に、いつのまにか海の心を心としていたのに気がついた。放埒^{ほうらち}な、移り気^ぎな、想像も及ばぬパッションにのたうち回つてうめき悩むあの大海原^{おおうなばら}——葉子は失われた楽園を慕い望むイヴのように、静かに小さくうねる水の皺^{しわ}を見やりながら、はるかな海の上の旅路を思いやつた。

「早月さん、ちよつとそこからでいい、顔を貸してください」

すぐ下で事務長のこういう声が聞こえた。葉子は母に呼び立てられた少女のように、うれしさに心をときめかせながら、船橋の手欄^{てすり}から下を見おろした。そこに事務長が立つて

いた。

「One more over there, look!」

こういいながら、米国の税関吏らしい人に葉子を指さして見せた。官吏はうなずきながら手帳に何か書き入れた。

船はまもなくこの漁村を出発したが、出発するとまもなく事務長は船橋にのぼって来た。

「Here we are! Seattle is as good as reached now.」

船長にともなく葉子にともなくいつて置いて、水先案内と握手しながら、

「Thanks to you.」

と付け足した。そして三人でしばらく快活に四方山よもやまの話をしていたが、ふと思い出した

ように葉子を顧みて、

「これからまた当分は目が回るほど忙しくなるで、その前にちよつと御相談があるんだが、下に来てくれませんか」

といった。葉子は船長にちよつと挨拶あいさつを残して、すぐ事務長のあとに続いた。階子はしごだ段を降りる時でも、目の先に見える頑がんじょう丈な広い肩から一種の不安が抜け出て来て葉子に逼せまる事はもうなかった。自分の部屋へやの前まで来ると、事務長は葉子の肩に手をかけて

戸をあけた。部屋の中には三四人の男が濃く立ちこめた煙草たばこの煙の中に所狭く立ったり腰をかけたりにしていた。そこには興録の顔も見えた。事務長は平気で葉子の肩に手をかけたままはいって行った。

それは始終事務長や船医と一かたまりのグループを作つて、サルンの小さなテーブルを囲んでウイスキーを傾けながら、時々他の船客の会話に無遠慮な皮肉や茶々を入れたりする連中だった。日本人が着るといかにもいや味に見えるアメリカ風の背広も、さして取つてつけたようには見えないほど、太平洋を幾度も往来したらしい人たちで、どんな職業に従事しているのか、そういう見分けには人一倍鋭敏な觀察力を持つてゐる葉子にすら見当がつかなかった。葉子がいって行つても、彼らは格別自分たちの名前を名乗るでもなく、いちばん安樂な椅子いすに腰かけていた男が、それを葉子に譲つて、自分は二つに折れるように小さくなつて、すでに一人腰ひとりかけてゐる寢台に曲がりこむと、一同はその様子に声を立てて笑つたが、すぐまた前どおり平氣な顔をして勝手な口をきき始めた。それでも一座は事務長には一目置いちもくいてゐるらしく、また事務長と葉子との関係も、事務長から残らず聞かされてゐる様子だった。葉子はそういう人たちの間にあるのを結句氣安く思った。彼らは葉子を下級船員のいわゆる「姉御」あねご扱いにしていた。

「向こうに着いたらこれで悶着^{もんちやく}ものだぜ。田川^{たがわ}の噂^{うわさ}め、あいつ、一味^{ひとみ}噂^{うわさ}すらずにおく
まいて」

「因業^{いんごう}な生まれだなあ」

「なんでも正面からぶつ突かつて、いさくさいわせず決めてしまふほかはないよ」

などと彼らは戯談^{じようだん}ぶつた口調で親身^{しんみ}な心持ちをいい現わした。事務長は眉^{まゆ}も動かさず、机によりかかつて黙っていた。葉子はこれらの言葉からそこに居合^{まじ}わす人々の性質や傾向を読み取ろうとしていた。興録のほかに三人いた。その中の一人は甲斐^{かい}斐^き絹^{きぬ}のどてらを着ていた。

「このままこの船でお帰りなさるがいいね」

とそのどてらを着た中年の世渡り巧者^{うかが}らしいのが葉子の顔を窺^{うかが}い窺^{うかが}いうと、事務長は少し屈託^{くつたく}らしい顔をして物^{もの}懶^うげに葉子を見やりながら、

「わたしもそう思うんだがどうだ」

とたずねた。葉子は、

「さあ……」

と生返^{なまへんじ}事をするほかなかった。始めて口をきく幾人もの男の前で、とつかは物をいう

のがさすがに億劫おっくうだった。興録は事務長の意向を読んで取ると、分別ぶんべつぶつた顔をさし出して、

「それに限りますよ。あなた一つ病氣におなりなさりや世話なしですき。上陸したところが急に動くようにはなれない。またそういうからだでは検査けんえきがとやかくやかましいに違いないし、この間のように検疫所でまっ裸にされるような事でも起これば、国際問題だのなんだのって始末におえなくなる。それよりは出帆まで船に寝ていらつしやるほうがいいと、そこは私が大丈夫やりますよ。そしておいて船の出ぎわになってやはりどうしてもいけないといえばそれっきりのもんでさあ」

「なに、田川の奥さんが、木村つていうのに、味噌みそさえしこたますつてくれればいちばんええのだが」

と事務長は船医の言葉を無視した様子で、自分の思うとおりをぶつきらぼうにいつてのけた。

木村はそのくらいな事で葉子から手を引くようなはきはきした氣象の男ではない。これまでもずいぶんいろいろなうわさが耳にはいつたはずなのに「僕はあの女の欠陥も弱点もみんな承知している。私生児のあるのももとより知っている。ただ僕はクリスチャンであ

る以上、なんとでもして葉子を救い上げる。救われた葉子を想像してみたまえ。僕はその時いちばん理想的な better half を持ちうると信じている」といった事を聞いている。東北人のねんじりむつつりしたその氣象が、葉子には第一我慢のしきれない嫌悪の種だったのだ。

葉子は黙ってみんなのいう事を聞いているうちに、興録の軍略がいちばん實際的だと考えた。そしてなれなれしい調子で興録を見やりながら、

「興録さん、そうおっしゃればわたし仮病じやないんですの。この間じゅうから診ていただこうかしらと幾度か思っただんですけども、あんまり大げさらしいんで我慢していましたが、どういふものでしょう……少しは船に乗る前からでしたけれども……お腹のここが妙に時々痛むんですのよ」

というと、寝台に曲がりこんだ男はそれを聞きながらにやりにより笑い始めた。葉子はちよつとその男をにらむようにして一緒に笑った。

「まあ機の悪い時にこんな事をいふもんですから、痛い腹まで探られますわね……じゃ興録さん後ほど診ていただけ？」

事務長の相談というのはこんなたわいもない事で済んでしまった。

ふたり
二人きりになつてから、

「ではわたしこれからほんとうの病人になりますからね」

葉子はちよつと倉地の顔をつついて、その口びるに触れた。そしてシヤトルの市街から起こる煤煙ばいえんが遠くにぼんやり望まれるようになったので、葉子は自分の部屋に歸つた。

そして洋風の白い寝衣ねまきに着かえて、髪を長い編み下げにして寢床にはいった。戯談じやうだんの

ようにして興録に病氣の話をしたものの、葉子は実際かなり長い以前から子宮を害しているらしかった。腰を冷やしたり、感情が激昂げきこうしたりしたあとでは、きつと収縮するよう

な痛みを下腹部に感じていた。船に乗った当座は、しばらくの間は忘れるようにこの不快

な痛みから遠ざかる事ができて、幾年ぶりかで申し所のない健康のよろこびを味わつたの

だったが、近ごろはまただんだん痛みが激しくなるようになって来ていた。半身が痲痺まひし

たり、頭が急にぼーつと遠くなる事も珍しくなかつた。葉子は寢床にはいつてから、軽い

疼いたみのある所をそつと平手でさすりながら、船がシヤトルの波止場はとばに着く時のありさまを

想像してみた。しておかなければならない事が数かぎりなくあるらしかったけれども、何

をしておくという事もなかつた。ただなんでもいいせつせと手当たり次第したくをしてお

かなければ、それだけの心尽くしを見せて置かなければ、目論見もくろみどおり首尾が運ばないよ

うに思つたので、一ぺん横になつたものをまたむくむくと起き上がった。

まずきのう着た派手な衣類がそのまま散らかっているのを畳んでトランクの中にしまいこんだ。臥る時まで着ていた着物は、わざとはなやかな長襦袢や裏地が見えるように衣紋竹に通して壁にかけた。事務長の置き忘れて行つたパイプや帳簿のようなものは丁寧に引き出しに隠した。古藤が木村と自分とにあてて書いた二通の手紙を取り出して、古藤がしておいたように、枕の下に差しこんだ。鏡の前には二人の妹と木村との写真を飾つた。それから大事な事を忘れていたのに気がついて、廊下越しに興録を呼び出して薬びんや病床日記を調えるように頼んだ。興録の持つて来た薬びんから薬を半分がた痰壺に捨てた。日本から木村に持つて行くように託された品々をトランクから取り分けた。その中からは故郷を思い出させるようないろいろな物が出て来た。香いまでが日本というものをほのかに心に触れさせた。

葉子は忙しく働かしていた手を休めて、部屋へやのまん中に立つてあたりを見回して見た。しぼんだ花束が取りのけられてなくなっているばかりで、あとは横浜を出た時のとおりの部屋の姿になっていた。古い記憶が香のようふるにしみこんだそれらの物を見ると、葉子の心はわれにもなくふとぐらつきかけたが、涙もさそわずに淡く消えて行つた。

フォクスルで起重機の音がかすかに響いて来るだけで、葉子の部屋は妙に静かだった。葉子の心は風のない池か沼の面のようにただどんよりとよどんでいた。からだはなんのわけもなくだるく物^{もの}懶^{だら}かった。

食堂の時計が引きしまった音で三時を打った。それを相図のように汽笛がすさまじく鳴り響いた。港にはいった相図をしているのだなと思った。と思うと今まで鈍く脈打つように見えていた胸が急に激しく騒ぎ動き出した。それが葉子の思いも設けぬ方向に動き出した。もうこの長い船旅も終わったのだ。十四五の時から新聞記者になる修業のために来たい来たいと思っていた米国に着いたのだ。来たいとは思いつつもほんとうに来ようとは夢にも思わなかった米国に着いたのだ。それだけの事で葉子の心はもうしみじみとしたものになっていた。木村は狂うような心をして押ししずめながら、船の着くのを埠頭^{ふ頭}に立つて涙ぐみつつ待っているだろう。そう思いながら葉子の目は木村や二人の妹の写真のほうにさまよって行った。それとならば写真を飾っておく事もできない定子の事までが、哀れ深く思いやられた。生活の保障をしてくれる父親もなく、膝^{ひざ}に抱き上げて愛撫^{あいぶ}してやる母親にもはぐれたあの子は今あの池^{いけ}の端^{はた}のさびしい小家で何をしているのだろう。笑っているかと想像してみるのも悲しかった。泣いているかと想像してみるのもあわれだった。

そして胸の中が急にわくわくとふさがって来て、せきとめる暇もなく涙がはらはらと流れ出た。葉子は大急ぎで寝台のそばに駆けよって、枕もとにおいといたハンケチを拾い上げて目がしらに押しあてた。素直な感傷的な涙がただわけもなくあとからあとから流れた。この不意の感情の裏切りにはしかし引き入れられるような誘惑があった。だんだん底深く沈んで哀しくな^{かな}って行くその思い、なんの思いとも定めかねた深い、わびしい、悲しい思い。恨みや怒りをきれいにぬぐい去って、あきらめきつたようにすべてのものをただしみじみとなつかしく見せるその思い。いとしい定子、いとしい妹、いとしい父母、……なぜこんななつかしい世に自分の心だけがこう哀しく一人ぼ^{ひとり}ちなのだろう。なぜ世の中は自分のようなものをあわれむしかたを知らないのだろう。そんな感じの零細な断片がつぎつぎに涙にぬれて胸を引きしめながら通り過ぎた。葉子は知らず知らずそれらの感じにしつかりすがり付こうとしたけれども無益だった。感じと感じとの間には、星のない夜のような、波のない海のような、暗い深い際涯^{はてし}のない悲哀が、愛憎のすべてをただ一色に染めなして、どんよりと広がっていた。生を呪^{のろ}うよりも死が願われるような思いが、逼^{せま}るでもなく離れるでもなく、葉子の心にまつわり付いた。葉子は果ては枕^{まくら}に顔を伏せて、ほんとうに自分のためにさめざめと泣き続けた。

こうして小半時こはんときもたった時、船は棧橋につながれたと見えて、二度目の汽笛が鳴りはためいた。葉子は物もの懶げに頭をもたげて見た。ハンケチは涙のためにしぼるほどぬれて丸まっていた。水夫らが繋つなぎ綱づなを受けたりやつたりする音と、鉦びようくぎ釘ぎを打ちつけた靴くつで甲板かんばんを歩き回る音とが入り乱れて、頭の上はさながら火事場のような騒ぎだった。泣いて泣いて泣き尽くした子供のようなぼんやりした取りとめのない心持ちで、葉子は何を思うともなくそれを聞いていた。

と突然戸外で事務長の、

「ここがお部屋へやです」

という声がした。それがまるで雷か何かのように恐ろしく聞こえた。葉子は思わずぎよつとなつた。準備をしておくつもりでいながらなんの準備もできていない事も思つた。今の心持ちは平気で木村に会える心持ちではなかった。おろおろしながら立ちは上がったが、立ち上がってもどうする事もできないのだと思うと、追いつめられた罪人のように、頭の毛を両手で押えて、髪の毛をむしりながら、寝台の上にがばと伏さってしまった。

戸かどがあいた。

「戸かどがあいた」、葉子は自分自身に救いを求めるように、こう心の中でうめいた。そして

息気もとまるほど身内がしやちこばってしまっていた。

「早月さん、木村さんが見えましたよ」

事務長の声だ。あゝ事務長の声だ。事務長の声だ。葉子は身を震わせて壁のほうに顔を向けた。……事務長の声だ……。

「葉子さん」

木村の声だ。今度は感情に震えた木村の声が聞こえて来た。葉子は気が狂いそうだった。とにかく二人の顔を見る事はどうしてもできない。葉子は二人に背ろを向けます壁のほうにもがきよりながら、涙の暇から狂人のように叫んだ。たちまち高くたちまち低いその震え声は笑っているようにさえ聞こえた。

「出て……お二人ともどうか出て……この部屋を……後生ですから今この部屋を……出てくださいまし……」

木村はひどく不安げに葉子によりそってその肩に手をかけた。木村の手を感じると恐怖と嫌悪とのために身をちぢめて壁にしがみついた。

「痛い……いけません……お腹が……早く出て……早く……」

事務長は木村を呼び寄せて何かしばらくひそひそ話し合っているようだったが、二人な

から足音を盗んでそつと部屋を出て行つた。葉子はなおも息気も絶え絶えに、
 「どうぞ出て……あつちに行つて……」
 といいながら、いつまでも泣き続けた。

一九

しばらくの間^{あいだ}食堂で事務長と通り一ぺんの話でもしているらしい木村が、ころを見計ら
 つて再度葉子の部屋^{へや}の戸をたたいた時にも、葉子はまだ枕^{まくら}に顔を伏せて、不思議な感情の
 渦巻^{うずま}きの中に心を浸していたが、木村が一人^{ひとり}ではいつて来たのに気づくと、始めて弱々し
 く横向きに寝なおつて、二の腕まで袖口^{そでぐち}のまくれたまつ白な手をさし延べて、黙つたま
 ま木村と握手した。木村は葉子の激しく泣いたのを見てから、こらえこらえていた感情が
 さらに嵩^{こう}じたものか、涙をあふれんばかり目がしらにためて、厚ぼったい口びるを震わせ
 ながら、痛々しげに葉子の顔つきを見入つて突つ立つた。

葉子は、今まで続けていた沈黙の惰性で第一口をきくのが物懶^{ものう}かつたし、木村はなんと
 いい出したものか迷う様子で、二人の間^{ふたり}には握手のまま意味深げな沈黙が取りかわされた。

その沈黙はしかし感傷的という程度であるにはあまりに長く続き過ぎたので、外界の刺激に应じて過敏なまでに満干みちひのできる葉子の感情は今まで浸っていた痛烈な動乱から一皮ひとかわ一皮平調に還かえつて、果てはその底に、こう嵩こうじてはいとわしいと自分ですらが思うような冷やかな皮肉が、そろそろ頭を持ち上げるのを感じた。握り合わせたむずかゆいような手を引つ込めて、目もとまでふとんをかぶつて、そこから自分の前に立つ若い男の心の乱れを嘲笑あざわらつてみたいような心にすらなっていた。長く続く沈黙が当然ひき起こす一種の圧迫を木村も感じてうろたえたらしく、なんとかして二人ふたりの間の気まずさを引き裂くような、心の切せつなさを表わす適當の言葉を案じ求めているらしかったが、とうとう涙に潤った低い声で、もう一度、

「葉子さん」

と愛するものの名を呼んだ。それは先ほど呼ばれた時のそれに比べると、聞き違えるほど美しい声だった。葉子は、今まで、これほど切せつな情をこめて自分の名を呼ばれた事はないようにさえ思った。「葉子」という名にきわ立って伝奇的な色彩が添えられたようにも聞こえた。で、葉子はわざと木村と握り合わせた手に力をこめて、さらになんとか言葉をつがせてみたくなつた。その目も木村の口びるに励ましを与えていた。木村は急に弁力を

回復して、

「一日千秋の思いとはこの事です」

とすらすらとなめらかにいつてのけた。それを聞くと葉子はみごと期待に背負^{しよいな}投げをくわされて、その場の滑稽^{こっけい}に思わずふき出そうとしたが、いかに事務長に対する恋におぼれきった女心の残虐さからも、さすがに木村の他意ない誠実を笑いきる事は得^えしないで、葉子はただ心の中で失望したように「あれだからいやになっちまう」とくさくさしながら唧^{かこ}った。

しかしこの場合、木村と同様、葉子も格好な空気を部屋の中に作る事に当惑せずにはいられなかった。事務長と別れて自分の部屋に閉じこもってから、心静かに考えて置こうとした木村に対する善後策も、思いよらぬ感情の狂いからそのままになってしまつて、今になつてみると、葉子はどう木村をもてあつかつていいのか、はつきりした目論見^{もくろみ}はできていなかった。しかし考えてみると、木部孤^{こきよう}と別れた時でも、葉子には格別これという謀略があつたわけではなく、ただその時々^{たたくち}にわがままを振る舞つたに過ぎなかつただけれども、その結果は葉子が何か恐ろしく深い企^{たくら}みと手練^{てくだ}を示したかのように人に取られていた事も思つた。なんとかして漕^こぎ抜けられない事はあるまい。そう思つて、まず落ち付

き払って木村に椅子いすをすすめた。木村が手近にある畳み椅子を取り上げて寝台のそばに来てすわると、葉子はまたしなやかな手を木村の膝ひざの上において、男の顔をしげしげと見やりながら、

「ほんとうにしばらくでしたわね。少しおやつれになったようですわ」

といつてみた。木村は自分の感情に打ち負かされて身を震わしていた。そしてわくわくと流れ出る涙が見る見る目からあふれて、顔を伝つて幾筋となく流れ落ちた。葉子は、その涙の一しずくが気まぐれにも、うつむいた男の鼻の先に宿つて、落ちそうで落ちないのを見やつていた。

「ずいぶんいろいろと苦勞なすつたろうと思つて、気が気ではなかったんですけれども、わたしのほうも御承知のとおりでしょう。今度こちに来るにつけても、それは困つて、ありつたけのものを払つたりして、ようやく間に合わせたくらいだったもんですから……」
なおいおうとするのを木村は忙せわしく打ち消すようにさえぎつて、

「それは充分わかつています」

と顔を上げた拍ひょう子に涙のしずくがぼたりと鼻の先からズボンの上に落ちたのを見た。

葉子は、泣いたために妙に脹はれぼつたく赤くなつて、てらてらと光る木村の鼻の先が急に

気になり出して、悪いとは知りながらも、ともするとそこへばかり目が行った。

木村は何からどう話し出していいかわからない様子だった。

「わたしの電報をビクトリヤで受け取ったでしょうね」

などともてれ隠しのようだった。葉子は受け取った覚えもなくせにいいかげんに、

「えゝ、ありがとうございます」

と答えておいた。そして一時も早くこんな息^{いき}づまるように圧迫して来る二人^{ふたり}の間の

心のもつれからのがれる術^{すべ}はないかと思案していた。

「今始めて事務長から聞いたんですが、あなたが病氣だったといってましたが、いったいどこが悪かったんです。さぞ困ったでしょうね。そんな事とはちっとも知らずに、今が今まで、祝福された、輝くようなあなたを迎えられるとばかり思っていたんです。あなたはほんとうに試練の受けつづけというもんですね。どこでした悪いのは」

葉子は、不用意にも女を捕えてじかづけに病氣の種類を聞きただす男の心の粗雑さを忌みながら、当たらずさわらず、前からあった胃病が、船の中で食物と気候との変わったために、だんだん嵩^{こう}じて来て起きられなくなったようにいい繕^まった。木村は痛ましそうに眉^{まゆ}を寄せながら聞いていた。

葉子はもうこんな程ほどほど々な会話には堪えきれなくなつて来た。木村の顔を見るにつけて思い出される仙せん台時代や、母の死というような事にもかなり悩まされるのをつらく思った。で、話の調子を変えるためにしていくらか快活を装つて、

「それはそうとこちらの御事業はいかが」

と仕事とか様子とかいう代わりに、わざと事業という言葉をつかつてこう尋ねた。

木村の顔つきは見る見る変わった。そして胸のポケットにのぞかせてあつた大きなリッネルのハンケチを取り出して、器用に片手でそれをふわりと丸めておいて、ちゃんと鼻をかんでから、また器用にそれをポケットにもと戻すと、

「だめです」

といかにも絶望的な調子でいったが、その目はすでに笑つていた。サンフランシスコの領事が在留日本人の企業に対して全然冷淡で盲目であるという事、日本人間に嫉視しつしが激しいので、サンフランシスコでの事業の目論見もくろみは予期以上の故障にあつて大体失敗に終わった事、思いきつた発展はやはり想像どおりの米国の西部よりも中央、ことにシカゴを中心として計画されなければならぬという事、幸いに、サンフランシスコで自分の話に乗ってくれるある手堅いドイツ人に取り次ぎを頼んだという事、シヤトルでも相当の店を見いだ

しかけているという事、シカゴに行ったら、そこで日本の名誉領事をしているかなりの鉄物商の店にまず住み込んで米国における取り引きの手心をのみ込むと同時に、その人の資本の一部を動かして、日本との直取り引きを始める算段であるという事、シカゴの住まいはもう決まって、借りるべきフラットの図面まで取り寄せてあるという事、フラットは不経済のようだけれども部屋へやの明いた部分を又貸しをすれば、たいして高いものにもつかず、住まい便利は非常にいいという事……そういう点にかけては、なかなか綿密に行き届いたもので、それをいかにも企業家らしい説服的な口調で順序よく述べて行つた。会話の流れがこう変わつて来ると、葉子は始めて泥どろの中から足を抜き上げたような気軽な心持ちになつて、ずっと木村を見つめながら、聞くとともになしにその話に聞き耳を立てていた。木村の容貌ようぼうはしばらくの間に見違えるほど *reline* されて、元から白かつたその皮膚は何か特殊な洗料で底光りのするほどみがかけられて、日本人とは思えぬまでなめらかなのに、油できれいに分けた濃い黒髪は、西洋人の金髪にはまた見られぬような趣のある対照をその白皙はくせきの皮膚に与えて、カラーとネクタイの関係にも人に気のつかぬ凝りかたを見せていた。

「会いたてからこんな事をいうのは恥ずかしいですけども、実際今度という今度は苦闘

しました。ここまで迎いに来るにもろくろく旅費がない騒ぎでしょう」

といつてさすがに苦しげに笑いにまぎらそうとした。そのくせ木村の胸にはどつしりと重そうな金鎖がかかつて、両手の指には四つまで宝石入りの指輪がきらめいていた。葉子は木村のいう事を聞きながらその指に目をつけていたが、四つの指輪の中に婚約の時取りかわした純金の指輪もまじっているのに気がつく、自分の指にはそれをはめていなかったのを思い出して、何くわぬ様子で木村の膝ひざの上から手を引つ込めて顎あごまでふとんをかぶつてしまった。木村は引つ込められた手に追いつくように椅子いすを乗り出して、葉子の顔に近く自分の顔をさし出した。

「葉子さん」

「何？」

また Love-scene か。そう思って葉子はうんざりしたけれども、すげなく顔をそむけるわけにも行かず、やや当惑していると、おりよく事務長が型ばかりのノックをしてはいつて来た。葉子は寝たまま、目でいそいそと事務長を迎えながら、

「まあようこそ……先ほどは失礼。なんだかくだらないう事を考え出していたもんですから、ついわがままをしてしまつてすみません……お忙しいでしょう」

というと、事務長はからかい半分の冗談をきっかけに、

「木村さんの顔を見るとえらい事を忘れていたのに気がついたで。木村さんからあなたに電報が来とつたのを、わたしやビクトリヤのどさくさでころり忘れとつたんだ。すまん事でした。こんな皺しわになりくさつた」

といいながら、左のポケットから折り目に煙草たばこの粉がはさまってもみくちやになった電報紙を取り出した。木村はさつき葉子けいこがそれを見たと確かにいったその言葉に対して、怪訝けげんな顔つきをしながら葉子を見た。些細ささいな事ではあるが、それが事務長にも関係を持つ事だと思ふと、葉子もちよつとどきまぎせずにはいられなかった。しかしそれはただ一瞬間だった。

「倉地さん、あなたはきよう少しどうかすつていらつしやるわ。それはその時ちゃんと拝見したじやありませんか」

といいながらすばやく目くばせすると、事務長はすぐ何かわけがあるのを氣取けどつたらしく、巧みに葉子にばつを合わせた。

「何？ あなた見た？……おゝそうそう……これは寝ぼけ返つとるぞ、はゝゝゝ」

そして互いに顔を見合わせながら二人ふたりはしたたか笑つた。木村はしばらく二人をかたみ

がわりに見くらべていたが、これもやがて声を立てて笑い出した。木村の笑い出すのを見た二人は無性^{むしよう}におかしくなつてもう一度新しく笑いこけた。木村という大きな邪魔者を目の前に据^すえておきながら、互いの感情が水のように苦もなく流れ通うのを二人は子供らしく楽しんだ。

しかしこんないたずらめいた事のために話はちよつと途切れてしまった。くだらない事に二人からわき出た少し仰^{ぎようさん}山すぎた笑いは、かすかながら木村の感情をそこねたらしかった。葉子は、この場合、なお居残ろうとする事務長を遠ざけて、木村とさし向かいになるのが得策^{とくさく}だと思つたので、程^{ほど}もなくきまじめな顔つきに返つて、枕^{まくら}の下を探つて、そこに入れて置いた古藤の手紙を取り出して木村に渡しながら、

「これをあなたに古藤さんから。古藤さんにはずいぶんお世話になりましたよ。でもあの方^{かた}のぶまさかげんつたら、それはじれつたいほどね。愛や貞の学校の事もお頼みして来たんですけれども心もとないもんよ。きつと今ごろはけんか腰になつてみんなと談判でもしていらつしやるでしょうよ。見えるようですわね」

と水を向けると、木村は始めて話の領分が自分のほうに移つて来たように、顔色をなおしながら、事務長をそつちのけにした態度で、葉子に対しては自分が第一の発言権を持つ

ているといわんばかりに、いろいろと話し出した。事務長はしばらく風向きを見計らって立っていたが突然部屋を出て行った。葉子はすばやくその顔色をうかがうと妙にけわしくなっていた。

「ちよつと失礼」

木村の癖で、こんな時まで妙によそよそしく断わって、古藤の手紙の封を切った。西洋罫紙にペンで細かく書いた幾枚かのかなり厚いもので、それを木村が読み終わるまでには暇がかかった。その間、葉子は仰向けになって、甲板で盛んに荷揚げしている人足らの騒ぎを聞きながら、やや暗くなりかけた光で木村の顔を見やっていた。少し眉根を寄せながら、手紙に読みふける木村の表情には、時々苦痛や疑惑やの色が往ったり来たりした。読み終わってからほっとしたため息とともに木村は手紙を葉子に渡して、

「こんな事をいつてよこしているんです。あなたに見せても構わないとあるから御覧なさい」

といった。葉子はべつに読みたくもなかったが、多少の好奇心も手伝うのでとにかく目を通して見た。

「僕は今度ぐらい不思議な経験をなめた事はない。兄が去って後の葉子さんの一身に関

して、責任を持つ事なんか、僕はしたいと思ってもできはしないが、もし明白にいわせてくれるなら、兄はまだ葉子さんの心を全然占領したものだと思われない」

「僕は女の心には全く触れた事がないといっているほどの人間だが、もし僕の事実だと思ふ事が不幸にして事実だとすると、葉子さんの恋には——もしそんなのが恋といえるなら——だいぶ余裕があると思うね」

「これが女の test というものかと思つたような事があつた。しかし僕にはわからん」

「僕は若い女の前に行くときと変にどぎまぎしてしまつてろくろく物もいえなくなる。ところが葉子さんの前では全く異^{ちが}つた感じで物がいえる。これは考えものだ」

「葉子さんという人は兄がいうとおりに優^{すぐ}れた天賦^{てんぷ}を持つた人のようにも實際思える。しかしあの人はどこか片輪^{かたわ}じやないかい」

「明白にいうと僕はああいふ人はいちばんきらいだけれども、同時にまたいちばんひきつけられる、僕はこの矛盾を解きほごしてみたかったまらな。僕の単純を許してくれたまえ。葉子さんは今までのどこかで道を間違えたのじやないかしらん。けれどもそれにしてはあまり平気だね」

「神は悪魔に何一つ与えなかつたが Attraction だけは与えたのだ。こんな事も思う。：

…葉子さんの Attraction はどこから来るんだろう。失敬失敬。僕は乱暴をいいすぎてるようだ」

「時々には憎むべき人間だと思うが、時々はなんだかかわいそうでたまらなくなる時がある。葉子さんがここを読んだら、おそらく唾つばでも吐きかけたくなるだろう。あの人はかわいそうな人のくせに、かわいそうがられるのがきらいらしいから」

「僕には結局葉子さんが何がなんだかちつともわからない。僕は兄が彼女を選んだ自信に驚く。しかしこうなった以上は、兄は全力を尽くして彼女を理解してやらなければいけないと思う。どうか兄らの生活が最後の栄冠に至らん事を神に祈る」

こんな文句が断片的に葉子の心にしみて行つた。葉子は激しい侮蔑ぶべつを小鼻に見せて、手紙を木村にもじ戻した。木村の顔にはその手紙を読み終えた葉子の心の中を見とおそうとあせるような表情が現われていた。

「こんな事を書かれてあなたどう思います」

葉子は事もなげにせせら笑つた。

「どうも思ひはしませんわ。でも古藤さんも手紙の上では一枚がた男を上げていますわね」
木村の意気込みはしかしそんな事ではごまかされそうにはなかったので、葉子はめんど

うくさくなくて少し険しい顔になった。

「古藤さんのおつしやる事は古藤さんのおつしやる事。あなたはわたしと約束なさった時からわたしを信じわたしを理解してくださいさつていらつしやるんでしょうね」

木村は恐ろしい力をこめて、

「それはそうですとも」

と答えた。

「そんならそれで何もいう事はないじゃありませんか。古藤さんなどのいう事——古藤さんなんぞにわかられたら人間も末ですわ——でもあなたはやっぱりどこかわたしを疑っていらつしやるのね」

「そうじゃない……」

「そうじゃない事があるもんですか。わたしは一たんこうと決めたらどこまでもそれでするのが好き。それは生きてる人間ですもの、こつちのすみあつちのすみと小さな事を捕えてとがめだてを始めたら際限はありませんさ。そんなばかな事したらありませんわ。わたしみたいな気随^{きずい}なわがまま者はそんなふうにされたら窮屈で窮屈で死んでしまうでしょう。わたしがこんなになつたのも、つまり、みんなで寄つてたかつてわたしを疑い抜いた

からです。あなただつてやっぱりその一人かと思つたと心細いもんですのね」

木村の目は輝いた。

「葉子さん、それは疑い過ぎというもんです」

そして自分が米国に来てからなめ尽くした奮闘生活もつまりは葉子というものがあればこそできたので、もし葉子がそれに同情と鼓舞とを与えてくれなかったら、その瞬間に精も根も枯れ果ててしまふに違いないという事を繰り返し繰り返し熱心に説いた。葉子はよそよそしく聞いていたが、

「うまくおっしゃるわ」

と留めをさしておいて、しばらくしてから思い出したように、

「あなた田川の奥さんにおあいなさつて」

と尋ねた。木村はまだあわなかつたと答えた。葉子は皮肉な表情をして、

「いまにきつとおあいになつてよ。一緒にこの船でいらしたんですもの。そして五十川のおばさんがわたしの監督をお頼みになつたんですもの。一度おあいになったらあなたはきつとわたしなんぞ見向きもなさらなくなりますわ」

「どうしてです」

「まあおあいなさつてごらんなさいまし」

「何かあなた批難を受けるような事でもしたんですか」

「えゝえゝたくさんしましたとも」

「田川夫人に？ あゝの賢夫人の批難を受けるとは、いったいどんな事をしたんです」

葉子はさも愛想が尽きたというふうに、

「あゝの賢夫人！」

といいながら高々と笑つた。二人の感情の糸はまたももつれてしまった。

「そんなにあゝの奥さんにあなたの御信用があるのなら、わたしから申しておくほうが早手回しですわね」

と葉子は半分皮肉な半分まじめな態度で、横浜出航以来夫人から葉子が受けた暗々裡の圧迫に尾鰭をつけて語つて来て、事務長と自分との間に何かあたりまえでない関係でもあるような疑いを持つてゐるらしいという事を、他人事でも話すように冷静に述べて行つた。その言葉の裏には、しかし葉子に特有な火のような情熱がひらめいて、その目は鋭く輝いたり涙ぐんだりしてゐた。木村は電火にでも打たれたように判断力を失つて、一部始終をぼんやりと聞いていた。言葉だけにもどこまでも冷静な調子を持たせ続けて葉子はすべて

を語り終わってから、

「同じ親切にも真底しんそこからのと、通り一ぺんのと二つありますわね。その二つがどうかしてぶつかり合うと、いつでもほんとうの親切のほうが悪者わるもの扱いにされたり、邪魔者に見られるんだからおもしろうござんすわ。横浜を出てから三日ばかり船に酔ってしまつて、どうしましようと思つた時にも、御親切な奥さんは、わざと御遠慮なさつてでしょうね、三度三度食堂にはお出になるのに、一度もわたしのほうへはいらしてくださらないのに、事務長つたら幾度もお医者さんを連れて来るんですもの、奥さんのお疑いももつともいへばもつともですの。それにわたしが胃病で寝込むようになってからは、船中のお客様がそれは同情してくださつて、いろいろとしてくださるのが、奥さんには大のお氣に入らなかつたんですの。奥さんだけがわたしを親切にしてくださつて、ほかの方かたはみんな寄つてたかつて、奥さんを親切にして上げてくださる段取りにさえなれば、何もかも無事だったんですけれどもね、中でも事務長の親切にして上げかたがいちばん足りなかつたんですよ」

と言葉を結んだ。木村は口びるをかむように聞いていたが、いまいまいげに、
「わかりましたわかりました」

合点しながらつぶやいた。

葉子は額の生えぎわの短い毛を引っぱっては指に巻いて上目でながめながら、皮肉な微笑を口びるのあたりに浮かばして、

「おわかりになった？ ふん、どうですかね」
と空うそぶいた。

木村は何を思ったかひどく感傷的な態度になっていた。

「わたしが悪かった。わたしはどこまでもあなたを信ずるつもりでいながら、他人の言葉に多少とも信用をかけようとしていたのが悪かったのです。……考えてください、わたしは親類や友人のすべての反対を犯してここまで来ているのです。もうあなたなしにはわたしの生涯は無意味です。わたしを信じてください。きっと十年を期して男になって見せますから……もしあなたの愛からわたしが離れなければならんような事があつたら……わたしはそんな事を思うに堪えない……葉子さん」

木村はこういういながら目を輝かしてすり寄って来た。葉子はその思いつめたらしい態度に一種の恐怖を感じるほどだった。男の誇りも何も忘れ果て、捨て果てて、葉子の前に誓いを立てている木村を、うまうま偽っているのだと思うと、葉子はさすがに針で突くよう

な痛みを鋭く深く良心の一隅ぐうに感ぜずにはいられなかった。しかしそれよりもその瞬間に葉子の胸を押しひしぐように狭せばめたものは、底のない物すごい不安だった。木村とはどうしても連れ添う心はない。その木村に……葉子はおぼれた人が岸べを望むように事務長を思い浮かべた。男というものの女に与える力を今さらに強く感じた。ここに事務長がいてくれたらどんなに自分の勇氣は加わったろう。しかし……どうにでもなれ。どうかしてこの大事な瀬戸を漕こぎぬけなければ浮かぶ瀬はない。葉子はだい大それた謀反むほんにん人の心で木村のcaressを受くべき身構え心構えを案じていた。

二〇

船の着いたその晩、田川夫妻は見舞いの言葉も別れの言葉も残さずに、おおぜいの出迎え人に囲まれて堂々と威儀を整えて上陸してしまった。その余の人々の中にはわざわざ葉子の部屋へやを訪れて来たものが数人はあったけれども、葉子はいかにも親しみをこめた別れの言葉を与えはしたが、あとまで心に残る人としては一人ひとりもいなかった。その晩事務長が来て、狭せまい boudoir のような船室でおそくまでしめじめと打ち語った間に、葉子はふと

二度ほど岡の事を思っていた。あんなに自分を慕っていはしたが岡も上陸してしまえば、詮方なくボストンのほうに旅立つ用意をするだろう。そしてやがて自分の事もいつとはなしに忘れてしまうだろう。それにしてもなんとという上品な美しい青年だったろう。こんな事をふと思ったのもしかし束の間で、その追憶は心の戸をたたいたと思うとはかなくもどこかに消えてしまった。今はただ木村という邪魔な考えが、もやもやと胸の中に立ち迷うばかりで、その奥には事務長の打ち勝ちがたい暗い力が、魔王のように小動きもせず、ずくまっているのみだった。

荷役の目まぐるしい騒ぎが二日続いたあとの絵島丸は、泣きわめく遺族に取り囲まれたうつろな死骸のように、がらんと静まり返って、騒々しい桟橋の雑鬧の間にさびしく横たわっている。

水夫が、輪切りにした椰子の実でよれた甲板を単調に「ごし／＼ごし／＼」とこする音が、時というものをゆるゆるすり減らすやすりのように日がな日ねもす聞こえていた。

葉子は早く早くここを切り上げて日本に帰りたいという子供じみた考えのほかには、おかしいほどそのほかの興味を失ってしまつて、他郷の風景に一瞥を与える事もいとわしく、自分の部屋の中にこもりきつて、ひたすら発船の日を待ちわびた。もつとも木村が毎日米

国という香においを鼻をつくばかり身の回りに漂わせて、葉子を訪れて来るので、葉子はうっかり寢床を離れる事もできなかった。

木村は来るたびごとにぜひ米国の医者健康診断を頼んで、大事なければ思いきって検査官の検査を受けて、ともかくも上陸するようにと勧めてみたが、葉子はどこまでもいいやをいいとおすので、二人の間には時々危険な沈黙が続く事も珍しくなかった。葉子はしかし、いつでも手ぎわよくその場合場合をあやつって、それから甘い歓語を引き出すだけの機才ウィットを持ち合わせていたので、この一か月ほど見知らぬ人の間に立ちまじって、貧乏の屈辱を存分になめ尽くした木村は、見る見る溫柔な葉子の言葉や表情に酔いしれるのだった。カリフォルニアから来る水々しい葡萄ぶどうやバナナを器用な経木きようぎの小籠こかごに盛ったり、美しい花束を携えたりして、葉子の朝化粧あさげしやうがしまったかと思うころには木村が欠かさず尋ねて来た。そして毎日くどくどと興録に葉子の容態を聞きただした。興録はいいかげんな事をいつて一日延ばしに延ばしているのだたまらなくなつて木村が事務長に相談すると、事務長は興録よりもさらに要領を得ない受け答えをした、しかたなしに木村は途方に暮れて、また葉子に帰つて来て泣きつくように上陸を迫るのであった。その毎日のいきさつを夜になると葉子は事務長と話して笑いの種たねにした。

葉子はなんという事なしに、木村を困らしてみたい、いじめてみたいというような不思議な残酷な心を、木村に対して感ずるようになって行つた。事務長と木村とを目の前に置いて、何も知らない木村を、事務長が一流のきびきびした悪辣な手で思うさま翻弄して見せるのをながめて楽しむのが一種の痼疾のようになった。そして葉子は木村を通して自分の過去のすべてに血のしたたる復讐をあえてしようとするのだった。そんな場合に、葉子はよくどこかでうろ覚えにしたクレオパトラの挿話を思い出していた。クレオパトラが自分の運命の窮迫したのを知って自殺を思い立った時、幾人も奴隸を目の前に引き出さして、それを毒蛇の餌食にして、その幾人もの無辜の人々がもだえながら絶命するのを、眉も動かさずに見ていたという挿話を思い出していた。葉子には過去のすべての呪詛が木村の一身に集まっているようにも思いなされた。母の虐待、五十川女史の術数、近親の圧迫、社会の環視、女に対する男の覬覦、女の苟合などという葉子の敵を木村の一身におつかぶせて、それに女の心が企み出す残酷な仕打ちのあらん限りをそそぎかけようとするのであつた。

「あなたは丑の刻参りの藁人形よ」

こんな事をどうかした拍子に面と向かつて木村にいつて、木村が怪訝な顔でその意味

をくみかねているのを見ると、葉子は自分にもわけのわからない涙を目にいつぱいためながらヒステリカルに笑い出すような事もあった。

木村を払い捨てる事によつて、蛇が殻を抜け出ると同じに、自分のすべての過去を葬つてしまうことができるようにも思いなしてみた。

葉子はまた事務長に、どれほど木村が自分の思うままになっているかを見せつけようとする誘惑も感じていた。事務長の目の前ではずいぶん乱暴な事を木村にいたりさせたりした。時には事務長のほうが見兼ねて二人の間をなだめにかかる事さえあるくらいだった。ある時木村の来ている葉子の部屋に事務長が来合わせた事があった。葉子は枕もとの椅子に木村を腰かけさせて、東京を発った時の様子をくわしく話して聞かせている所だったが、事務長を見るといきなり様子をかえて、さもさも木村を疎んじたふうで、

「あなたは向こうにいらしつてちようだい」

と木村を向こうのソファに行くように目でさしずして、事務長をその跡にすわらせた。

「さ、あなたこちらへ」

といって仰向けに寝たまま上目をつかつて見やりながら、

「いいお天気のようにですことね。……あの時々ごとつと雷のような音するのは何?……」

わたしうるさい」

「トロですよ」

「そう……お客様がたんとおありですつてね」

「さあ少しは知つとるものがあるもんだで」

「ゆうべもその美しいお客がいらしたの？　とうとうお話にお見えにならなかったのね」

木村を前に置きながら、この無謀とさえ見える言葉を遠慮会^{えしやく}釈もなくいい出すのには、さすがの事務長もぎよつとしたらしく、返事もろくろくしないで木村のほうに向いて、

「どうですマツキンレーは。驚いた事が持ち上がりおったもんですね」

と話題を転じようとした。この船の航海中シヤトルに近くなつたある日、当時の大統領マツキンレーは凶徒の短銃に斃^{たお}れたので、この事件は米国でのうわさの中心になっているのだった。木村はその当時の模様をくわしく新聞紙や人のうわさで知り合わせていたので、乗り気になつてその話に身を入れようとするのを、葉子はにべもなくさえぎつて、

「なんですねあなたは、貴夫人の話の腰を折つたりして、そんなごまかしくらいではだまされてはいませんよ。倉地さん、どんな美しい方^{かた}です。アメリカ生^{きつすい}粋^きの人ってどんななんでしょうね。わたし、見たい。あわしてくださいましな今度来たら。ここに連れて来て

くださるんですよ。ほかのものなんぞなんにも見たくはないけれど、こればかりはぜひ見ようござんすわ。そこに行くからね、木村なんぞはそりやあやぼなものですことよ」

といって、木村のいるほうをはるかに下目で見やりながら、

「木村さんどう？ こつちにいらしってからちつとは女のお友だちがおできになつて？

Lady Friend というのが？」

「それができんでたまるか」

と事務長は木村の内行ないこうを見抜いて裏書きするように大きな声でいった。

「ところができていたらお慰み、そうでしょう？ 倉地さんまあこうなの。木村がわたしをもらいに来た時にはね。石のように堅くすわりこんでしまつて、まるで命の取りやりでもしかねない談判のしかたですよ。そのころ母は大病で臥ふせっていましたの。なんとか母におつしやつてね、母に。わたし、忘れちゃならない言葉がありましたわ。えゝと……そうそう（木村の口調を上じょうず手にまねながら）『わたし、もしほかの人に心を動かすような事がありましたら神様の前に罪人です』ですつて……そういう調子ですもの」

木村は少し怒気をほのめかす顔つきをして、遠くから葉子を見つめたまま口もきかないでいた。事務長はからからと笑いながら、

「それじゃ木村さん今ごろは神様の前にいくらかげん罪人になつとるでしょう」

と木村を見返したので、木村もやむなく苦^{にが}りきつた笑いを浮かべながら、

「おのれをもつて人を計る筆法ですね」

と答えはしたが、葉子の言葉を皮肉と解して、人前でたしなめるにしてはやや軽すぎるし、冗談と見て笑ってしまうにしては確かに強すぎるので、木村の顔色は妙にぎこちなくこだわつてしまつていつまでも晴れなかつた。葉子は口びるだけに軽い笑いを浮かべながら、胆^{たんじゅう}汁のみなぎつたようなその顔を下目で快げにまじまじとながめやった。そして苦い清涼剤でも飲んだように胸のつかえを透^すかしていた。

やがて事務長が座を立つと、葉子は、眉^{まゆ}をひそめて快からぬ顔をした木村を、しいてまでもとのように自分のそば近くすわらせた。

「いやなやつつちやないの。あんな話でもしていないと、ほかになんにも話の種^{たね}のない人ですの……あなたさぞ御迷惑でしたらうね」

といいながら、事務長にしたように上目に媚^こびを集めてじつと木村を見た。しかし木村の感情はひどくほつれて、容易に解ける様子はなかつた。葉子を故意に威圧しようたくらむわざとな改まりかたも見えた。葉子はいたずら者らしく腹の中でくすくす笑いながら、

木村の顔を好意をこめた目つきでながめ続けた。木村の心の奥には何かいい出してみたいくせに、なんとなく腹の中が見すかされそうで、いい出しかねている物があるらしかったが、途切れがちなが話が小半時も進んだ時、とてつもなく、

「事務長は、なんですか、夜になってまであなたの部屋に話しに来る事があるんですか」

とさりげなく尋ねようとするらしかったが、その語尾はわれにもなく震えていた。葉子は陥穽にかかった無知な獣を憫み笑うような微笑を口びるに浮かべながら、

「そんな事がされますものかこの小さな船の中で。考えてもごらんないまし。さきほどわたしがいったのは、このごろは毎晩夜になると暇なので、あの人たちが食堂に集まって来て、酒を飲みながら大きな声でいろんな話をするんです。それがよくここまで聞こえるんです。それにゆうべあの人が出来なかつたからからかつてやつただけなんですのよ。このごろは質の悪い女までが隊を組むようにしてどつさり船に来て、それは騒々しいんですの。……ほゝゝゝあなたの苦勞性つたらない」

木村は取りつく島を見失つて、二の句がつけないでいた。それを葉子はかわいい目上げて、無邪気な顔をして見やりながら笑つていた。そして事務長がはいつて来た時途切らした話の糸口をみごとに忘れずに拾い上げて、東京を発つた時の模様をまた仔細に話しつ

づけた。

こうしたふうで葛藤^{かつとう}は葉子の手一つで勝手に紛らされたりほごされたりした。

葉子は一人の男^{ひとり}をしつかりと自分の把持^{はじ}の中に置いて、それが猫^{ねこ}が鼠^{ねずみ}でも弄^なぶるように、勝手に弄^なぶって楽しむのをやめる事ができなかったと同時に、時々木村の顔を一目見たばかりで、虫唾^{むしず}が走るほど厭悪^{けんお}の情に駆り立てられて、われながらどうしていいかわからない事もあった。そんな時にはただいちに腹痛を口実にして、一人になって、腹立ち紛れにあり合わせたものを取って床の上にほうったりした。もう何もかもいってしまおう。弄^{もてあそ}ぶにも足らない木村を近づけておくには当たらない事だ。何もかも明らかにして気分だけでもさっぱりしたいと思う事もあった。しかし同時に葉子は戦術家の冷静さをもつて、実際問題を勘定に入れる事も忘れはしなかった。事務長をしつかり自分の手の中に握るまでは、早計に木村を逃がしてはならない。「宿屋きめずに草鞋^{わらじ}を脱ぐ」……母がこんな事を葉子の小さい時に教えてくれたのを思い出したりして、葉子は一人で苦笑^{にがわら}いもした。

そうだ、まだ木村を逃がしてはならぬ。葉子は心の中に書き記^{しる}してでも置くように、上目を使いながらこんな事を思った。

またある時葉子の手もとに米国の切手のはられた手紙が届いた事があつた。葉子は船へなぞあてて手紙をよこす人はないはずだと思つて開いて見ようとしたが、また例のいたずらな心が動いて、わざと木村に開封させた。その内容がどんなものであるかの想像もつかないので、それを木村に読ませるのは、武器を相手に渡して置いて、自分は素手^{すで}で格闘するようなものだつた。葉子はそのに興味を持った。そしてどんな不意な難題が持ち上がるだろうか、心をときめかせながら結果を待った。その手紙は葉子に簡単な挨拶^{あいさつ}を残したまま上陸した岡から来たものだつた。いかにも人柄に不似合^{へた}いな下手な字体で、葉子がひよつとすると上陸を見合わせてそのまま帰るといふ事を聞いたが、もしそうなつたら自分も断然帰朝する。氣違^{き違い}いじみたしわざとお笑いになるかもしれないが、自分にはどう考えてみてもそれよりほかに道はない。葉子に離れて路傍^{ろぼう}の人の間に伍^ごしたらそれこそ狂氣になるばかりだろう。今まで打ち明けなかったが、自分は日本でも屈指な豪商の身内に一人子^{ひとりご}と生まれながら、からだが弱いのと母が継母であるために、父の慈悲から洋行する事になつたが、自分には故国が慕われるばかりでなく、葉子のように親しみを覚えさしてくれた人はないので、葉子なしには一刻も外国の土に足を止めている事はできぬ。兄^{きょうだ}

弟^いのない自分には葉子が前世^{ぜんせい}からの姉とより思われぬ。自分をあわれんで弟と思つてく

れ。せめては葉子の声の聞こえる所顔の見える所にいるのを許してくれ。自分はそれだけのあわれみを得たいばかりに、家族や後見人のそしりもなんとも思わずに帰国するのだ。事務長にもそれを許してくれるように頼んでもらいたい。という事が、少し甘い、しかし眞率な熱情をこめた文体で長々と書いてあったのだった。

葉子は木村が問うままに包まず岡との関係を話して聞かせた。木村は考え深く、それを聞いていたが、そんな人ならぜひあつて話をしてみたいといひ出した。自分より一段若いと見ると、かくばかり寛大になる木村を見て葉子是不快に思った。よし、それでは岡を通して倉地との関係を木村に知らせてやろう。そして木村が嫉妬しつとと憤怒ふんぬとでまっ黒になつて歸つて来た時、それを思うままあやつつてまた元の鞆に納めて見せよう。そう思つて葉子は木村のいうままに任せて置いた。

次の朝、木村は深い感激の色をたたえて船に來た。そして岡と会見した時の様子をくわしく物語つた。岡はオリエンタル・ホテルの立派な一室にたった一人でいたが、そのホテルには田川夫妻も同宿なので、日本人の出入りがうるさいといつて困つていた。木村の訪問したというのを聞いて、ひどくなつかしそうな様子で出迎えて、兄でも敬うやまうようになして、やや落ち付いてから隠し立てなく眞率に葉子に対する自分の憧憬しょうけいのほどを打

ち明けたので、木村は自分のいおうとする告白を、他人の口からまざまざと聞くような切^{せつ}な情にほだされて、もらい泣きまでしてしまった。二人は互^{ふたり}いに相あわれむというようななつかしみを感^{かん}じた。これを縁に木村はどこまでも岡を弟とも思^{おも}って親^{おや}しむつもりだ。が、日本に帰る決心だけは思いとどまるように勧めて置いたといった。岡はさすがに育ちだけに事務長と葉子との間のいきさつを想像に任せて、はしたなく木村に語る事はしなかったらしい。木村はその事についてはなんともいわなかった。葉子の期待は全くはずれてしまった。役者^{べた}下手なために、せつかくの芝居^{しばい}が芝居にならずにしまった事を物足らなく思^{おも}った。しかしこの事があつてから岡の事が時々葉子の頭に浮かぶようになった。女にしてもみまほしいかの華^{きや}車^{しゃ}な青春の姿がどうかする^いとい^いしい思^{おも}い出^でとなつて、葉子の心のすみに潜^{ひそ}むようになった。

船がシャトルに着いてから五六日たつて、木村は田川夫妻にも面会する機会を造つた^らしかつた。そのころから木村は突然わき目にもそれと気が付くほど考え深くなつて、ともすると葉子の言葉すら聞き落としてあわてたりする事があつた。そしてある時とうとう一^ひ人胸^との中には納めていられなくなつたと見えて、

「わたしにやあなたがなぜあんな人と近しくするかわかりませんがね」

と事務長の事をうわさのようにいった。葉子は少し腹部に痛みを覚えるのをことさら誇張してわき腹を左手で押えて、眉をひそめながら聞いていたが、もっともらしく幾度もうなずいて、

「それはほんとうにおつしやるとおりですから何も好んで近づきたいとは思わないんですけれども、これまでずいぶん世話になっていますしね、それにああ見えていて思いのほか親切気のある人ですから、ボーイでも水夫でもこわがりながらなついていますわ。おまけにわたしお金まで借りていますもの」

ときも当惑したらしくいうと、

「あなたお金は無しですか」

木村は葉子の当惑さを自分の顔にも現わしていた。

「それはお話したじやありませんか」

「困ったなあ」

木村はよほど困りきつたらしく握った手を鼻の下にあてがって、下を向いたまましばらく思案に暮れていたが、

「いくらほど借りになつているんです」

「さあ診察料や滋養品で百円近くにもなっていますかしらん」

「あなたは金は全く無しですね」

木村はさらに繰り返していつてため息をついた。

葉子は物慣れぬ弟を教えたわるように、

「それに万一わたしの病気がよくならないで、ひとまず日本へでも帰るようになれば、なおお帰りの船の中では世話にならないでしよう。……でも大丈夫そんな事はないと思いますけれども、さきざきまでの考えをつけておくのが旅にあればいちばん大事ですもの」

木村はなおも握った手を鼻の下に置いたなり、なんにもいわず、身動きもせず考え込んでいた。

葉子は術^{すべ}なさそうに木村のその顔をおもしろく思いながらまじまじと見やっていた。

木村はふと顔を上げてしげしげと葉子を見た。何かそこに字でも書いてありはしないかとそれを読むように。そして黙ったまま深々と嘆息した。

「葉子さん。わたしは何から何まであなたを信じているのがいい事なのでしょうか。あなたの身のためばかり思ってもいうほうがいいかとも思うんですが……」

「ではおっしゃってくださいましななんでも」

葉子の口は少し親しみをこめて冗談らしく答えていたが、その目からは木村を黙らせるだけの光が射られていた。軽はずみな事をいやしくもいつてみるがいい、頭を下げさせないでは置かないから。そうその目はたしかにいつていた。

木村は思わず自分の目をたじろがして黙ってしまった。葉子は片意地にも目で続けさまに木村の顔をむちうつた。木村はその答しもとの一つ一つを感じるようにどぎまぎした。

「さ、おっしゃってくださいまし……さ」

葉子はその言葉にはどこまでも好意と信頼とをこめて見せた。木村はやはり躊躇ちゆうちよしていた。葉子はいきなり手を延ばして木村を寝台に引きよせた。そして半分起き上がったその耳に近く口を寄せながら、

「あなたみたいに水臭い物のおっしゃりかたをなさる方かたもないもんね。なんとも思っ
いらつしやる事をおっしゃってくださいばいいじゃありませんか。……あ、痛い……い
えさして痛くもないの。何を思っ
いらつしやるんだかおっしゃってくださいまし、ね、
さ。なんでしょうねえ。伺いたい事ね。そんな他人行儀は……あ、あ、痛い、おゝ痛い……
……ちよつとここのところを押えてくださいまし。……さし込んで来たよう……あ、あ」

といいながら、目をつぶって、床の上に寝倒れると、木村の手を持ち添えて自分の脾腹ひばらを押えさして、つらそうに齒をくいしばってシーツに顔を埋めた。うす肩でつく息氣いきがかすかに雪せつぱく白のシーツを震わした。

木村はあたふたしながら、今までの言葉などはそちのけにして介抱にかかった。

二一

絵島丸はシヤトルに着いてから十二日目にともづな纜を解いて帰航するはずになっていた。その出発があと三日になった十月十五日に、木村は、船医の興録から、葉子はどうしてもひとまず帰国させるほうが安全だという最後の宣告を下されてしまった。木村はその時にはもう大体覚悟を決めていた。帰ろうと思っている葉子の下したころ心をおぼろげながら見て取って、それを翻す事はできないとあきらめていた。運命に従順な羊のように、しかし執念しゅうねく将来の希望を命にして、現在の不満に服従しようとしていた。

緯度の高いシヤトルに冬の襲いかかって来るさまはすさまじいものだった。海岸線に沿うてはるか遠くまで連続して見渡されるロッキーの山々はもうたつぷりと雪がかかって、

穏やかな夕空に現われ慣れた雲の峰も、古綿のように形のくずれた色の寒い霞あられぐも雲に変わって、人をおびやかす白いものが、今にも地を払って降りおろして来るかと思われた。海ぞいに生えそろうたアメリカ松の翠みどりばかりが毒々しいほど黒ずんで、目に立つばかりで、かつようじゅ潤葉樹の類は、いつのまにか、葉を払い落とした枝先を針のように鋭く空に向けていた。シャツルの町並みがあると思われるあたりからは——船のつながれている所から市街は見えなかった——急に煤煙ばいえんが立ち増さつて、せわしく冬じたくを整えながら、やがて北半球を包んで攻め寄せて来るまっ白な寒気に対しておぼつかない抵抗を用意するように見えた。ポケットに両手をさし入れて、頭を締め気味に、波止場の石畳を歩き回る人々の姿にも、不安と焦躁とのうかがわれるせわしい自然の移り変わりの中に、絵島丸はあわただしい発航の準備をし始めた。絞盤こうばんの歯車のきしむ音が船首と船尾とからやかましく冴え返って聞こえ始めた。

木村はその日も朝から葉子を訪れて来た。ことに青白く見える顔つきは、何かわくわくと胸の中に煮え返る想いおもをまざまざと裏切つて、見る人のあわれを誘うほどだった。背水の陣と自分でもいつているように、亡父の財産をありつたけ金に代えて、手っ払ばらいに日本の雑貨を買い入れて、こちらから通知書一つ出せば、いつでも日本から送つてよこすばか

りにしてあるものの、手もとにはいささかの銭ぜにも残ってはいなかった。葉子が来たならばと金の上にも心の上にもあてにしていたのがみごとにはずれてしまつて、葉子が帰るにつけては、なけなしの所からまたまたなんとかしなければならぬに立つた木村は、二三日のうちに、ぬか喜びも一時の間で、孤独と冬とに囲まれなければならなかったのだ。

葉子は木村が結局事務長にすがり寄つて来るほかに道のない事を察していた。

木村ははたして事務長を葉子の部屋へやに呼び寄せてもらった。事務長はすぐやつて来たが、服なども仕事着のままで何かよほどせわしそうに見えた。木村はまあといつて倉地に椅子いすを与えて、きょうはいつものすげない態度に似ず、折り入つていろいろと葉子の身の上を頼んだ。事務長は始めの忙せわしそうだつた様子に引きかえて、どつしりと腰を据えて正面から例の大きく木村を見やりながら、親身しんみに耳を傾けた。木村の様子の方がかえつてそわそわしくながめられた。

木村は大きな紙入れを取り出して、五十ドルの切手を葉子に手渡しした。

「何もかも御承知だから倉地さんの前でいうほうが世話なしだと思いますが、なんといつてもこれだけしかできないんです。こ、これです」

といつてさびしく笑いながら、両手を出して広げて見せてから、チョッキをたたいた。

胸にかかっていた重そうな金鎖も、四つまではめられていた指輪の三つまでもなくなっていて、たった、一つ婚約の指輪だけが貧乏臭く左の指にはまっているばかりだった。葉子はさすがに「まあ」といった。

「葉子さん、わたしはどうにでもします。男一匹なりどこにころがり込んだからって、

——そんな経験もおもしろいくらいのものです。倉地さん、あなたにはこれまででさえいいかげん世話
うと思うと、面目めんぼくもないんです。あなたにはこれまででさえいいかげん世話
をしていただいてなんともすみませんが、わたしども二人はお打ち明け申したところ、
ふたり
こういうていたらくなんです。横浜へさえおとどけくださればその先はまたどうにでもし
ますから、もし旅費にでも不足しますようでしたら、御迷惑ついでになんとかしてやって
いただく事はできないでしょうか」

事務長は腕組みをしたまままじと木村の顔を見やりながら聞いていたが、

「あなたはちつとも持つとらんですか」

と聞いた。木村はわざと快活にしいて声こゝろ高く笑いながら、

「きれいなもんです」

とまたチョッキをたたくと、

「そりやいかん。何、船賃なんぞいりますものか。東京で本店にお払いになればいいんじやし、横浜の支店長も万事心得とられるんだで、御心配いりませんわ。そりやあなたお持ちになるがいい。外国にいて文^{もん}なしでは心細いもんですよ」

と例の塩^{しお}辛^{から}声^{こえ}でややふきげんらしくいった。その言葉には不思議に重々しい力がこもつていて、木村はしばらくかれこれと押し問答をしていたが、結局事務長の親切を無にする事の気の毒さに、直^すな心からなおいまろと旅中の世話を頼みながら、また大きな紙入れを取り出して切手をたたみ込んでしまった。

「よしよしそれで何もいう事はなし。早月^{さつき}さんはわしが引き受けた」

と不敵な微笑を浮かべながら、事務長は始めて葉子のほうを見返った。

葉子は二人^{ふたり}を目の前に置いて、いつものように見比べながら二人の会話を聞いていた。

あたりまえなら、葉子はたいていの場合、弱いものの味方をして見るのが常だった。どんな時でも、強いものがその強味を振りかざして弱い者を圧迫するのを見ると、葉子はかつとなつて、理が非でも弱いものを勝たしてやりたかった。今の場合木村は単に弱者であるばかりでなく、その境遇もみじめなほどたよりない苦しいものである事は存分に知り抜いていながら、木村に対しての同情は不思議にもわいて来なかった。齡^{とし}の若さ、姿のしなや

かさ、境遇のゆたかさ、才能のはなやかさというようなものをたよりにする男たちの蠱惑^{こわく}の力は、事務長の前では吹けば飛ぶ塵^{ちり}のごとく対照された。この男の前には、弱いものの哀れよりも醜さがさらけ出された。

なんという不幸な青年だろう。若い時に父親に死に別れてから、万事思いのままだった生活からいきなり不自由な浮世のどん底にほうり出されながら、めげもせずにつせと働いて、後ろ指をさされないだけの世渡りをして、だれからも働きのある行く末たのもしい人と思われながら、それでも心の中のさびしさを打ち消すために思い入った恋人は仇^{あだ}し男にそむいてしまっている。それをまたそうとも知らずに、その男の情けにすがって、消えるに決まった約束をのがすまいとしている。……葉子はして自分を説服するようにこう考えてみたが、少しも身にしみた感じは起こって来ないで、ややもすると笑い出したいような気にすらなっていた。

「よしよしそれで何もいう事はなし。早月さんはわしが引き受けた」

という声と不敵な微笑とがどやすように葉子の心の戸を打った時、葉子も思わず微笑を浮かべてそれに応じようとした。が、その瞬間、目ざとく木村の見ているのに気がついて、顔には笑いの影はみじんも現わさなかった。

「わしへの用はそれだけでしよう。じゃ忙^{せわ}しいで行きますよ」

とぶつきらぼうにいつて事務長が部屋を出て行ってしまうと、残った二人は妙にてれて、しばらくは互いに顔を見合わすのとはばかりて黙ったままでいた。

事務長が行ってしまうと葉子は急に力が落ちたように思った。今までの事がまるで芝居^{しばい}でも見て楽しんでいたようだった。木村のやる瀬ない心の中が急に葉子に逼^{せま}つて来た。葉子の目には木村をあわれむとも自分をあわれむとも知れない涙がいつのまにか宿っていた。木村は痛ましげに黙ったままでしばらく葉子を見やっていたが、

「葉子さん今になってそう泣いてもらうちやわたしがたまりませんよ。きげんを直してください。またいい日も回つて来るでしょうから。神を信ずるもの——そういう信仰が今あなたにあるかどうか知らないが——おかあさんがああいふ堅い信者でありなされたし、あなたも仙台時分には確かに信仰を持っていたらと思います、こんな場合にはなおさら同じ神様から来る信仰と希望とを持って進んで行きたいものだと思いますよ。何事も神様は知ってられる……そこにわたしはたゆまない希望をつないで行きます」

決心した所があるらしく力強い言葉でこういった。何の希望！ 葉子は木村の事については、木村のいわゆる神様以上に木村の未来を知りぬいているのだ。木村の希望というの

はやがて失望にそうして絶望に終わるだけのものだ。何の信仰！ 何の希望！ 木村は葉子が据^すえた道を——行きどまりの袋小路を——天使の昇^{のぼ}り降りする雲の梯^{かけはし}のように思っている。あゝ何の信仰！

葉子はふと同じ目を自分に向けて見た。木村を勝手気ままにこづき回す威力を備えた自分はまただれに何者に勝手にされるのだろう。どこかで大きな手が情けもなく容赦もなく冷然と自分の運命をあやつっている。木村の希望がはかなく断ち切れる前、自分の希望がいち早く断たれてしまわないとどうして保障する事ができよう。木村は善人だ。自分は悪人だ。葉子はいつのまにか純な感情に捕えられていた。

「木村さん。あなたはきつと、しまいにはきつと祝福をお受けになります……どんな事があつても失望なさつちやいやですよ。あなたのような善^よい方^{かた}が不幸にばかりおあいになるわけがありませんわ。……わたしは生まれるときから呪^{のろ}われた女なんですから。神、ほんとうは神様を信ずるより……信ずるより憎むほうが似合っているんです……ま、聞いて……でも、わたし卑^{ひき}怯^{きよう}はいやだから信じます……神様はわたしみたいなものをどうなさるか、しっかり目を明いて最後まで見ています」

といっているうちにだれにともなくやさしさが胸いっぱいこみ上げて来るのだった。

「あなたはそんな信仰はないとおっしゃるでしょうけれども……でもわたしにはこれが信仰です。立派な信仰ですもの」

といつてきつぱり思いきつたように、火のように熱く目にたまつたままで流れずにいる涙を、ハンケチでぎゅつと押しぬぐいながら、あんぜん黯然と頭をたれた木村に、

「もうやめましょうこんなお話。こんな事をいつてると、いえばいうほど先が暗くなるばかりです。ほんとに思いきつて不仕合わせな人はこんな事をつべこべと口になんぞ出しはしませんわ。ね、いや、あなたは自分のほうからめいつてしまつて、わたしのいった事ぐらいでなんですわえ、男のくせに」

木村は返事もせずになつさおになつてうつむいていた。

そこに「御免なさい」というかと思うと、いきなり戸をあけてはいつて来たものがあつた。木村も葉子も不意を打たれてきさき氣先をくじかれながら、見ると、いつぞやびようづな錨綱で足をけがした時、葉子の世話になつた老水夫だつた。彼はとうとうびつこ跛脚になつていた。そして水夫のような仕事にはとても役に立たないから、幸いオーランドに小農地を持つてとにかく暮らしを立てている甥をおい尋ねてやっかい厄介になる事になつたので、礼かたがたいとまご暇乞いに来たというのだつた。葉子はあか紅くなつた目を少し恥ずかしげにまたたかせながら、いろ

いろと慰めた。

「何ねこう老いぼれちや、こんな稼かぎ業をやつてゐるがてんでうそなれど、事務長さんとボンスン（水夫長）とがかわいそうだといつて使つてくれるで、いい氣になつたが罰ばちあたつたんだね」

といつて臆おく病びように笑つた。葉子がこの老人をあわれみいたわるさまはわき目もいじらしかつた。日本には伝言を頼むような近親みよりさえない身だというような事を聞くたびに、葉子は泣き出しそうな顔をして合点合点していたが、しまいには木村の止めるのも聞かず寢床から起き上がつて、木村の持つて来た果物くだものをありつたけ籠かごにつめて、

「陸おかに上がればいくらもあるんだろうけれども、これを持つておいで。そしてその中に果物でなくはいつてゐるものがあつたら、それもお前さんに上げたんだからね、人に取られたりしちやいけませんよ」

といつてそれを渡してやつた。

老人が来てから葉子は夜が明けたように始めて晴れやかなふだんの氣分になつた。そして例のいたずららしいにこにこした愛あい嬌きようを顔いちめんにたたえて、

「なんという気さくなんでしょう。わたし、あんなおじいさんのお内儀かみさんになってみたい……だからね、いいものをやっちゃった」

きよとりとしてまじまじ木村のむつとりとした顔を見やる様子は大きな子供とより思えなかった。

「あなたからいただいたエンゲージ・リングね、あれをやりましてよ。だってなんにもないんですもの」

なんともいえない媚こびをつつむおとがいが二重になって、きれいな歯並みが笑いのさざ波みぎわのように口びるの汀に寄せたり返したりした。

木村は、葉子という女はどうしてこうむら気で上うわすべりがしてしまうのだろう、情けないというような表情を顔いちめんにみなぎらして、何かいうべき言葉を胸の中で整えているようだったが、急に思い捨てたというふうで、黙ったままでほっと深いため息をついた。それを見ると今まで珍しく押えつけられていた反抗心が、またもや旋風のように葉子の心に起こった。「ねちねちさつたらない」と胸の中をいらいらさせながら、ついでの事に少しいじめてやろうというたくらみが頭をもたげた。しかし顔はどこまでも前のままの無邪気さで、

「木村さんお土産を買ってちょうだいな。愛も貞もですけども、親類たちや古藤さんなんぞにも何かしないじゃ顔が向けられませんもの。今ごろは田川の奥さんの手紙が五十川のお婆さんの所に着いて、東京ではきつと大騒ぎをしているに違いありませんわ。発つ時には世話を焼かせ、留守は留守で心配させ、ぽかんとしてお土産一つ持たずに帰って来るなんて、木村もいったい木村じゃないかといわれるのが、わたし、死ぬよりつらいから、少しは驚くほどのものを買ってちょうだい。先ほどのお金で相当のものが買れるでしょう」

木村は駄々児をなだめるようにわざとおとなしく、

「それはよろしい、買えとなら買いますが、わたしはあなたがあれをまとまったまま持つて帰つたらと思つているんです。たいていの人は横浜に着いてから土産を買うんですよ。そのほうが實際格好ですからね。持ち合わせもなしに東京に着きなさる事を思えば、土産なんかどうでもいいと思うんですがね」

「東京に着きさえすればお金はどうにでもしますけれども、お土産は……あなた横浜の仕入れものはすぐ知れますわ……御覧なさいあれを」

といって棚の上にある帽子入れのボール箱に目をやった。

「古藤さんに連れて行つていただいてあれを買った時は、ずいぶん吟味したつもりでした

けれども、船に来てから見ているうちにすぐあきてしまいましたの。それに田川の奥さんの洋服姿を見たら、我慢にも日本で買ったものをかぶったり着たりする気にはなれせんわ」

そういつてるうちに木村は棚から箱をおろして中をのぞいていたが、

「なるほど型はちつと古いようですね。だが品はこれならこつちでも上の部ですぜ」

「だからいやですわ。流行おくれとなると値段の張ったものほどみつともないんですもの」
しばらくしてから、

「でもあのお金はあなた御入用ですわね」

木村はあわてて弁解的に、

「いゝえ、あれはどの道あなたに上げるつもりでいたんですから……」

というのを葉子は耳にも入れないふうで、

「ほんとにばかねわたしは……思いやりもない事を申し上げてしまって、どうしましょうねえ。……もうわたしどんな事があつてもそのお金だけはいいただきません事よ。こういうたらだれがなんといったつてだめよ」

ときつぱりいい切つてしまった。木村はもとより一度いい出したらあとへは引かない葉

子の日ごろの性分を知り抜いていた。で、言わず語らずのうちに、その金は品物にして持って帰らすよりほかに道のない事を観念したらしかった。

*

*

*

その晩、事務長が仕事を終えてから葉子の部屋へやに來ると、葉子は何か氣に障さえたふうをしてろくろくもてなしもなかった。

「とうとう形かたがついた。十九日の朝の十時だよ出航は」

という事務長の快活な言葉に返事もなかった。男は怪訝けげんな顔つきで見やっている。

「悪党」

としばらくしてから、葉子は一言ひとことこれだけいって事務長をにらめた。

「なんだ？」

と尻上しりあがりにいって事務長は笑っていた。

「あなたみたいな残酷な人間はわたし始めて見た。木村を御覽なさいかわいそうに。あんなに手ひどくしなくったって……恐ろしい人ってあなたの事ね」

「何？」

とまた事務長は尻上しりあがりに大きな声でいって寢床に近づいて來た。

「知りません」

と葉子はなお怒^{おこ}つて見せようとしたが、いかにも刻みの荒い、単純な、他意のない男の顔を見ると、からだのどこかが揺^ゆられる気がして来て、わざと引き締めて見せた口びるのへんから思わずも笑いの影が潜^{ひそ}み出た。

それを見ると事務長は苦^{にが}い顔と笑つた顔とを一緒にして、

「なんだいくだらん」

といつて、電燈の近所に椅子^{いす}をよせて、大きな長い足を投げ出して、夕刊新聞を大きく開いて目を通し始めた。

木村とは引きかえて事務長がこの部屋に來ると、部屋が小さく見えるほどだった。上向けた靴^{くつ}の大きさには葉子は吹き出したくらいだった。葉子は目でなでたりさすったりするようにして、この大きな子供みたような暴君の頭から足の先までを見やっていた。ごわごわつと時々新聞を折り返す音だけが聞こえて、積み荷があらかた片付いた船室の夜は静かにふけて行つた。

葉子はそうしたままでふと木村を思いやつた。

木村は銀行に寄つて切手を現金に換えて、店の締まらないうちにいくらか買い物をして、

それを小わきにかかえながら、夕食もしたためずに、ジャクソン街にあるという日本人の旅店に帰り着くころには、町々に灯ひがともつて、寒い霧もやと煙との間を労働者たちが疲れた五体を引きずりながら歩いて行くのにたくさん出あっているだろう。小さなストーブに煙の多い石炭がぶしぶし燃えて、けばけばしい電灯の光だけが、むちうつようにがらんとした部屋へやの薄へぎたなさを煌こう々と照らしているだろう。その光の下で、ぐらぐらする椅子いすに腰かけて、ストーブの火を見つめながら木村が考えている。しばらく考えてからさびしうに見るともなく部屋の中を見回して、またストーブの火にながめ入るだろう。そのうちにあの涙の出やすい目からは涙がほろほろとめどもなく流れ出るに違いない。

事務長が音をたてて新聞を折り返した。

木村は膝ひざ頭かしらに手を置いて、その手の中に顔を埋うずめて泣いている。祈っている。葉子は倉地から目を放して、上目を使いながら木村の祈りの声に耳を傾けようとした。途切れ途切れな切せつない祈りの声が涙にしめって確かに……確かに聞こえて来る。葉子は眉まゆを寄せて注意力を集注しながら、木村がほんとうにどう葉子を思っているかをはつきり見窮めようとしたが、どうしても思い浮かべてみる事ができなかった。

事務長がまた新聞を折り返す音を立てた。

葉子ははつとして淀^{よど}みにささえられた木の葉がまた流れ始めたように、すらすらと木村の所作を想像した。それがだんだん岡の上に移って行った。哀れな岡！ 岡もまだ寝ないでいるだろう。木村なのか岡なのかいつまでもいつまでも寝ないで火の消えなかったストーブの前にうずくまっているのは……ふけるままにしみ込む寒さはそつと床を伝わって足の先からはい上がって来る。男はそれにも気が付かぬふうで椅子^{いす}の上になだれている。すべての人は眠っている時に、木村の葉子も事務長に抱かれて安々と眠っている時に……。ここまで想像して来ると小説に読みふけていた人が、ほつとため息をしてばたと書物をふせるように、葉子も何とはなく深いため息をしてはつきりと事務長を見た。葉子の心は小説を読んだ時のとおり無関心の Pathos をかすかに感じているばかりだった。

「おやすみにならないの？」

と葉子は鈴のように涼しい小さい声で倉地にいつてみた。大きな声をするのとはばかられるほどあたりはしんと静まっていた。

「う」

と返事はしたが事務長は煙草^{たばこ}をくゆらしたまま新聞を見続けていた。葉子も黙ってしまった。

ややしばらくしてから事務長もほっとため息をして、

「どれ寝るかな」

といいながら椅子いすから立つて寢床にはいった。葉子は事務長の広い胸に巢食うように丸まって少し震えていた。

やがて子供のようになすやすやと安らかないびきが葉子の口びるからもれて来た。

倉地は暗闇くらやみの中で長い間まんじりともせず大きな目を開いていたが、やがて、

「おい悪党」

と小さな声で呼びかけてみた。

しかし葉子の規則正しく楽しい寝息は露ほども乱れなかった。

真夜中に、恐ろしい夢を葉子は見た。よくは覚えていないが、葉子は殺してはいけないいけないと思いながら人殺しをしたのだった。一方の目は尋常まよに眉の下にあるが、一方のは不思議にも眉の上にある、その男の額から黒血がどくどくと流れた。男は死んでも物すごくにやりにやりと笑い続けていた。その笑い声が木村木村と聞こえた。始めのうちは声が小さかったがだんだん大きくなつて数もふえて来た。その「木村木村」という数限りもない声がうざうざと葉子を取り巻き始めた。葉子は一心に手を振ってそこからのがれよう

としたが手も足も動かなかった。

木村……

木村

木村……

木村

木村……

木村

木村……

木村

木村……

ぞつとして寒気^{さむけ}を覚えながら、葉子^{やみ}は闇の中に目をさました。恐ろしい凶夢のなごりは、ど、ど、ど……と激しく高くうつ心臓に残っていた。葉子は恐怖におびえながら一心に暗い中をおどおどと手探りに探ると事務長の胸に触れた。

「あなた」

と小さい震え声で呼んでみたが男は深い眠りの中にあつた。なんともいえない気味わる

さがこみ上げて来て、葉子は思いきり男の胸をゆすぶってみた。
しかし男は材木のように感じなく熟睡していた。

(前編
了)

青空文庫情報

底本：「或る女 前編」岩波文庫、岩波書店

1950（昭和25）年5月5日第1刷発行

1968（昭和43）年6月16日第27刷改版発行

1998（平成10）年11月16日第42刷発行

入力：真先芳秋

校正：渥美浩子

1999年10月17日公開

2013年1月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

或る女

(前編)

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 有島武郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>